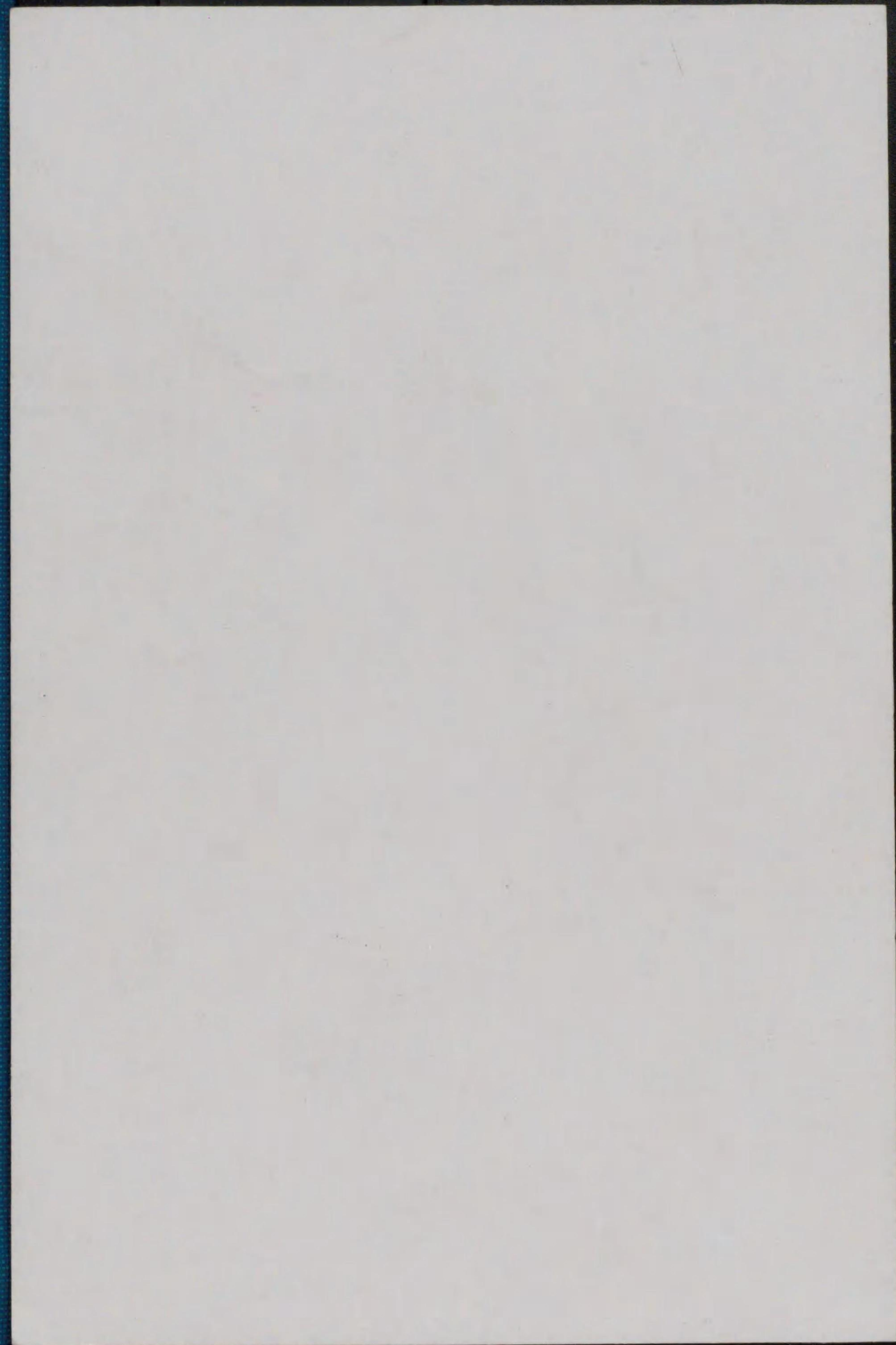


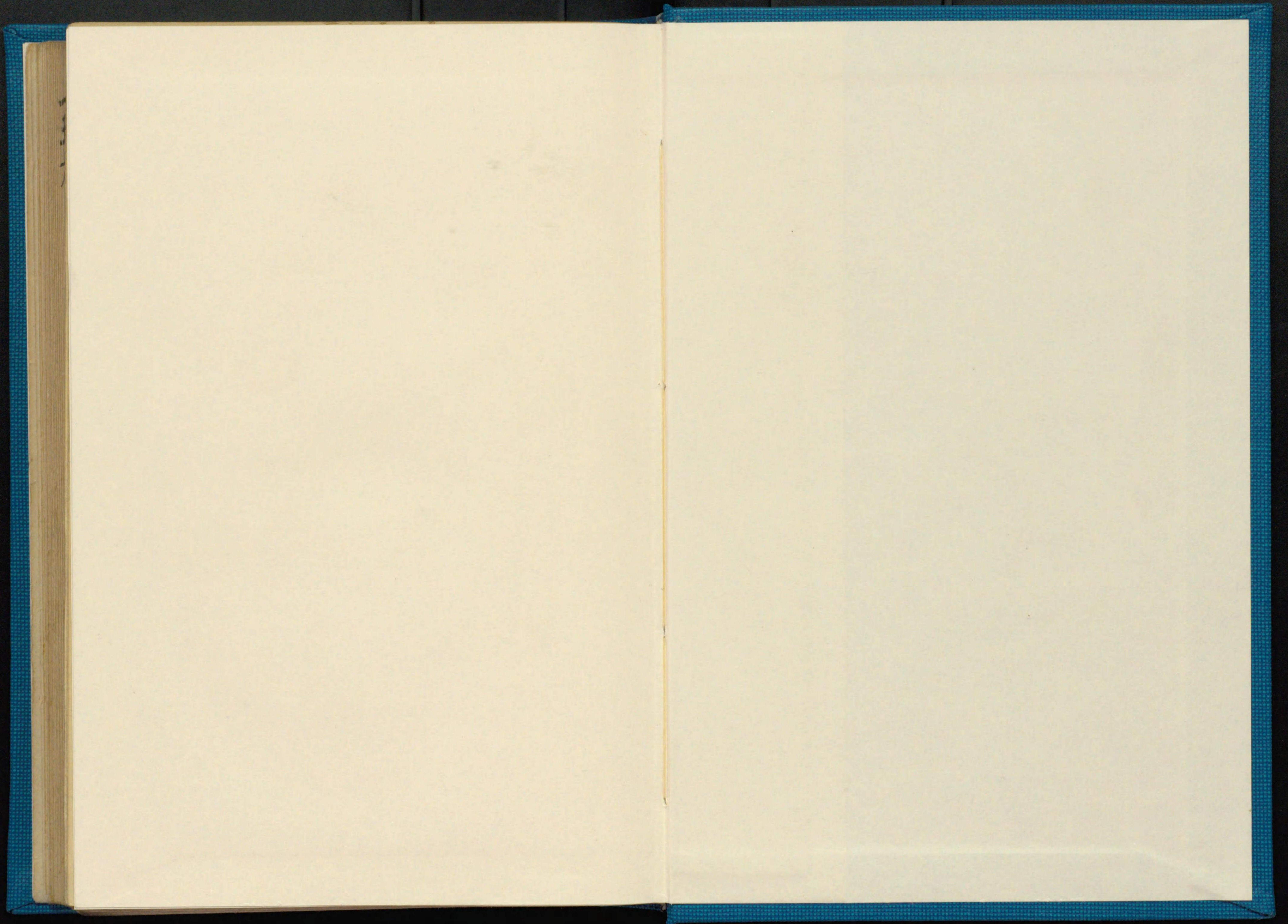
599-288

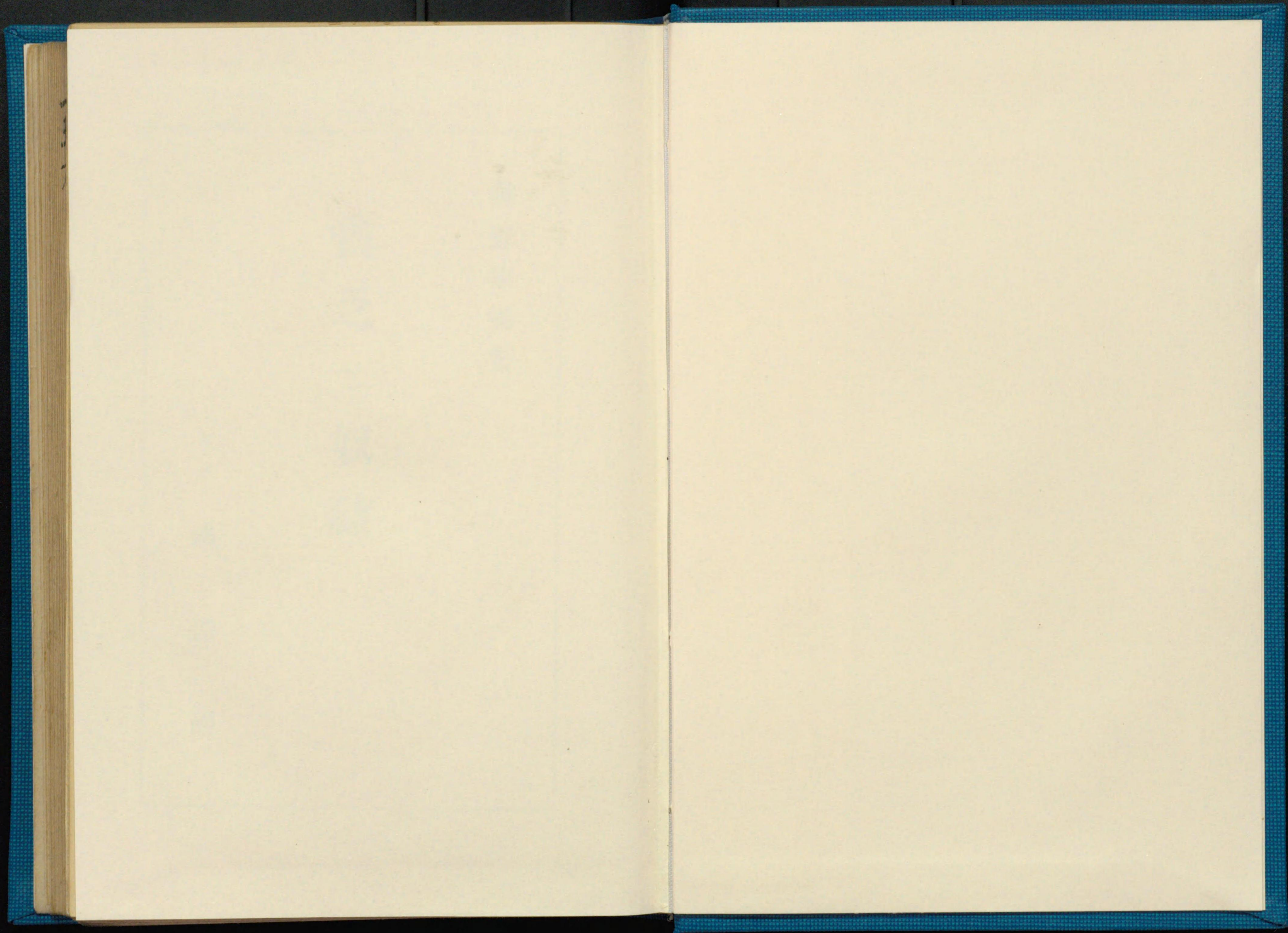


1200501529447

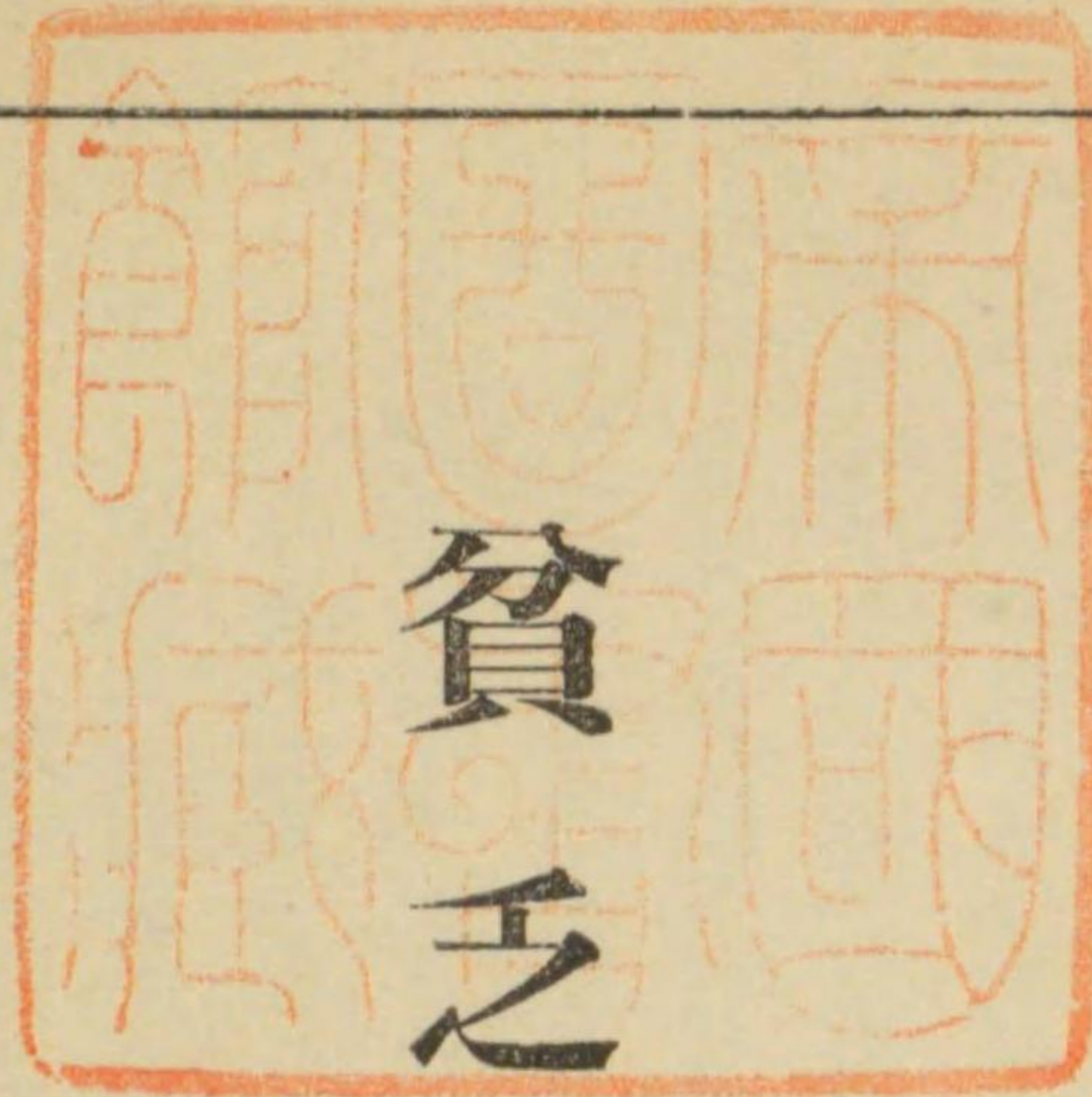
9
807







KE-24-24



海野幸徳著

貧乏

と

奴隷

東京
赤
爐
閣



599-288

卷 頭 に

こゝに、階級問題解決の基礎原理研究として本書を送り出す。

マルクス主義の如く階級的立場にあり、階級と階級とを闘争せしむる方法を以てしては、一の階級に代ふるに他の階級を登場せしむるに過ぎず、畢竟、問題は根本的に解決せられない。若し、階級問題、階級解放問題、引ひて、労働者解放問題が單に特定の階級を解放し、浮び上がらせる如き當面の問題につきるなれば、階級闘争による解放方法も、人類の福祉増進に關し多少の役割をなすか知らぬが、特定階級を偏庇せず、劣弱階級一般の解放を問題とする見地をとれば、目標は俄然一變しなければならぬ必要を感じる。

著者は當面の階級解放を問題とすると共に、一般階級の解放に關心し腐心する。労働者階級の解放といふが如き一階級の問題をこえて、一切の階級の解放が著者の研究題目である。茲に於て、在來の社會理論から急角度を以て回轉しなければならぬ必要を感じる。これ、本書の提供せらるゝ所以。

資本家階級は貴族を打倒して支配階級の地位に登つた。今又、労働者階級は資本家と抗争して、それに交代せんと擬す。社會理論家は一般に労働階級を浮び上らしさへすれば、問題が終りを告げるように考へてゐるが、著者はこの方法を以てしては直ちに次の問題が控へるだけで階級問題一般は毫も解決せざることを覺える。労働者解放が實現されるれば、復又、別の階級問題が擡頭し、今度は労働者を打倒する順序とならう。労働概念のうちには、筋肉労働の外に精神労働をも含み、やがて、それは人類意識、人間意識、人道意識に擴大する萌芽を藏するといふけれども、著者の如く集團主義 (Grupπισmus) の立場にあるものは、畢竟、これを以て一種の遁辭に過ぎないと思ふ。資本家とても、全人類の名によつて自由と平等と博愛とを要求した。今又、労働者は全人類の名によつてその解放を要求しつゝある。集團主義の立場からは、一の集團は闘争によつて他の集團に交代するに過ぎざるものと見る。いづれの集團と雖も階級的立場に低迷する限り、「全人類」の美名を僭するわけには行かない。全人類とは何であるか、それは最早階級などいふ社會的區劃から離れて、人類的立場に移動せしときに始めて用ゐられる用辭ではないか。

著者は人類的立場にあり (在來社會理論家の階級的立場に對して) 集團主義の本質を通じて、如何にして、集團、階級の分立し闘争する状態を協調状態に轉ぜしめんかの研究に没頭す。著者は特定階級の交代や解放を目標としては階級問題は全體として解決し得ざるを感じ、一轉して、すべての階級の總括的解放の問題を俎上に載せんことを欲す。こゝに、すべての奴隷の解放問題が登場する。

すべての奴隷、奴隷階級は如何にして消滅しつくし、平和と愛好と協調との世界は如何にして開展しうべきや。これは特定階級の浮び上る如き問題にあらず、すべての階級の浮び上るべき重大問題である。奴隷は一括如何にして消滅しうべきや。この問題を分析するにあたり、著者は階級的立場から超階級的立場即人類的立場に轉じた。集團の分立する限り、嫌疑と偏見と闘争とが繰り返へされ、諸階級は無意味に交代するのみで、解放せられざる階級は次ぎ／＼に登場し來り、その解放を迫つて毫も解放は終局に達せざるを見る。

著者は地球上より階級闘争を根絶する研究を始め、本書では一般的原理を一と先づ展開した。本書に於ける一般的原理の背後をなすものは先著「階級闘争の研究」であり、これを銜

頭社會に當てはめて考案せしものが「閥の偶像」であるから、讀者諸賢には更らに轉じてこの兩著を吟味せられんことを望む。著者は更らに本書に於ける階級一般問題（これまでのものが特定階級問題なるに對し）の解決方法を移して、後續する二の著書に於て、これを具體化しようとしてゐる。一は階級協調の研究、二は新原則による労働者の解放の方法の研究である。第一に對しては「階級協調の研究」に於て、第二に對しては「労働者解放の方法」に於て近く鄙見が發表せられるであらう。

本書が闘争と協調との研究であり、階級解放の一般的原理の研究なるに對し、「階級協調の研究」では階級が如何にして協調し愛好と平和にいりうるかを分析闡明する。「労働者解放の方法」では在來の階級的立場にある一切の社會理論を不十分なりとなし、人類的立場に移つて労働者解放を披開闡明せんと擬す。

今正に、拙著「次の社會」の公刊を耳にしつゝ、更らに、本書を江湖の坐右に捧げうるを欣幸とする。著者の淺學非才なる偏へに江湖の鞭撻によつて學的聖戰に寸進し得んことを望む。

昭和六年九月初秋

海野社會事業研究所

海 野 幸 徳

貧乏と奴隸

— 貧困哲學の研究 —

目次

第一章 貧乏と奴隸

一 奴隸の淵源……………	一
二 奴隸と餘剩……………	八
三 奴隸の利用……………	一三
四 奴隸と倫理的判斷……………	一五
五 奴隸と世界的集團……………	一九
六 奴隸と集團の融合……………	二六

目次

一

目次	二
参考文献籍	三

第二章 奴隸の出現

一 奴隸の出現	三五
二 支配者・奴隸	三九
三 苦汗労働	四四
四 奴隸と社會的鬭争	五九
五 奴隸産出の方法	六六
参考文献籍	七三

第三章 奴隸の解放

一 奴隸の解放	七五
---------	----

二 全人類の解放	七七
三 権力と正義	七九
四 集團の不道德性	八〇
五 奴隸の消滅	八三
参考文献籍	八六

第四章 社會的傳統の社會心理的起源

一 社會的傳統	八七
二 社會的傳統と具象的社會集團	八九
三 社會的傳統の性質	九四
四 風俗・習慣・道德	九六
五 職業・經濟	一〇四
六 集團的要素と社會的反感	一三〇

七 文 化……………二七

八 社會的傳統の類似及同一……………一六〇

參 考 文 籍……………一六一

第五章 人種的同化

一 人種的特質の同化……………一六三

二 人種的同化の過程……………一七三

三 米國に於ける人種の同化……………一七六

四 協力による同化……………一八九

五 融和協調の原則……………二〇三

六 社會的產物としての奴隸……………二二三

參 考 文 籍……………二二六

第六章 人種的差異の生物學的根據

一 人種的差異……………二二九

二 人種の交雜……………二三三

三 人種的偏見……………二三七

四 白色人種と黄色人種の鬭爭……………二四五

五 人種の接觸……………二五〇

六 人種間協調の生物學的根據……………二五二

七 人種的類同意識……………二六四

八 人種的集團生活の悲劇……………二六六

參 考 文 籍……………二六八

第七章 人間の生理能力による豫測

一 人種の生理能力と人間の生殖減衰……………三七二

二 生殖の社會的原因……………三七三

三 經濟的原因……………三七三

四 教育的原因……………三七五

五 都市化的原因……………三七六

六 宗教的原因……………三七六

七 優生政策としての去勢……………三七九

参考文献……………二八六

策八章 人口増減の豫測……………

二八八

参考文献……………二九六

第九章 集團の接觸と融合……………

一 接觸の限定……………二九八

二 融合の限定……………三二二

三 調和・適合……………三三四

四 隔離・分散……………三三一

五 融合の過程……………三四八

六 今の社會と奴隸……………三五九

参考文献……………三六二

第十章 奴隸の心理……………

一 奴隸の心理……………三六五

二 自由喪失と集團的自決の心理……………三六八

三 自由・自決・人間性……………三七四

四 自由・自決と社會本位との矛盾……………三七七

目次……………七

五 奴隸と自由及自決の剝奪……………三九

六 奴隸と主觀的精神……………六一

七 奴隸と嫉妬……………六三

八 奴隸と内省……………六四

九 奴隸と狡猾……………六四

一〇 奴隸の攻勢……………六五

一一 奴隸と團結……………六五

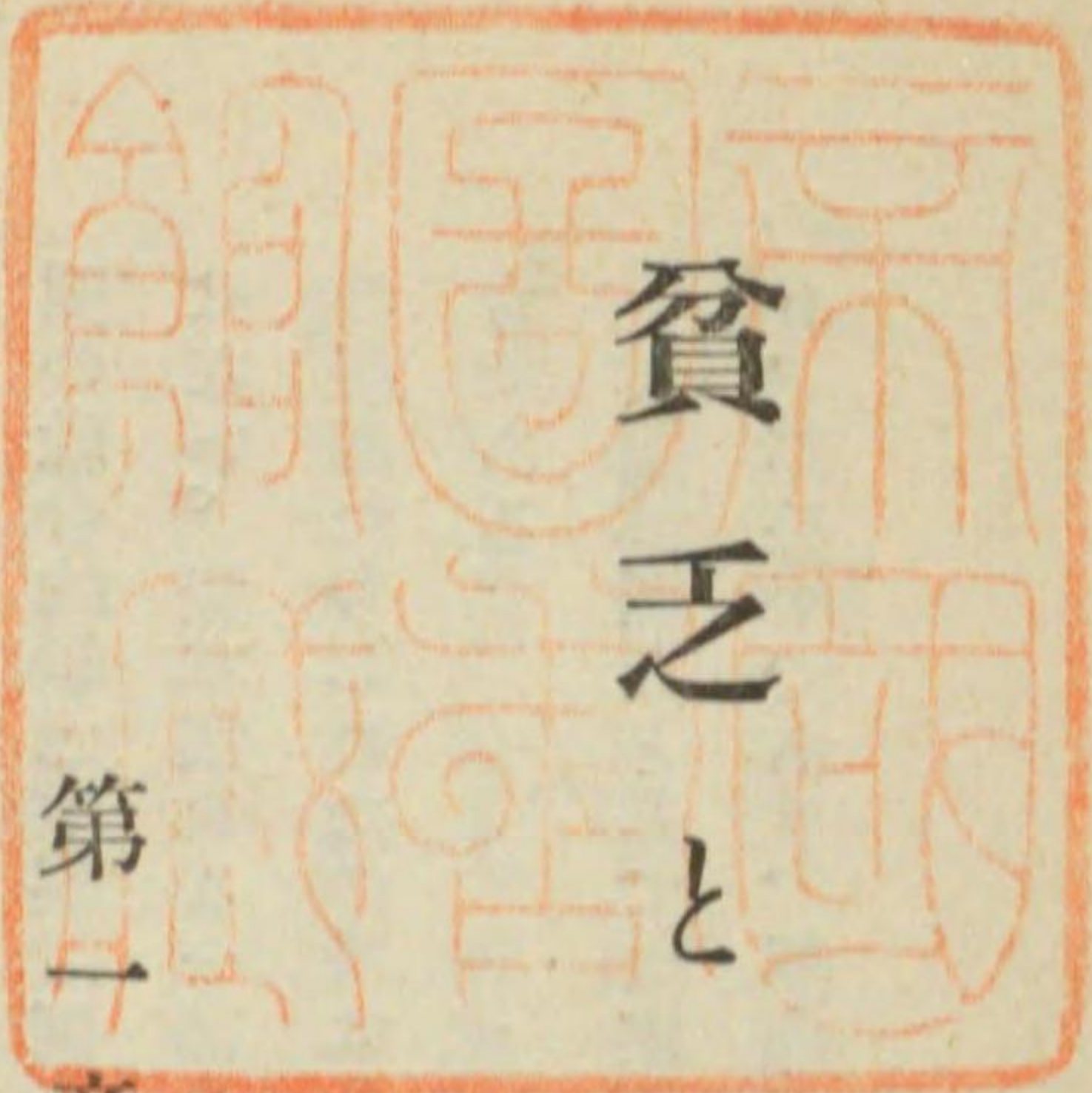
参 考 文 籍……………六六

第十一章 政治的奴隸・經濟的奴隸・文化的奴隸

一 政治的奴隸……………六八

二 經濟的奴隸……………六九

三 文化的奴隸……………七〇



貧乏と奴隸

海野幸徳

第一章 貧乏と奴隸

一 貧乏の淵源

貧乏であるがために奴隸になると考へられて居るが、その反對が寧ろ正しい。奴隸であるが爲めに貧乏になるのである。この場合、貧乏と奴隸とは個人的概念ではなく、社會的概念である。すなはち、貧乏も奴隸も個人の能力や性格に關係がなく、社會の如何によつて顯現するところのものである。そして、その糸口は奴隸から引き出される。社會的に奴隸たるのであり、社會が個人の能力や性格の如何に關はらず、そのあるものを奴隸たるべく運命づける故を

もつて貧乏が現はれるのである。すなはち、貧乏の淵源は社會的である。一の集團がその他の集團をつき落して、その權益を獨占し、それをして占得する何ものも残さざるところに貧乏が登場する。

資本的生産は物的生産要素を供給するものと、人的生産要素を供給するものとの組み合わせによつて可能となる。物的生産要素を供給するものは資本家であり、人的生産要素としての労働力を供給するものは労働者である。この二の組み合わせによつて、生産の仕組みは資本家と労働者との協調とならずして、却つて、兩者の反目となり對立となつて現はれる。これ、社會的集團の社會的利己主義（個人的利己主義に對して）による必然的な結果であつて、毫も、異例ではない。資本家なる一部の人間が特に貪慾であり非道であるが爲めに、資本主義的生産を民衆の怨府たらしめたのではなく、一般に人間の集團生活が斯くの如く貪慾であり、非道であるからである。

人間は個人としては正直であり、公平であり、善良でありうるが、集團としては不正直であり、不公平であり、惡辣を極める。この原則は一般的であり例外といふものはない。資本家なる集團が特に貪慾で非道であるのではなく、労働者も亦貪慾で非道であり、排他的なることに於ては毫も資本家と異りはない。資本家なる集團が利己的であるならば、労働者なる集團も同じく利己的である。兩者共に貪慾で、利己的偏執狂たるに至つては寸分の差異はない。一度び労働者が天下をとれば、その非難しつゞけし貪慾なる資本家と打つて變つて、慈悲深く善良で一視同仁であるかと言へば、天下占領後の労働者は矢張り自己集團にあらゆる利權を集中して、これを毫も他に譲渡しないことについては資本家と聊かも選を異にするものではない。その昔、資本家が素町人階級であつたとき、人類の名によつて、自由と平等と博愛とを呼號したが、一度び、その天下となるや、自由と平等と博愛とは單に資本家階級の間に通ずるばかり、その他一切の階級に對しては不自由と不平等と無慈悲とを押しつけた。今又、労働大衆は全人類の解放の美名の下に、労働階級の解放を呼號して居るが、その目的貫徹のあかつき、労働者の天下ともなれば、全人類は壓制と不公平とに泣き、獨り労働者の利益のみが無遠慮に追求されて寧日がないであらう。

この事はたゞ資本家と労働者とのみに限るにあらず、一切の集團皆然らざるはなき慘狀であ

る。たとへば、學者の集團はその呼號と明かなる背反を示して、學閥の横暴と獨占とを敢てするし、藝術家はその流派に據つて居常猙獰なる鬭争を續けるし、宗教家までが種々のかたまりを造つて鎬を削つて紛争を事にする有様である。如何なる仲間、如何なる集團にあつても公平で正義で善良であるようなことはない。人類世界は徹頭徹尾集團の社會的鬭争に横溢し充滿してゐる。

個人は公平であり、善良でありうるけれども、一度び、公平善良なるべき個人が集團へ入り込み集團人と早變りをすれば、忽ち不公平であり、惡徳を重ねて、偏見と排斥とを事とする。然るに、人間は個人として生きるにあらず。いつでも仲間生活をなし、集團として生きるが故に、一切の人事は集團と集團精神とによつて規律せられ、統制せられないものはない。これ、個人として公平善良であつても集團人として絶えて公正善良なり得ない所以である。こゝに於て、社會的利己主義 (social egoism) が登場して、人類世界を混亂に陥れる。資本家と労働者との鬭争はその一例たるに過ぎない。敢て、資本家が邪慳なわけではない。人間なる動物は仲間生活をすれば、いづれの集團に關はらず、邪惡であり、不善であると決つてゐる。現時の社

會運動家は言を極めて資本家と稱する一部の人間のみが強慾で無慈悲であるが如く絶叫するが、その人達も亦同じ穴の貉たるを知らぬとは愛嬌たつぷりである。

社會的利己主義——これが奴隷の淵源である。社會的利己主義とは集團的利己主義と同一義である。集團の本質、その社會的鬭争性については拙著「階級鬭争の研究」の通讀を乞はなければならぬ。集團的利己主義の發現するところ、その通過するところ、道に一木一草の見るべきなく、恰も蝗の大群が襲來するところ、滿目荒涼たるが如し。集團の利己主義は他の集團に對し餘剩をつくらず、絶對獨占にいたるが故に、集團と集團との争覇によつて生存する人間社會には集團的な暴虐によつて奴隷が現はれ、その結果、貧困者、貧困階級が現はれる。

資本的生産に於て、資本家なる階級が一切の利權を獨占するところに、労働者の貧乏が現はれるが、労働者の貧弱たるは先づそれが奴隷の境涯に沈淪するからである。労働者が自由人として自主たるからには、それ相當の權益を獲得することができるであらうが、それが奴隷の境涯に沈淪すれば、一舉一動、資本家に制壓せられて、御意のまゝにといふことゝならざるを得ないから、餘剩を得ることができない。集團はすべて徹底的な利己主義ときまつて居り、獨

り資本家のみがさうであるのではない。造物者が個人としては人間を公平に善良に造つたが、集團人としては不公平な不善なものとして造り上げたから、集團人としては人間の行動はすべて偏見と差別と排斥と闘争とにつきる。哲學者倫理學者の教科書に述べて居るやうな氣休めは單なる文字の遊戯である。資本家の横暴で利益を獨占するのは一種の集團人たるからで、別に異例とすべきではない。但し、資本家の利權獨占によつて餘剩を生ぜざるが故に、労働者は貧窮するにいたるのである。何故、労働者の獲得すべき餘剰がないかと言へば、労働者は既に奴隷の境涯にあり、一擧手一投足、資本家階級の指揮命令に服しなければならぬからである。

人間は徹底的利己主義者でもなく、博愛家でもない。個人としては公正であり、愛他でありうるし、集團内には犠牲献身も行はれてゐる。但し、世界の人類に對し一視同仁といふようなことは、今の人間には無縁であり、出来ない藝當であり、如何なる選良でも國民的區劃以上に出でず、國際關係に深入りすることのできない窮狀にある。人間の行動は個人としての行動、集團内の行動、及び、集團外的行動の三に分れ、三者の組み合わせによつて進退するのが現實な人間の行動そのものである。個人としては公平であり、不公平であり、善良であり、邪惡であ

り、個性によつて千差萬別であるが、集團内には一樣に親和と愛好と協調とが漲る。如何に獐猛な強盜團と雖も、その仲間同士は親切であり、愛好し協調して相殺傷し合ふようなことはない。如何に強慾非道であるからと言つても、集團内では團員互に提携し協調して、その歩調を亂すようなことはない。これ、強慾非道で、他をして餘剰だに與らしめない暴虐なる階級、閥と雖も、その階級人閥人相互には親切であり、互譲をつくし、協調もつて進む所以である。集團外に對しては打つて變つて不親切となり、惡辣となり、暴虐となつて、喧嘩口論、排斥、闘争をこれ事とする。これによつて、人間の行動は個人的行動と集團内の行動と集團外的行動との組み合わせなるを知る。

集團は絶對利己主義であり、居常、他と闘争して、これを征服せんと焦心す。こゝに、征服する集團と、征服せられる集團との區別が起る。征服せられる集團は、集團の利己主義によつて一切利權を他の集團に占斷され、一に生殺與奪の權を他の集團に握られるから、富裕なるも貧窮するも、一に支配的集團の御意のまゝとなる。然るに、集團は利己的で、貪慾ときまつて居るから、被征服的集團は一切の利權を剝奪されると相場がきまつて居り、その結果、貧乏な

る社會現象が現はれてくる。

これによつて、貧乏は貧乏なるによつて現はれるのであり、貧乏なるが故に奴隷たらざるを知る。

二 奴隷と餘剰

奴隷にも多少の餘剰はある。多少の餘剰とは纔かに生きるに足るだけの餘剰である。わづかに生存するに足る餘剰とは、生理生活乃至動物生活をなす餘剰を意味する。奴隷に餘剰ある生活をなさしむるやうな寛大なる階級、集團は往古來一もない。通常、資本家階級は強慾無慈悲の權化なるが如く言はれて居るが、一切の階級集團はいづれも資本家階級に對し寸分の割引なく強慾であり非道である。そこで、一の例外なく、奴隷となつた人間には餘裕ある生活や快適な生活をなさしめないといふことになる。併し、いくら、強慾非道であるといつても、少くも、生かしてをかなければ奴隷を利用することができぬ。他の用役を收奪(Dienstbarmachung)する目的を達するには、少くも、奴隷を殺さない程度に生かし、それをして勞働に服せし

め、その成果を支配者、征服者の足下に捧げしめなければならぬ。奴隷をして死なない程度の生活をなさしむるもの即ち生理生活乃至動物生活である。すなはち、一日二千四百カロリー乃至三千カロリーの熱量を生じつゝ、露命をつなぎ、一定の勞働力を出しうる程度の養料は何としても與へなければならぬ。わづかに、寒暑を凌ぎ、生命を維持する程度の衣服は何としても與へなければならぬ。雨露を凌ぎ生命を續ける程度の住居は何といつても與へなければならぬ。然らざれば、支配者、征服者に用役をさし、その富貴と權勢を増大する資源を杜塞する。そこで、如何なる集團でも奴隷をして纔かに生理生活動物生活をなさしむるだけの資料給與には讓歩しなければならぬ。世に見る貪慾にして非道なる集團生活はこれ以上のものでも、以下のものでもない。獨り資本家のみが貪慾で非道であり、勞働者を掠奪し、その生活を悲惨ならしむるのではない。如何なる階級如何なる集團でも等しく強慾であり非道であつて、利權と榮譽とを獨占し、それによつて無数の奴隷を生ぜしめ、それによつて貧困を齎らすに毫も異りはなし。

概して、奴隷の占得する餘剰なるものは死なぬ程度で働かせる限度の生活資料である。資本

家が労働者の労働価値を掠奪して、労働者を貧困ならしめるといふけれども、資本家と同一な振舞をなし、剰余価値を奪取しないような階級、集團があらうか。著者は「閥の偶像」に於て仔細に閥の私利、非道、獨占を描寫したが、學閥、財閥といふようなものが寸分と雖も資本家の強慾非道と異つたところがあらうか。剰余価値を奪取するものは資本家ばかりで、資本家は剰余価値掠奪の一手專賣のように言はれて居り、これを宜いことにして、學閥やその他の集團が高所から見物をしてよい氣になつて居るが、それ等の集團の中一として他の剰余価値を強奪しないようなものがあらうか。學閥によつて社會的地位と榮譽との獨占や賣り惜みをなすなどは資本家の剰余価値奪取と性質を異にし、類を異にするであらうか。

一の集團は他の集團の労働価値を能きるだけ吸収し奪取する。原始社會に於ける部落の鬭争は物質的慾望を充足するため物質の獨占到對し行はれたが、その後、慾望が分化し精練するに連れ、社會的地位、榮譽、稱號などを獨占し、賣り惜みする鬭争に轉じ、よつてもつて、階級間、社會的集團、閥間、政黨間に鬭争が熾烈となつた。物質的資料、社會的榮譽及特權の獨占は今を盛りに行はれ、こゝを先途と猛烈を極め、弱者劣者を蹂躪し、はねとばして、強慾非道

を逞ふす。但し、他の階級、他の集團の用役を奪取するには奴隷を殺さないように保存しなければならぬ。この種の保存料が奴隷に對する生活費（賃金、俸給、手當、賞與）となつて現はれる。但し、保存料はわづかに生きるに足るもので、餘裕あるものでも、労働に相當する餘剰を提供するのではない。こゝに奴隷貧困の根本原因がある。自由人としては、任意に労働の成果を取り入れることができるが、奴隷にはそのような權能はない。奴隷はわづかに他によつて惜みながら與へられる労働価値の分前を得るのみであるが、この分け前は保存料たる限りに於てである。資本家が労働者に對して保存料を限り支拂ふので、労働階級から猛烈なる反抗を受けつゝあるが、保存料だけで、御免を蒙らぬが如き支配階級、優等階級、閥なるものがあらうか。唯一つでも例外として提示することができやうか。資本家と雖も労働者から保存料までもまき上げるわけには行かない。但し、それが可能であつたら、強慾非道なる人間たるからにはそれをも敢てなすであらう。たゞ、それが出來ないために、保存料だけは濫々提供するのである。學閥財閥にあつても、他の劣弱者から保存料までも徴發し、まきあげるとあれば、やがて總括的な社會的反噬に會ひ、打倒される危険に逢着するので、濫々可能な範圍に於ける最大

限の獨占を行つて満足して居る。

貧乏であり、社會的地位が低く、榮譽なく、権力がないのは奴隷たるからである。奴隷たるからには所謂手も足も出せぬ。奴隷の分際を以て、手を出したり足を出したりして、富を得、地位を得、榮譽を得、権力を得るなれば、それは異例として目玉が忽ちむきだされる。すべて奴隷には利権を獲得するような道具、手段が與へられて居ない。物的生産要素、生産手段を與へられて居ない。労働者にはそれに相當する労働價値を要求することのできぬように、すべての劣弱者は手足をもぎとられて居るので、労働力に相當するような分前をとることができないのである。學閥より排除されし非特權者はすべて地位、榮譽、権力をうる集團力をもち合さぬ。こゝに貧乏が生じ、地位なく、榮譽なく、権力なき劣弱者ができる。

奴隷に餘剰があるとすれば、それは纒かに生きて行く保存料の範圍に於てである。自由人としてはその能力に従つて富、地位、榮譽、権力をうるであらうが、特權的集團、階級、閥に屬せずといふ單なる自然律は遠慮會釋なく權益を劣弱者より奪ひ去る。そこで奴隷には分相應の保存料だけが濫々分け與へられる。

然らば、貧乏なるが故に奴隷たるにあらず、奴隷たるが故に貧乏たるのである。

三 奴隷の利用

支配階級の生活の向上には奴隷は多々益々利用しなければならぬ。奴隷の利用は畢竟他集團の利用といふことになる。

一の集團は他の集團と協調しなければならぬ。然らざれば、ヨリ優れたる集團生活をなすことができない。個人生活などといふことは人間界にはありえぬ。個人は無能であるから、仲間によつて生活する形式をとつた。こゝに、仲間生活が始まつたが、然らば、今度は、一の集團を以てしては碌な集團生活ができぬから、他の集團と提携し協調して、集團と集團との仲間生活を開始しなければならぬ。第一の仲間生活は個人的であり、個人の寄り集りであつたが、第二の仲間生活は集團的であり、集團の寄り集りである。

支配的な集團は他の奴隷たるべき集團を利用してヨリ良き生存をなすのであらう。もし、二の集團が自他利用し合ふ方が、競争し闘争し合ふよりも、兩者の存立に都合のよいような事情

が生ずれば融合してヨリ大なる集團たるにいたるであらう。鬭争は集團が生きんとする、手段であるが、協調も亦集團の生きんとする他の手段である。最初仲間生活に入つた個人は集團内の衆個人の協調によつてヨリよき生活をなさんとするにいたつた。然らば、この場合、個人が個人として提携して仲間生活に入りしは個人間の協調であり、一度び、集團にまとめられた上で、他の集團と對立するにいたつたものは集團間の鬭争である。但し、兩者共等しく一層ヨリよき生存をなさんがためであることについては毫も異りはない。第一次的協調は個人的なものであつたが、第二次的協調は集團的なものである。一度び鬭争に耽つてゐたこの集團が協調する方が一層ヨリよき生存することを見出すや、今度は提携して聯合するにいたつたのである。かくして、無限に進んで行き、ついに世界大の一大集團たるにいたつて止む。鬭争と云ひ、協調と云ひ、等しく人間がヨリよき生存する方法、手段たるまで、鬭争と協調との目的は毫も異つて居らぬ。鬭争も生存の方便、協調も生存の方便である。然らば、人間は鬭争と協調とを交互に行ひながら、完全なる生存にいたらんことを望み、紛々擾々、彷徨ひまはる動物であると言へる。

四 奴隷と倫理的判断

生存のためには手段を擇ばぬのが人間の常状である。支配的な集團、階級が他の奴隷たるべき集團、階級を利用するのも、ヨリよき生存のため、集團間の鬭争もヨリよき生存のため、集團間の協調もヨリよき生存のためではないか。人間の行動は終始ヨリよき生存をなさんとする方へ向ふ。然らば、人間は終始他を利用して生存せんとするもので、奴隷の利用も亦これがためである。

人間の生存に價值判断をいれるので生存の意識が曖昧となり不明となる。人間が仲間生活に入り、社會的動物となり、同類相親むにいたつたが、そこに毫も倫理的判断をいれる餘地はないはづである。人間は同類親和なる倫理的動機から仲間生活をなすにいたつたものではなく、たゞ自己の生存を一層有利になし遂げんとする動機によつて、仲間生活を始めたまで、ある。集團と集團との鬭争も亦一層ヨリよき生存をなさんがためである限り、それに向つて倫理的判断を下すべきではない。鬭争を惡いと言つて非難するものは倫理的判断であるが、鬭争は生物

としての人間のヨリよき生存に向けられるまで、倫理現象ではなく、生物學的な自然現象である。これは恰も石が地上に落下して人をうつたといふ程の出来事である。石が人をうち、人を傷けたといふことに於て倫理的判断が加へらるゝが、石の地上に落下するのは引力の法則によるもので、自然現象たるまである。それに向つて善いとか悪いとかといふ倫理判断を下すことはできない。然らば、人間が他の集團をうち、他の集團を掠奪して、ヨリよき生存する外なきにいたり、鬭争するにいたつたのである限り、集團間の鬭争に向つてあまりはけしい是非の判断を下すべきではなからう。なほ、鬭争する集團が互に協調するとしても、單純にヨリよき生存をなさんが爲めの協調であつて見れば、是又、自然現象であり、毫も倫理的判断を加へる餘地がなす。

然らば、奴隷の存在といひ搾取と云ひ、何づれも自然現象で、倫理判断の對象たるべきでない。従つて、資本家が労働者を搾取し、労働者が貧窮に陥るといふことも、通常考へらるゝ如く善惡の判断をいふべきではなく、冷かに自然現象として眺めればよいはづである。これまで餘り價値判断が多過ぎ、自然的な生物現象が誤り解されてゐる。善くも悪くも、資本家は

集團的本能によつて労働者を差別し排斥し、偏見をもつて、それを搾取し掠奪する。これを人間的現象であるところに見ると、價値判断を加へ資本家の行動を或は善いと言ひ、或は悪いといふけれども、生物として集團的本能に翻弄さるゝ資本家の應對及懸引はすべて自然現象たるまで、石が地上に落下するといふ程の出来事に過ぎない。これに對し、マルクス以下、現代の社會運動家達は荐りに倫理的判断を加へて、悪いとか不都合だとか言つて居る。併し、資本家の行動を不都合だといふ労働者、社會運動家達も亦他の集團に對しては偏見と差別とを以て蒞み、搾取掠奪依然たるに於て啞然たりではないか。労働者や社會運動家が咆哮し怒號するが如く、資本家の行動が無慈悲であり不都合であるならば、労働者や社會運動家はいづれも至公平の聖人揃ひでなければならぬ。然かも、この聖人までが、集團的本能に翻弄せられ、依然、他の集團を毛嫌いし、現に見るが如く、他の集團たる資本家階級を不倶戴天の仇敵と見立て、これを呪詛し排撃するに餘力をあまさないではないか。自づから忌み嫌ふ階級的差別とその害毒から毫も離脱しようとはせず、自分だけは惡徳の限りをつくし、たゞ他の集團と資本家のみが悪いのだと言つて聲高らかに非難しつゞける。併し、人間は畢竟かくの如く我儘勝手な

動物なのである。自分は勝手な眞似をしてをりながら、妻をのみ嚴重な誑に服せしめやうとするものが、動物としての夫そのものである。動物としての夫が人間化するは決して容易ではない。白色人種は黄色人種に向つて我儘勝手な振舞をなし、黄色人種は亦その他の人種に向つて同じように我儘勝手をつくす。そして、獨り相手のみが不都合であり不埒であつて、自分の同じ行動は當然すぎる權利だ位に思つてゐる。これ等の動物的行動はいづれも倫理現象として取扱ふべきにあらず、自然的現象たるまである。これまで、社會運動の解釋や批判が餘りに倫理的に取扱はれ、自然現象として見且つ解釋せられて居なかつた憾みがある。

自然現象としては奴隷の存在と他によつての利用（用役徵發）とは有るが儘に見且取扱ふ外はない。階級と階級、集團と集團との對立に於て必然的に奴隷が生ずるが、奴隷はその主人たるべき階級と集團とに奉仕し、それに利用されて、纒かに露命をつなぐ運命を擔つて地球上に現はれ來りしものである。そこで、奴隷の存在と利用とは善いか悪かといふやうに見るべきではなく、一と先づ自然現象としてこれを見、あるがまゝに取扱はなければならぬ。奴隷はたゞ支配階級、特權的集團に利用されることによつて生存權を得るのみ。

五 奴隷と世界的集團

奴隷の出現は集團的對立の結果である。二以上の集團が對立すれば協力によつて均齊の状態を維持するか、勢力に差等を生ずれば一が支配し、他が屈從するかである。但し、集團の勢力は隨所に差等を生ずるから、集團間に對立ができ、必ず奴隷が現はれるのである。集團の存在する限り、奴隷も亦必然的に發生する。然るに、集團はヨリ大なる集團に増大しつゝあり、かくて、集團間に生ずる奴隷も從つて漸次消滅するはづである。

奴隷の消滅は世界的集團の成立にまたなければならぬ。集團の分立ある限り、支配するものと支配せらるゝものとの關係が現はれ、搾取掠奪するものと、搾取掠奪されるものとが分立する。それ故、階級の分立あり、集團の分裂ある限り、何等かの形ちに於て奴隷の存在するにいたるは免るゝことができぬ。奴隷ある限り、富裕なものと貧困なものとの對立があり、奴隷のつゞく限り何等かの形ちに於て貧乏は存在する。國家内には大小強弱様々なる集團が存在するから、必然的に支配するものと屈從するものとに分れ、富裕者はその地位と特權とを維持し増

進するために、自己に都合のよいような習慣、法律、制度を造らなければならぬ。グレブロウキツチ氏に據れば第一、國家は敵對關係にある集團を含み、一が他の集團を壓服し他がそれに従ふといふ關係によつて成立するのである。それ故、國內に幾多の争鬪する集團あることを條件として國家は成立する。第二、國家はその性質として支配階級が被支配階級の權益を收奪しうる組織をつくり、優等階級の權益を保護増進する。國家に含れる諸々の集團は互に鬪争をなして利を争ふ。第三、國家は一定の法的秩序をつくつて、支配階級を保護する機關である。第四、二以上の集團の間には全體として秩序が造り出され、分業が發達して、高度の文化に達することができ、國內に存する無数の小集團によつて社會的對立が生じ、従つて、社會的鬪争が繰り返へされ、劣弱階級を法によつて、その地位に止まらしめなければならぬ。第五、國內に於ける多數者は劣者であるが、少數の優者は政治的技術によつて劣弱者を壓伏しなければならぬ。グレブロウキツチ氏の論旨はそのまゝ、採ることはできないが、國家内に存する諸集團の對立及鬪争と、オツペンハイマア氏の政治的手段 (Politische Mittel) を用ゐる他の集團の權益を收奪し、法によつて、優等階級に都合のよいような仕組みをつくり出す事は大體正しいと思

はざるをえぬ。國內國外集團間の關係は鬪争の一に要約することはできない。諸集團の間にも或程度の共同的關心や、共同意識があり、それが爲め、諸集團に共同なものとしての學校政策や勞働政策などが行はれる。國內に於けるすべての歴史的乃至公的生活は鬪争のみにつくるにあらず、諸集團間には協調の精神存在し、これが國內生活を秩序づけるに役立つことは見免すことはできない。但し、集團と集團との關係は鬪争が主たる役割をつくり、集團内には愛好平和であり、集團外には嫌忌鬪争であることは動かない。

人間は生存を目的として生きて居る生物である。その、*Lebensfürsorge* と云ふことが人生の目的となるが、生活の欲求は自己保存の動向と種族保存の動向となつて現はれる。そこで餓と戀とが人生に重大な事件となる。これに因果慾 (Kausalbedürfnis) と社會とが加はるとオツペンハイマア氏は言つて居る。社會が人間の生きる手段として重要な役割をなすにあたり、社會的に尊敬されることを欲求する念が生じ、權力を追ひ求めるやうになつた。生きんがための物質的欲求に對して富が求められ、他の同類の上に地位を求めてそれを制壓せんがために權力が求められる。富は物に對する支配であり、權力は人の上に加へる支配である。餓と戀と因

果慾とを豊かに充足するには富がいるが、その上、人間は權力をもち、他の同類から尊敬せられ、また、他の同類を支配するを欲する。

この目的を達するためには、オツペンハイマア氏の政治的手段 (Politische Mittel) と経済的手段 (ökonomisches Mittel) とがある。生活の要求 (Lebensfürsorge) の目的を達するためには経済的手段により、他は政治的手段による。経済的手段とは自己の労働若くはそれと同一なるものとしての交易によつて生存することであり、政治的手段とは他の労働の成果を掠奪することに關する (die eigene Arbeit und den äquivalenten Tausch eigener Gegenstände fremde Arbeit das ökonomische Mittel, und die unentgeltliche Aneignung fremder Arbeit das politische Mittel) 政治的手段は強奪、欺瞞、恐嚇によつて他の労働の成果を奪取することを意味する。そこで、政治的手段は非経済的暴力 (außerökonomischer Gewalt) により、他の労働の成果を収奪することとなり、いつでも外的な力を用ゐる (Wobei das Wort „ausere“ die Doppelbedeutung hat, erstens einer von aussen, von fremden Gruppen ausgeübten Gewalt, und Zweitens einer Gewalt, die sich äusserer, Kriege-

rischer Mittel bedient)

集團が分立すれば、一切の權益を一の集團によつて獨占し、その他の集團に残すものなきにいたらしめんとするが故に、集團的争覇は必ずオツペンハイマア氏の政治的手段を用ゐて他の労働の成果を併呑することとなる。たゞに自己集團の労働の成果と、それに基き、交易によつて富を得んとする代りに、一切他の集團の労働の成果をも併合せんとする。然る場合に、平和裏に自己の労働の成果を引き渡す好人物はないから、兩者の間に争奪が開始せられ、従つて絶えざる社會的闘争が行はれる。この集團の間に權益が平均して居つて差等がなければ闘争は行はれないが、その間に不平均があれば、他の持分を奪取せんとして闘争が起る。社會に存する習慣、法、制度は政治的闘争手段によつて、他の持分を併合せんとするときに、優者強者を助長するように出来上つてゐる。いづくの國の法律に於ても男女を平等なものとして取扱つては居ない。どこでも男は法律によつて女を壓制し、その非望を遂げうるように出来上つて居る。有妻をよるものを成立せしめずして、有妻姦のみが成立するといふような偏頗な法律は到るところに累々たり。これ、畢竟法律は強者たる男子の非望を遂げしめうるように造られて居る

からである。それ故、國內に集團が分立するときは支配集團は奴隷集團に對し必然的に習慣、法律、制度を用ゐてそれを制壓する。また、習慣や法律や制度はいづれも支配者、强者の權益を増進するように出來上つて居り、また、支配者、强者の權益を増進する道具、手段として造られてゐる。かくの如き状態に於て、いづくに平和あらん、いづくに協調あらん。

奴隷は集團分立の必然的結果である。集團が分立するかぎり、奴隷の出現するは避くることのできない。集團が對立しさへすれば、大小強弱様々の集團が争闘するから、劣弱なる集團は壓伏せられざるをえぬ。かくて奴隷が生ずるとすれば、奴隷なきにいたる途は集團の境界を餘り嚴重なものとしなないことによる。

集團が暴威を揮ふ社會では政治的手段が行はれ、他の勞働の成果を收奪し、習慣、法律、制度によつて、これを擁護するやうな仕組をつくる。いくら集團的害悪が著大であつても、集團を全く消解するといふようなことは、仲間生活によつて生存して行く人間には全く不可能であらう。オッペンハイマア氏の想像するやうな政治的手段なく、獨り經濟的手段によつて行く自由なる社會 (Freibürgerschaft) といふやうなものゝ出現は蓋し空想であらう。如何なる形

でか、強制の作用はいるであらうから、如何なる社會に於ても、全く法なく強制なき社會を想像することはできぬであらう。但し、暴力による政治的手段は漸次減少するであらう。暴力によつて優等階級が劣等階級を搾取し掠奪するといふ生存形式は、その如何なる形ちに於ても漸次衰退にをもむくであらう。そして、自己の勞働の成果と交易とによつて生存する形式、即ち、經濟手段が重視せられるであらう。

自由なる社會では個人に最大限の自由を與へなければならぬ。すべての社會本位社會は壓制を極めるであらう (拙著「次の社會」全巻を通讀せられたし) この意味に於て、社會主義社會も亦壓制に終始する外はなからう。社會を本位とすれば、社會の欲する各種の規範を強要し、それに應合すべく強要するであらう。思想も信仰も趣味も社會の欲するものを強いて用ゐさせるであらうから、社會本位の社會は規範社會となり、それに應合させることに骨折る社會となる。よつて如何にしても壓制にいたるを避くる事はできないであらう。それ故、自由人を造り出さんとすれば、なるべく社會的規範を稀薄にし無力ならしめなければならず、社會それ自體が過分なる勢力を及ぼし命令を發しないようにしなくてはならぬ (拙著「社會政策概論」第四

章参照) 集團の分立がはげしく、集團と集團との鬭争が盛でなければ、集團は暴威を揮はざるを得ず、自由人の代りに奴隷が踵をついて現はれてくる、そこで、政治的手段が後退して經濟的手段が増進すれば、他の勞働の成果を掠奪するような仕組は後退するから、經濟的手段によつて各平和に生活さるゝことゝなるであらう。然る場合には、集團も稀薄になり、過大な權力を中央に集積せず、地方分權たるにいたるであらう。茲に、奴隷は急にその影を收めるであらう。

但し、この事は世界大の大集團が成立するにいたるまで實現しないであらう。到るところに集團が分立すれば、集團的鬭争は後退せざるべく、一の集團が他の集團に對し政治的手段を用ゐて勞働の成果を掠奪し、奴隷の境涯に沈倫せしむることに於て舊態依然たるであらう。然らば、奴隷の消滅は集團圈の擴大と一致すべく、集團圈が擴大するに連れ、漸次奴隷は減少にもむくであらう。奴隷は政治的手段によつて勞働の成果を掠奪されることによつて出來上るものであるから、集團的暴力が減退しなければ奴隷も亦減少しない道理である。但し、如何なる時代に於ても、集團が全く影を收めると想像することはできないから、奴隷も亦全く消滅する

と考へることはできない。世界が一大集團に歸一しても、世界の各所にかたまりとして生存する人間の存在を否定し得ない限り、集團的鬭争は全く終熄すると考へることはできない。政治的手段や權力が絶滅するとは思はれない。經濟的手段や平和や平等は漸次擴大され、それが爲め奴隷も漸滅するであらうが、世界を通じて集團や集團らしいものが全く影を收めるようなことはない。經濟的手段によつての國家的交易が國際的となり、搾取掠奪が認められざるにいたれば、經濟的手段の領分は擴大されるであらう。オツペンハイマア氏の想像するやうな全く經濟手段のみはたらく純粹經濟社會といふようなものがありうるかどうかを知らぬが、たゞ、經濟的手段はある程度まで増進し、暴力と掠奪とは漸滅するであらう。オ氏の純粹經濟も自由社會も恐く空想の産物であらう。經濟的手段が全線にわたつて勝利を博し、政治的手段が全く消滅し、*reine Wirtschaft* としての社會ができ、それによつて *Freibürgerschaft* といふものが現はれるとするのはユトピアに過ぎないだらう。人間はそんな理想的生物ではなく、従つて、集團的生存と集團の間に生ずる鬭争との全く絶滅するやうな社會ありと想像することはできない。又少しも搾取と掠奪のないような社會を想像することもできない。自由と平等と富

とが均分されるような社会は永久に地球に現はれ来らぬであらう。

如何にして奴隷を減少すべきか。如何にして階級を協調せしむべきか。全く階級を協調せしむることは集團の存続する限り不可能であるが、それでも集團の本質を明にし、それに基き階級を協調せしむることは全く不可能ではない。

六 奴隷と集團の融合

集團が存在する限り、奴隷も亦存続するとすれば、集團を除去することが、やがて奴隷を減少し乃至絶滅する所以とならう。集團を除去する方法の何であるやについては、集團が何故に反噬し鬭争するやの原理、理由に究るであらう。

集團の對立する所以のものは類同意識による（「階級鬭争の研究」四、五章を通讀せられたし）類同意識とは同類相牽引し、異類相反撥することである。人間は集團本能をもち、これによつて同類相ひき同類相互に親和し愛好するけれども、異類は相反撥し、嫌忌し、鬭争を事とする。類同意識は生物的事實であるから、その善悪など問題に上るわけのものでなく、たゞ冷

かにその存在を認識容認すれば足りる。

集團の間に存する差異を一々除去することによつて、二の異つた集團と認めうべからざる程度にまで差異を稀薄にするか、若くは、全く同一なものに改鑄するかすれば、始めて集團は融合の緒につくであらう。集團の間にはどこか異ふところあるによつて、兩者相接近し融和することができぬのである。けれども、すべての點に於て同一であり、若くは類似すれば、融和が可能となり、相次いで融合するにいたるであらう。反撥し争鬭するのは集團の間に何か異つたものがあり、また、異つたものがあると想ふからである。風俗習慣が異へば融和することはできぬ、よつて、風俗習慣を同一なものとなし、これを接近せしむれば同氣相求むる端をひらくであらう。文化が異つた集團は融和することはできぬ。西洋人と東洋人との文化が隔絶して居り、異つてゐると感ずるならば、兩者は如何なる手段方法を以てするも竟に融和せぬであらう。西洋人と東洋人との接近は先づ文化を接近せしむることより始めなければならぬ。職業の異なる集團の間には反目あり疾視あり、一致提携するにいたらぬ。よつて、集團の融和を圖るためには職業をも類似せしめ、若くは、同一たらしめなければならず、乃至、職業の上下關係を

除去して、相融通することのできるようになければならぬ。最後に血統が異り、人種が異つて居るとすれば、異人種は現に見る如く、反噬し反撥して鬭争を逞ふし、到底同情共鳴することができぬ。よつて、血の問題を解決し、諸人種をして略同一血統に屬すると考ふるまでにいたらしめざる限り、集團間、國民間、人種間の融和は竟に望みがないであらう。

集團が異なるものとして對立する間は奴隷は消失しない。職業が異るとすれば、職業の間には下關係が生じ、體統が生じ、高等なる職業に従事すると思ふものが、ヨリ以下の職業につく者を蔑視し、差別し、閥根生を以てこれを排斥し、利權を一手に獨占して、奴隷をしてその苦境に呻吟せしむる。風俗習慣が異るとすれば、風俗習慣によつて差別するものと、差別せられるものとの區別が生じ、蔑視するものと蔑視せられるものが分れる、文化が異へば、異なる文化的集團は融和することができない。血統が異ひ、人種が異へば異なる集團は互に反撥し排擠して融和しない。異なる文化、異なる血統によつて、優勝なるものと賤劣なるものとを生じ、そこに奴隷若くは奴隷に類するものが現はれる。

そこで、集團間、階級間の融和、協調は風俗習慣、職業、文化、血統を同一なものとなし、

類似するものとなすことによつてなされるといふ斷定に達する。

これは内包的類似若くは同一の場合であるが、外延的に類似若くは同一なるにいたつても集團間の融和、協調のなし遂げられるのは同一である。すなはち、(一)集團圏の擴張によつて、他の集團を抱擁すれば、集團間階級間の反目嫉視は消失して融和にいたり協調に達するであらう。(二)超集團的に二以上の集團に同時に所屬すれば、集團、階級の特質たる鬭争を失ひ、融和協調にいたる。その外、階級、集團は接觸することによつて多少協調性を濃厚にすることができぬ。階級、集團の協調は内包と、外延との類似若くは同一により、且つ、接觸を通じてその目的を達するが、恐く世界諸集團をして全く融和せしめ、協調せしめ、平和の天地を造り出さんとするは蓋し望みなきことであらう。人間界には如何なる點に於てか差異があり、如何なる點でか區別せられ、これが同氣相求めて仲間生活をなし、各その權益を限り要求し主張するに於ては、結局、差別と偏見と鬭争とを世界より全く驅逐するは不可能であらう。たゞ歩一歩、協調の世界を造り出さんとして、少しく慰むる外はない。

参考文献

一、海野幸徳「社會政策概論」第一章

奴隷は集團分立の結果現はれるが、集團が他の集團の上に權力を加へる程度に應じて奴隷の境遇はヨリ悪くなる。奴隷と集團との關係、不自由人としての奴隷の出現は同書指定章に述べられてゐる。

二、海野幸徳「社會政策概論」第五章

全體主義が如何に個人の自由を殺ぎ、その結果、奴隷が現はれるかについては、社會改良形式としての社會主義の分析によつて提示せられる。

三、海野幸徳「閥の偶像」

「閥の偶像の正體」は第四章に、「閥の心理」は第五章に、「學閥」は第八章に、閥の傍若無人の惡徳と暴虐と利己主義については第十章に仔細に描寫され、閥鬭争の世相は第十二章「社會的鬭争」に縷説されて居る。閥による奴隷出現については指定諸章を通讀せられたし。

四、海野幸徳「日本社會政策史論」第三章

この章には弱者集團の社會的鬭争が述べられ、社會的福利に參與するについても無力無能では顧られざる次第を述べて居り、社會的福祉の參與も亦集團的進動と關係なきものにあらず、自由人としての權威によつて始めて社會的福祉に參與することを得る次第を述べてゐる。

五、海野幸徳「階級鬭争の研究」

第十三章第一節「社會的集團本能による融和方法」

第十三章第二節「超集團的融和方法」

第十三章第三節「集團の融合による融和方法」

階級協調は内包的と外延的のによつてなされるが、これを少數同胞問題について研究し、集團圈擴大と融和问题、超集團と融和问题、風俗習慣と職業と文化と融和问题との關係を叙説す。融和问题を通じて階級協調問題一般をほぐす資料たるであらう。

六、海野幸徳「社會政策大系」第七卷

この中には海野によつての最も精細なる隣保事業の研究が發表せられ、接觸を通じての融和 방법이明細に縷説せられてゐる。

第二章 奴隸の出現

一 奴隸の出現

奴隸は如何にして出現したか。

奴隸は個人的現象ではなく、社會的現象である。個人が個人として生存することができないため、無力な無能な個人は集團に入り込み、集團に寄託するにいつたが、豈圖らん、個人は他の集團によつて奴隸たるの境涯に沈倫することゝなつた。個人の入り込み寄託した集團は一部分個人を束縛したが、その代償として、ヨリ多く個人を解放した。これによつて、兎角、無力無能な人間は他の動植物や同類の浸害を防いで生存を續けることができるようになった。その代り、對立する集團から壓迫されて奴隸の境涯に沈倫するにいたつた。

いづれにしても、人間は惑むにたえたる動物である。前門狼を防げば、後門猛虎をいれ、畢竟、人間は生存せんとして、奴隸たるより外なき運命にある、人間が自由人として奴隸の境

涯より免るゝのは遙か遠き將來に於て集團の對立なき世界に入り込んでからのことである。人間は次の如き運命をもつ動物である。個人としての奴隸は集團によつて解放されるが、社會としての奴隸は集團に入つて一層その度を増すから、人間はいつまで行つても奴隸たる外なき運命をもつ。

奴隸は解放さるべく争ひつゞける、これ、人間の地球に出現せし以來、徒らに阿鼻叫喚、修羅の巷が現はれ、鬭争に鬭争をつゞくる所以である。奴隸はそれ自づからの用役によつて生き生物ではなく、他に用役を提供することによつて (Dienstharmachung) 生きる動物である。奴隸は本來獨立してそれ自づから生存しうべきものではなく、また、生存せしむべき價值も無いと思はれるが、それを葬り去り、それを屠りつくして了へば、用役を負擔させる道具、手段がなくなる。よつて、餘儀なく、用役負擔者として奴隸はわづかに生存せしめられるのである。奴隸の存在は強者、優者、支配者の用役のためで、恰も、牛が百姓の開墾の手傳として飼養せられると同一義である。奴隸は獨立して、それ自身存在する必要のないもの、資格のないもの、また、權利のないものであるが、たゞ、他の用役に提供せらるべく生きる動物である。

そして、それ自づからの必要と價值とに於ては毫も生きる必要も權利もないのである。

かゝる奴隸は如何にして發生したか。

集團が分立しさへすれば、支配するものと、服従するものとの關係が生ずる。支配するものは主人であり、服従するものは従僕であり、乃至、奴隸である。社會的集團が如何にして現はれたかについて茲に論ずる必要はない (拙著「階級鬭争の研究」参照) 茲にはたゞ集團が分立する事實を認識し正視さへすれば足りる。集團が分立すれば必ずその間に劣優ができ、劣者が現はれ強者弱者が分立する。然るに、集團と集團との關係は鬭争であるから、大小強弱の集團間に必ず支配するものと服従するものとが現はれる。集團が二つ以上對立すれば、集團は必ず他の集團に用役を命じて、勞せず、その結果を收奪して生存せんとして争ふ。人間は物質的要件を充足せずして生きて行くことができぬから、生存のためには、何づれの集團も物資の争奪を行はなければならぬ。物資の争奪は個人と個人との間に行はれず、集團と集團との間に行はれる。何となれば、人間は絶對に個人として生存することができず、仲間として生存する外なきが故に、遊離する個人なるものなく、従つて、物質の争奪も亦團體間に行はれるのみ。集團

間には絶えず物資の争奪など行はれるが、これ、一の集團が他の集團の用役を掠奪することから必然的に起り来るものたるのみ。然るに、一の集團が他の集團の用役を徴發するには暴力によらなければならぬから、茲に用役を命ずることから必然的に闘争が行はれる。

然らば、集團を分立する過程は用役を命ずるものと命ぜられるものとの分立の過程であらねばならぬ。集團は類似によつて成立し、差異によつて分立する。如何なる差異によつてか集團が分立しさへすれば、力の大小強弱によつて、用役を命ずるものと、命ぜられるものとの對立ができる。用役を命ずるものは主人であり。用役を命ぜられるものは従僕である。奴隷は常に用役を命ぜられる側から現はれ、優等支配集團の生存に奉仕して、その道具その手段となつて生きて行く。集團としての性質はいつでも同一である。集團として成立しさへすれば、それは本能的にその利益を増進する動向をもち、殊に自己及自己集團の利益のみを増進せんとする特質を呈露する。それは自己と自己集團との權益のみを擁護し、かつ、増進し、その權力を増大して、習慣と法と制度とを自己と自己集團とに都合のよいやうな仕組とする。習慣と法と制度とは客觀的に見て、社會の秩序と安寧とを維持する役目をもつのではなく、いつでも、支配集

團、特權階級の權益を維持増進するが如くに制定せられる。これ等の道具、手段によつて、支配的集團が一層都合よく他の用役を掠奪する。

かくして、奴隷が現はれ、他の集團の用役に奉仕して生存する。奴隷の出現は集團分立の必然的結果であり、その必然的な附隨である。

二 支配者・奴隷

集團は人種的差異によつても、社會的の差異によつても分立する。人種的な差別ある場合、無論、對立して争覇をなす大小強弱様々の集團が現はれる、社會的に區別さるゝにあたり、必ず、區別さるゝ社會的區劃の間に分立と争覇とが起る。たとへば、學閥、財閥、といふが如き社會的區劃が現はれるとすれば、かくの如き社會的區劃の間にも必ず、權益を維持増進せんとするはたらきが現はれる。二以上の集團が現はれるとき、いつでも優勢なる集團は常に劣弱なる集團の用役を掠めて自己集團のみの生存を助長せんとする。權益をたゞ一の集團に集中せしめんとするに於ては、人種的區劃も社會的區劃も何の異るところはない。習慣の異なることによ

つて區別せられるものも社會的區劃なれば、道德宗教の異なることによつて區劃さるゝものも亦社會的區劃である。如何なる點に於てか區別せられるなれば、そこに區劃による對立の意味が現はれ、相次で鬭争に進む。皮膚の色によつて區別せられるば、白色人種、黄色人種、黑色人種といふような人種的對立を起す。かくて、現に見るが如き抜くべからざる人種的紛擾と鬭争とが繰り返へされる。身長によつて區別せられるば、そこに又一種の對立的意義が生じジャップは丈が短くて醜いといふやうな偏見となり差別となつて現はれる。

人間は甚だ厄介な動物で、何か異ひ區別せらるれば必ず對立し喧嘩をする。有形と無形と、固定と浮動と、素質と環境と、人種と社會的區別とを問はず、何か少しでも他と區別せらるゝ差異を認識せんか、そこに分立あり、相ついで對立が起り、結局、鬭争となる。何か差異によつて區別せらるゝ集團は各分立して物資やその他高等なる文化的資源を獲得せんとして相争ふ。如何なる點に於てか異へば、必ず類似するものが寄り集つて集團の分立を促し、その對立を生む。然るに、如何なる點に於てか、他の個人と異はないやうな個人なるものは絶対にないから、そこに千差萬別の集團の分立するを避けることはできない。如何なる點に於てか類似する

ものは互に寄り集つて集團を造るから、極端には集團は個人の類似するだけ、他と區別せられる數だけであるといふことになる。人間は人種に於て、職業に於て、學校に於て、教育に於て、習慣に於て、道德に於て、宗教に於て、利害に於て各他と異ふ限り、如何にしても集團の分立を回避することはできない。かくて、類似に基く多種多様の集團の出現は必然的であるといふことになる。

グンプロウキツチ氏は集團の自然的區分として、(一)血縁、(二)地方的結合、(三)共通な利害の三を擧げて居る。血縁によつて人類が別異の集團に分立すべきは一見明瞭である。人種的偏見は血縁の異なるによつて生ずる。人種と言つても、國民と言つても、無論交雜して居り、純粹な人種とか國民とかといふやうなものはない。但し、血縁の異なることによつて、また、異つたと想ふことによつて、集團が分立さへすれば對立關係を生じ、一が他に用役を命じて、それを奴隷とするに變りはない。地方的結合によつて對立關係が現はれるのは無論で、國家といふやうな地域的區劃ができれば、地域の異なるものゝ間に必ず疾視偏見が現はれるを避けることはできない。何々縣人といふやうな區劃でさへも、そこに分立的意義が生ずるであら

う。共通の利害あれば利害の類似するものは各一團をなし、異つたものと對立し、互に排擠する。グンプロウキツチ氏は血縁と地方的結合と共通の利害によつて集團の成立を説き、更らに、集團成立の基本的原因として、(一)物質的原因、(二)經濟的原因、(三)精神的原因を擧げてゐる。物質的原因と稱するものは共通なる住所、親和關係、共通な社會生活、血縁、並に近親關係である。經濟的原因は類似若くは同一の所有關係、同様なる職業、たとへば、大農、小農、小作人といふが如き職業によつて夫々共通な同様なものとしての寄り集りを指す。同様なる製造業者、同様なる商人、同じ熟練職業といふ類は經濟關係が類似し若くは同一であるといふことによつての寄り集りである。一部分經濟的一部分精神的原因によつて寄り集るものは貴族、僧侶、藝術家、學者、著述家などである。全く精神的原因によつて寄り集るものは言語、宗教、政治に關する集團であり、土着、市民、國民といふ類も亦それである。偶然同一な運命をもつもの、たとへば、同じ移民であるといふような類も矢張り精神的原因に基づく寄り集りである。

これ等の原因によつて物質的に類似するもの、經濟的に類似するもの、精神的に類似するものができる、それ等が相牽引して寄り集るところに特異な集團ができる。集團は類似するものが *herd instinct* によつて同類相ひき結合することによつて出來上るものである。集團は類似するといふことによつて本能的に相ひき出來上る寄り集りである。物質的に類似するものは期せずして本能的に相ひき、經濟的に類似するものは期せずして本能によつて集合する。集團はたとへて居ると思つて寄り集るかたまりに外ならない。何故、似て居るといふことがそのやうな不思議なはたらきをするかといへば、それは本能によると言ふ外はない。これ等類似による集團は永久に結合するものもあり、一時的のものもあつて、時間の上から區々である。共通な住所と言つても、一世紀二世紀も續くものもあり、波止場に出會頭に暫時寄り集るといふ程の暫有的のものもある。共通な宗教信仰をもつものが久しきにわたり集團をつくつて居ることもあれば、昨今寄り集つたに過ぎないやうな烏合の集團もある。

共通な住所は人間を引きつけ、互に親和させる。國民といふが如き共通な地理的區域に集合するもの、間には國民主義といふが如き一種不思議な時に偏狹で熱狂な精神が現はれる。國民主義は社會主義よりも牽引力が強く、勢力が旺んである。世界の勞働者よ團結せよと言つたと

ところで、結局、世界の労働者は文字通り團結しない。平時に於ては恰も異國の労働者が團結して勢揃へをして居るように見えても、それは皮相のもの似而非なるものである。眞に世界の労働者は結合もして居なければ團結もして居ない。同じ労働者であるとする運命をもつものが、同一な運命といふことで一と先づ團結はするが、それよりも優勢な牽引力をもつ國民といふような團結に會へば忽ち打破される。戦時に於て、たとへば歐洲大戰當時、異國の労働者は労働者として同じ運命をもつといふことで團結しなかつた。それよりも、國家といふ地域的團結の方が一層有力で猛威を揮つた。同じ國の資本家と労働者とはその宣言に似ず、敵對をやめて互に提携し異國の労働者に彈丸を送つてそれをうち殺した。この場合、國民主義は理性によるのではなく、本能によつてゐる。理性は感情によつて支配せられる。感情のをむくところ理性と雖も如何ともすることができない。

同族であり、血縁が同じであり、また、それが同じであると思ふ場合には、自他強き愛着心を感じて互に牽引し合ふ。階級協調、集團協調といふことは畢竟血の問題まで行かなければ片付かぬのは、それが同一若くは類似による團結たるからである。社會的な文化や、習慣を如何

に同一にしても、時に血が異つて居るとする單なる理由で融和し協調しないことがある。階級、集團の協調は一切區別せらるゝ何ものもなきに至つて成し遂げられるべく、何かそこに區別せらるゝものがあれば、二の階級、集團として存し、その間に必ず嫌忌があり、偏見があり、従つて排斥が行はれる。それ故、最後には血の問題を解決しなければ問題は残りなく片付かぬであらう。白人種と其國民の用ゐて居る一切の器具器械は黃人種によつて使用されるし、その服装その嗜好は兩者の間に差異なきまでに立ちいたるとして、さて、そこに最後の融和と協調とが齎らされるかと言へば、否と言はなければならぬであらう。なぜならば、未だそこに類似せざる血の問題が障害となつて残つてゐるからである。言語が異へば、それだけ差別せられ偏見を以て迎へられる。東京言葉と京都言葉との優劣などはつまらぬ穿鑿であるが、東京人から見れば京都言葉は如何にも可笑く、京都人から見れば又東京言葉は如何にも亂暴で粗野であらう。東京鯨と關西鯨との優劣など判定せられるわけのものではない。たゞ異つて居るといふことで両方からけなし合ふだけである。宗教の異つたものは到底一致しがたく、兩立しがたく、恰も不倶戴天の敵といつたような敵愾心をもつ。科學者の間にさへ、自己専攻の學科が萬

能で、すべてその専攻學科を基準となし、それから打算するといふ有様である。トンボや蝶を研究する昆虫學者には天下國家の事に昆虫に要約されざるはなく、醫學者には醫術でなければ夜が明けぬといふわけで、何でも、自分の専攻學科だけが貴く値打があると考へてゐる。そこで、學科閥といふような奇妙なものが生じ、他の學科をけなしつけ、偏見をもつてそれを排斥する。何でも新參な學科であれば講座に上ほせる値打がなく、非學者でもあるかのように取扱はれるのは學科閥による。藝術家の間にも流派が異ふといふ單なる一事によつて自他排擠し合ひ、悪口雜言を極め、他を糞味噲に言ふ。その如く地位の異なるによつて、貧富の異なるによつて職業の異なるによつて互に疾視排斥し合ふ。そこに何か區別せられるものがあれば、それが何であらうとも、少しも假借せず、差別し排斥するといふのが人間の人間たる性情である。

一以上異へば、その比率によつて憎惡が遞増し、一以上同じであれば、その比率によつて親和が遞増する。それ故、原始社會の如く、血に於ても、言語に於ても、宗教にをいても、習慣に於ても同じであり、類似するといふような集團の結合は最も緊密であり、集團の抵抗力も進撃的で強盛であり猛烈である。我國が比較的強固な集團をつくり、日清、日露戦役の勝利者と

なつた所以のものは、體力のためでも、戰略のためでも、武器のためでも、優れたる文化のためでもないとするれば、國民が比較的純一で、團結力に富み、組織に秀で、居たからであらう。その血に於ても、その言語に於ても、その習慣傳統に於ても同じであり同じであると思ふところに日本人の強味があり、その強大をいたせし主たる原因がある。もし、今後、我國にして異なる人種をいれ、異なる言語をいれ、異なる習慣、傳統をいれたなれば、それだけ緊密なる團結力を失ひ、劣弱なるにいたるであらう。

一切類似するといふやうな集團が最も強大なる集團である。何でも同一であり、類似するといふことで團結にいたるのが最も強大をいたす所以である。その中でも血縁が同一であり類似することが集團形成に最も大切である。言はず、血縁の同一又は類似によつて最も強固な集團ができるのである。原始社會に於て、異なる部落のものを虐待し屠殺したのは血が異つて居たからであり、血の異なるものは絶對敵であるとしたからである。その他如何なる點に於てか異ひ、また、異ふと想へば嫌忌し偏見をもつて排斥するに變はない。異なる集團に屬するものに對しては嫌忌と偏見と排斥とを以て對するが、その極、全く絶滅にまで行く、

優勢なる階級、集團は支配者となり、劣勢なる階級、集團に屬するものは奴隷の側に就く。優勢なる集團は一切の權益が自己と自己集團とのみに歸屬するが如く妄想するところから、その勢力を恃み、それをを用ゐて他の集團に屬するものを壓迫し、その用役を徴發する。すなはち、優勢なる集團は劣勢なる集團に屬するものゝ用役を收奪し、その所有を奪つて掌中に收める。こゝに、奴隷が生ずる。奴隷は自己のために生きるにあらず、他の生存の道具となり手段となつて他のために生きること、恰も家畜が人間に飼養され、その用役の手段たると同一である。かくして支配者と奴隷とが分立する。

三 苦汗労働

人間の原始生活如何。そこに組織があつたか、なかつたか。組織があるとすれば、組織を維持する上に於て既に強制するものと、強制せらるゝものとの分立があり、従つて、用役の徴發によつて、強制せらるゝ側に奴隷が現はれたであらう。

原始社會の人間は家族によつて生活して居たか、社會的に集合生活をして居たか。人間は對

をなし分立的に家族 (sonder Familie) として生活して居たか、群居動物として社會的生活をなして居たか、原始人は家族生活をして居たと説くものはダルウキン、パシヨフエン、モルガン、マクレナン、ラボツク、ヘットペルト、ウキルケン、ケーレル、ポスト、ベルンヘフト、フルウアルド、スペンサア、ラツチエル、アチイリス、ランブレヒト、ヴント、ウイルツスキイ、オツペンハイマア、ライチエンスタイン、バルト、フレーチエル、ヘルネス、ハルトランドなどであり、社會生活をして居たとするものはランヂ、トーマス、ウエスタアマルク、フォレル、カーレンベツクなどである。

人間が群居動物として社會生活をなして居たとする理由は、(一) 原人と人類猿とを比較すれば、原始人が社會的生活をなして居たことは明かである、(二) 人間は猿の如く樹上生活から地上生活に轉じたが、この際、直立の姿勢と手を自由に使用することができるようになった。當時の人間は肉食動物に對し防禦の術なく、その武器たるべきものを所有しなかつたので、群居しなければ生存することができなかつた。その他、人間の子供は養育期間が長いので、この間、危険に曝露しなければならぬが、これが無力な無能な人間にはできなかつた。

(三) 人間の社會性は子供を見ても一見明瞭である。子供は荐りに模倣をするが、この本能によつて人間は言語を使用するにいたつた。なほ人間はよく發達した言語中樞をもつが、言語は既に社會性を表示するところから、益々人間が社會動物たることが分る。 (四) 自然人は生來的に社會的本能をもち、それがため、部落と部落とが聯合した。家族心は薄弱であるが、部落心は強盛である。 (五) 人間にとつて最大の刑罰は獨居であるところを以て見れば、如何に交通や交際が本能上人間に大切であるか分る。 (六) 文化は社會的產物で、個人的產物でない。人間の所有する文化は社會的たるからには人間も亦社會的生活に終始したものであることが分る。

これによつて、人間は原始より群居し、社會的生活をなせしを知る。

但し、これに對し、いろいろと反對説が提起される。(一) 人類に近似するゴリラやチンパンジーは群居せず、分離して家族的生活をしてゐる。(二) 最下の蠻人たるブシュメン人は部落生活をなさず、家族生活をする。(三) 人間が人類猿より分岐したとすれば、人類猿は一對の配偶生活をするから、人間も亦原始に於て家族生活をしてゐたとしなければならぬ。これ等

の反對説には誤謬が含まれる。人間は猿より進化せしものでなく、その他の樹上生活者より分岐せしものである。よつて、猿を以て人間をはかることは妥當ではない。その他多くの猿は群居し、強者は雌や幼児を擁護し、負傷者を保護する。食物の探求なども協力してやり、大なる石を退けるにも協力をなし、その下に居る蟲類をとるにも協力をなす。こゝに原始人の面影がある。

よつて、反對説にも拘らず、原始人は群居してホルド生活をして居たもので、家族生活をして居たものではないと考へられる。

原始人は嚴密にいふ一夫一婦の生活をして居たものではないが、さりとして、雜婚状態にあつたのでもない。雜婚は兩性が無結合の状態で、勝手に來り勝手に去る状態であるが、一時的配偶 (Vorübergehende Paarung) は一時的に結合する形式である。この意味に於て一時的配偶は一時的の家族と見れば見られないこともない。

一時的配偶の社會に組織はあるであらうか。一時的配偶は嚴密にいふ個人的なものではなく、また、共産的なものでもない。一時的配偶にあつては、男女が一時的にでも對をなして居

るのであるから、兩者の間に何等か共同的な經濟が発生するを避けることはできない。それかと言つて、この状態を以て直ちに共產であるといふのは不當である。これは恰も動物が雌雄共棲することを以て直ちに共產であるといふことゝ意義相通ふ。原始社會には一定の家庭經濟が成立し、一定の家政があり、多少身分の差異が現はれて居たと想はれる、男女の間に不平等があり、年齢も異ひ、身體的並に精神的な力にも差等があるので、一切平等であつたと考へることはできない。そこには既に原始組織 (urorganisation) があり、強制によつて統制作用が加はつて居たから、強制組織 (Zwangorganisation) が成立してゐたと想はれる、強制なき場合、禁止といふようなことは行はれないが、原始社會に於ても窃盜や殺人は禁止せられて居た。よつて、原始社會でも強制する作用があつたと見なければならぬ。また、組織がある以上、組織を維持するに足る強制力が豫想せられるし、外に向つて防禦するはたらきがある。そこで、原始社會には一定の貴族的制度があり、デモクラチックでなく、支配するものと支配せられるものとの關係が生じてゐたと考ふる事ができる。原始社會は既に不平等で、個人の間には差等があり私有財産を有し、一時的な性的配偶の形式をとる強制社會である。

個人の間には力の強弱があり、差等があつて、強制組織があるといふことに於て、人間は既に原始時代より力の強きものは弱きものを壓伏し、頓使し、その用役を徵發しつゝあつたと想はれる。原始社會に於ても、個人の間には差等があり、優者は劣者を征服し、それを頓使することのできるやうな強制組織を具備して居た。よつて、優者は居ながらにして、劣者を掠奪することによつて原始的な生活以上の生活をなすことができたであらうと想はれる。原始社會に於ける經濟的な生活資料に對する争奪の間にすら、強弱兩者の間には一方が他方の利益を收奪することのできるやうな社會組織があり、それによつて強者優者は劣者弱者を掠奪して、その慾望を達したと想はれる。その後、争奪の對象は物資のみならず、社會的地位とか榮譽とか稱號とかに分歧し、争奪は益々多岐となり激烈となつた。これ等すべての生存資料の争奪は一に劣者弱者の掠奪にあり、その用役を徵發することにあるから、強者は弱者の苦汗勞働によつて安樂なる生活をなす仕組であつた。こゝに少數の優者強者に對して多數の劣者弱者としての奴隷が現はれた。奴隷は勞働によつて自己を養ふものでなく、その勞働を以て上層者を養ひ、それに奉仕するものである。奴隷の苦汗勞働の結果は上層者の安逸となつて現はれて居り、かくて、下

層者の *Dienstbarmachung* が數限りなき奴隷を生み出したのである。

集團間の鬭争は強慾の結果である。個人が個人として生存することができぬため、仲間をつくつて集團生活をするようになったが、個人は集團によつて自己の生存をヨリよく達成せんとするまで、集團に奉仕するが如きはその目的以外の附録に過ぎない。かくの如き利己的な強慾な個人の寄り集りたる集團も同じく利己的であり、強慾であつて、自己集團の力によつて獲得する生存資料だけでは満足せず他を掠奪するときまつてゐる。よつて、集團と集團、國と國との對峙に於て、居常、虎視眈々、他の集團、他の國を浸害し、勞せずして生存資料その他一切の精練されたる慾望を充足せんとする。こゝに鬭争が行はれ、戰爭が起る。集團が分立し、國が分立しさへすれば、何づれも強慾なる集團、國たるに變りはないから、居常、他の集團他の國の間隙を窺ひ、それを打破し打倒し、その利權を勞せずして一手に收奪せんとはかる。如何なる集團、如何なる國と雖も他の劣弱なる集團、國を掠奪しないようなものは往古今來絶えて存在しない。集團が分れさへすれば、國が分れさへすれば、一層劣弱なる仲間を侵略するにきまつて居る、こゝに弱小集團の苦汗勞働が現はれる。弱小集團、弱小國は強大なる集團と國

とに壓伏せられて苦汗勞働をなし、その成果をすべて強大なる集團に貢賦としてさしあげる。こゝに、強大なる集團と劣弱なる集團との間に生存上の原則が異なるものとなつて現はれる。強大なる集團は自己生存のために勞働するのであるが、劣弱集團は他の集團の生存のために勞働するのである。ただ、この場合と雖も、劣弱なる集團を存続せしむる所以のものは掠奪を可能とする意義によるに過ぎない。

人間の強慾は限りがないから、集團や國の強慾も際限がない。人間のこの特質は如何なる時代に於ても毫も變りはないから、今後と雖も、集團的強慾は増大する一方であらう。こゝに、人類とその社會との融和協調の永久に成り立ちがたき理由がある。人間の強慾も將來それに逆行するが如き環境の發現によつて變形され變調を見るであらうが、如何なる時代に於ても人間の強慾なる性情にいたつては蓋し微動だもしないであらう。一度び世界大戰によつて苦楚を嘗めたる交戦諸國の強慾と利己主義とも亦將來毫も改まらぬであらうから、今後必ず幾次かの大規模な慘憺たる世界大戰が勃發するでもあらう。然かも矢つぎ早に世界大戰が殺倒するでもあらう。世界の諸國はつねに他國を掠奪する間隙をうかがいつゝあり、他國の勞働と用役とを徴

發することに腐心しつゝある。今後と雖も、弱小國の苦汗労働は少しも減退せず、地球のあらん限り、人類のあらん限り、その状態に變調を來さざるが故に、將來、人類界に融和と協調とを齎らんとするは或は望みなきことであるかも知れぬ。ただ、科學的に研究されたる融和法、協調方法がその間に介在して、覺束なくも若干の任務に服し役割を勤めるであらう。如何なる防禦國と雖も其性質として侵略的でないものはない。よく、平和を念とする國家なる用字をするが、平和を念とするやうな國家なるものは往古今來絶えて存しなかつた。國家も亦他の苦汗労働を掠奪し、他の用役を徴發せんとする集團の一種たる限り、居常、他の國家の間隙をうかがい續け、乘ずることの能きる刹那、電光石火、他國を壓伏し征服するであらう。平和なる國家などいふことが既に矛盾する觀念である。

國家は戰爭により暴力によつて、他の國家の苦汗労働を徴發收奪するが、國內無數の小集團は一見平和なる手段によつて同じ目的に向つて進み耽るように見える。國內の諸集團は武器や暴力で他の集團を侵略し略奪することは許されぬし、國內ではいつでも法によつて暴力に統制を加へるけれども、暴力以外の手段と方法によつて無慈悲に弱小集團の苦汗労働の結果を掠

め取ることに於ては聊かも異るところはない。國家外に於ては劣弱國としての奴隷を隨時隨所に見受ける。劣弱國は隨所に壓伏せられて奴隷に變化する。

集團と集團との鬭争に於ては、一の集團が他の集團を打倒しつくし、それを自己集團に併合して一層大なる資源によつて生活せんとするか、若くは搾取掠奪を可能ならしむるために他の集團の存續を許すかである。他の集團が存續する場合には、強大なる集團は弱小集團、弱小國の苦汗労働を徴發しその用役を收奪するに都合のよいやうな法律制度を設けてその目的を達する。この事は如何なる集團に於ても同一である。一のかたまりが他のかたまりの苦汗労働と用役とを利用せんとすれば、さうするのに都合のよいやうな階級制度身分制度を造り出す。優等なる集團は物質的資源やその他の資源を小集團より少しでも餘計に搾取しうるやうな習慣や法制をつくり、集團的利己主義を達しなければ止まぬ。閥はそれに所屬するものに對してのみ一切の權益を分配し、その他の閥を餓死せしめ窒死せしめる仕組である（拙著「閥の偶像」参照）支配階級所有階級はその國その社會に有する一切の權益を獨占しうるやうな仕組をつくり、被支配階級被所有階級をしてこれに適應するが如き態度を固定させる。

被支配階級被所有階級は奴隸階級であり、苦汗労働の成果を優者に提供することによつて、わづかに生きるのではあるが、それでも、集團的利己主義に居り、強慾ならんとする傾向にいたつては毫も優等階級に異なるところはない。よつて、劣弱階級は絶えず奴隸たる境涯を脱せんと争ひ續くるが、ただ、奴隸たるのみで、未だ奴隸たる意識を生ぜざる間は平穩無事である。然るに、一度び、奴隸たる意識を生ぜんか、忽ち優等階級に挑戦する反抗者と早變りをする。労働階級が従順に苦汗労働を資本家に提供する間は問題はなかつたが、労働者の間に階級意識が発生するにいたつては、現に見るが如く重大な形勢を生じ、社會的不安は世界の四隅に充溢するにいたつた。思想はいつまでも密封することはできぬ性質のものであるから、劣弱者の間に反省作用が起り、思想が成熟するにいたれば、竟に不公平な悲慘な事實を自覺し正視するを避けることができない。優等階級が飽滿生活に昏々として眠り耽る間に、劣等階級は境遇を明かに意識するにいたり、相次いで、奴隸たる境涯より免れんとして努力し反抗する。劣弱階級はつねに無智で魯鈍であるが、全體としては思想に富み、その實狀を自覺するに足る。劣弱者の間に生活程度が多少改善せらるれば物質的に悲慘なる境遇は思想化されるにいたり、俄然間

題が登場するにいたる。この事は個人の場合と同じである。あまり生活が悲慘では、無學で無能で、精神が鈍麻するから、向上進歩の念が起らず、あまり生活が裕富であれば軟弱になつて克己奮勵の念に乏しくなる。これに反し、生活があまり豊かならざれども、向上進歩の刺戟があれば反省をなし、克己奮勵、所謂立身出世をなすことができる。

集團が他の集團を壓伏して奴隸となすところに苦汗労働が現はれる。苦汗労働と用役とを掠奪するものと掠奪されるものとが分立し、茲に支配者と奴隸とが現はれる。

四 奴隸と社會的鬭争

奴隸は社會的鬭争に於て不利な地位にをかれてゐる。國家の小集團はいづれも生きんがため、ヨリよく生きんが爲めに仲間生活に入り込み、集團生活をなすのであるが、概して、優等階級は劣等階級よりも集團形成の能力に富んで居る。第一、劣等階級は大眾であるが故に、全體としてそれを集團にまとめることは容易な業ではない。第二、劣等階級は無智で無學で無能であるから無頓着であり、統一すること難く、従つて組織をつくることができない。統一なく

組織なき大衆は烏合の衆に等しく、戦闘力が微弱である。ただ、劣等階級が生活の向上を來した場合、餘暇を生じ、反省をなし、知能を開拓するから、差別意識が尖鋭となり、従つて、團結をなすことができる。こゝに、劣等階級のうちにも統一と組織とが形成せられる段取りとなり、現に労働階級に於て見るが如く、戦闘力が増大されるが、概して劣等階級は大衆であるし、また、それに統一を與へ組織をつくることも困難である。その結果、劣等階級は優等階級に對し有効なる戦闘をなすことができない。第三、奴隷たることの意識が鮮明でない劣等階級は無情で、放漫で、無感覺で、その解放を策する能力鈍く、また、その必要を感じもしない。第四、劣等階級は生活上の慾望が發達向上せず、且つ精練しないので、優等階級に對抗して利權を奪還する必要生ぜず、ために、生活上の權利を主張する氣力に乏しい。第五、劣等階級は欲望乏しき上に、共通な欲望、共通な利害を感ずること少く、殊に大數なるが故に、全體として共通な欲望を取りまとめ協同一致の歩調をとることがむづかしい。

これに對し、優等階級は幾倍劣等階級に比し有利な地位にあるか知れない。第一、優等階級は少數であるから容易に統一をすることができ、従つて、組織をつくる如き一舉手一投足であ

る。烏合の大衆に對し、少數なりとも、統一と組織とをもち、座作進退、一々適法なるをうるに於て、奴隷たる大衆を相手として易々それを打破し壓伏するにいたるは一見明白である。第二、優等階級は閑暇をもち、反省をなし、知能を開拓する餘裕があるから、意識は自づから尖鋭であり、敏感で、共通な利害を辨別する能力が強い。従つて、容易に團結して共通な意識の下に共同な利益を獲得維持するに餘力をあまさない。第三、優等階級にあつては物質に關する欲望は無論として、分化せし高等な精練したる欲望を有ち、微より細に入つて欲望を分化させ、底止するところを知らざるが故に、これ等數と種類とに於て大なる諸々の欲望を維持し獲得する熱情に燃え、従つて統一もし團結もし易い。こゝに優等階級固有の強大なる組織力が發現する。第四、優等階級は少數であり、共同な利益を感ずること敏感であり、欲望は質に於ても種類に於ても多く、従つて容易に團結する性質をもつ。その上、優等階級は統一と組織とについて嚴重なる鍛鍊を受ける機會に富んで居る。これ、烏合の大衆たる奴隷に對し優勢であり、搾取を可能ならしむる理由である。第五、優等階級に於て階級意識の鮮明なるは自明である。第六、劣等階級は欲望を認識自覺する能力に乏しきに反し、優等階級は欲望を反省し、そ

れを欲求する念が熾烈である。第七、優等階級は質に於ても量に於ても多き欲望の束によつて團居するからその数の少き劣等階級に比し團結の必要を感じる念旺んであり、従つて、優等階級は劣等階級に對し、その鬭争に於て頗る有利な地位にをかれてゐる。

優等階級と劣等階級とのかゝる組合せに於て、優等階級の優勢なるべきは自明である。優者は縦へその數に於て少く、九割九分の大衆に對峙するとは言へ、組織と團結とによつて烏合の大衆に對し、共通なる關心によつて緊密に結合し、且つ、よく鍛練されたる精兵たる實を示すから、鬭争に於て無數の奴隷に對し命令權を設定し生殺興奪の權を掌握するにいたるのである。

優者の環境は恵れて居り、従つて、優者の欲望は多々益々増進するが、かくの如き増進する欲望によつて愈優者の團結は緊密になりまざる。これが優者に權力を付與し、大衆を奴隷として、少數者のために勞働させ、その結果を提供させる權能を獲得するにいたる所以である。優者は數に於て少なく、互に交通し、互に親み合ふ機會があり、かつ、習慣や趣味が同じであるので、統一し團結する傾き強く、たゞ數に於て膨大で、かくの如き緊密なる團結をなし能はざ

る大衆に對し、奴隷製造能力の旺盛なるは自明である。

人間は仲間生活をなし、仲間と共に他の同類を搾取し掠奪するを以て一生の能事とする動物である。この事は如何なる階級、職業、集團に於ても同一であるが故に優者と劣者との間に聊かも差等ありと思はれぬ。すでに、人間が仲間生活をなすといふ一事が他の仲間生活をなす一團を攻撃し浸害し略奪する陣立をつくつたのであるから、かゝる戰團陣形をもつ惡黨が如何にしても溫和であり親切であり慈悲の念に富むとは想像されぬ、かゝる無法な想像をするのが既に誤つて居る。然るに、馬鹿氣た氣休め的の謬說謬論が哲學者倫理學者などによつて製造傳播せらるゝので、無智な無批判的な大衆は恰も人間は溫和で親切で慈愛の念に富む道德的存在の如く妄想するのである。劣者や奴隷を掠奪する優等階級、支配階級だけが他の勞働の成果を掠奪し横暴を極むるやうに妄想して居るが、劣者、劣者階級と雖もヨリ劣弱なる集團を搾取し掠奪するに何の異りはない。勞働者、勞働階級は恰も資本家及資本階級のみが不人情であり無慈悲であり非人道であつて、搾取掠奪を事とする鬼畜のやうに考へて居るが、これ程事實を曲解せしことはない。逆に言へば、勞働者及その階級は人類に對して決して一視同仁なものではな

く、すでにその相手たる資本家及資本家階級を敵視して、それを搾取し掠奪せんとする氣勢横溢する。資本家や資本家階級が悪いのではなく、生物としての人間そのものが斯くの如き利己的で無慈悲であるのである。等しく悪逆な人間たる資格をもつことに於ては資本家も、労働者も同等であり、従つて同罪である筈である。資本家が搾取掠奪をする悪魔なれば、労働者も亦搾取掠奪をする鬼畜ではないか。労働者やその先陣を承はつて解放運動の牛耳をとつて居る人々は恰も人類的な人道的な聖戦でも起して大衆に奉仕して居るかの如き氣持であらうが、それ等の人々も依然集團的偏執狂者であり、あらゆる人類をひねりつぶしても、唯労働者とその團體のみの利己心を満足さるべく畫策してゐるのである。階級的立場にあり集團的立場にある限り、何づれが是、何づれが非なるや分つことはできない（拙著「閥の偶像」を通讀されたし）

いつでも、社會的闘争に於て優等階級支配階級は優勢であるが、それは習慣、法律、制度を自己階級の存立に有利ならしむるが如くなしうるので、一層有利となり有力となる。但し、革命といふが如き異常の場合には數が優勢となり、それによつて勝敗が決せられるから、少數なる優等階級支配階級はその固有の特質によつて、平時に於ては強く、異常時には弱いといふこ

ととなる。平時に於ては支配階級はその存立に都合のよいように習慣をつくり、法律を定め、制度を造つて、赤手空拳、利権を收得し、且つ、流れ去る權益を固定して確保する。これによつて、特權階級は權利を設定し、益々奴隷を掠奪して一切の權益を獨占する。この事はいづれの集團、階級でも同一であるから、獨り支配階級のみが横暴なのでない。一度び劣等階級が支配階級の地位に進めば、その次に攻撃した支配階級と寸分も異はぬ暴虐振りを敢てすること請合である。無産者無産階級のうちにも、少數の指導者や指導團があつて、大衆を堀の埋草にして、獨り利権を占斷してゐる。無産者社會の壓制社會たるべきは人間の性質上毫も疑ひなきところである。

人間の欲望は絶えず増進するが、この進みまさる欲望は奴隷の用役と労働とを徵發することによつて充足される。資本家のみが労働者の労働の成果を搾取し收奪するのではない。一切の集團、一切の階級は他の集團の労働と用役とを掠奪するのである。たゞそれを可能とするものは收奪し、無力無能にして不可能なるものは掠奪しないだけである。人間が他の労働の成果を掠奪する性質をもつことに於ては平等であつて何の差等はない。虐待せられ掠奪せらるゝ側に

向つた方から見れば、用役徴發は實に不倫理であり非人道であつて、不都合であると感じるけれども、壓伏し收奪する側に向つたものから見れば、それは單に一層存立に都合が宜いと考へるだけである。優者強者は掠奪を一種平凡な既得權として眺め、欲望の増進に連れて益々それを擴張せんと専念し焦心するだけである。個人としては合理的なものと不合理的なものに分けられるが、集團は不合理なものと決つて居る。個人としては道德的なものと然らざるものと別があるが、集團は不道德なものと相場がきまつて居る。集團は畢竟かくの如き性質のものであるから、支配者と奴隷についても、それに價值判斷を下し或は善いと言ひ、或は惡しと言ふべきでなく、單に冷やかに事實によつて表示すべきのみ。弱者劣者は優者強者がそれを奴隷として悲境に沈倫させるといふけれども、奴隷も亦幸福な星の下に生れれば、相も變らず、他の同類を奴隷として苦役を命ずる動物ではある。支配者と奴隷との間に寸分も持つて生れた性情に差異ありと考へることはできない。支配者が奴隷から勞働と用役とを收奪するのは不人情なためでも非人道なためでもなく、畢竟自然物として、かくあらざるを得ざるように造られてゐるからである。この外に何の理由もない。それ故、社會的闘争に於ても、いづれが

是、何づれが非といふべきでなく、これを生物學的現象として眺め、たゞ、本能の如何ように動くかを靜觀し認識すれば足りる。個人は倫理的存在であり、倫理的判斷の對象だとすることが出来るが、集團は自然的存在であつて、集團本能によつて左右せられるだけである。

奴隷は社會的闘争によつて現はるゝにいたつたものである。奴隷は社會的闘争によつて生ぜし敗者である。すなはち、闘争に劣敗したものが奴隷となるまである。社會的闘争がなければ無論奴隷がないこと、恰も戦争がなければ戰敗國がないと同じである。然らば、社會的闘争が必ず奴隷を生み出すのであり、人類社會が集團的闘争につくる限り、如何なる形ちに於てか、如何なる種類の人間に於てか、奴隷として現はれるわけで、いつまでたつても地球上から奴隷なるものはなくならぬであらう。一の階級が他の階級に戰を挑んで、それを打破すれば、該階級は解放せられるけれども、それによつて従服されて新たに奴隷たるにいたる階級がある。然らば、人類の生存が階級闘争の形ちに於て進む限り、奴隷を削り去らんとする人類の熱情と理想とは結局久遠に酬われぬであらう。今日、勞働者が階級闘争の形式によつて資本家階級に争ひつけ、一種崇高なる人道運動、人類解放運動など惚れて有頂天になつて嬉しがつ

て居るが、是又、相も變らず、我利亡者の利己的な亡靈に取りつかれる慾張運動で、その非人道不道德なることに於ては寸分も資本家やその階級の行動に遜色はない、絶対にない。

然らば、社會的闘争がなくならなければ奴隷はなくならぬし、また、いつまでたつても劣者解放の必要は消滅しないであらう。換言すれば、どこまでいつても社會的闘争はなくならぬし、従つて、奴隷も絶対に消滅しないであらう。階級的立場の消滅は集團の消滅と同時であるから、無集團の時代にいたれば、階級的立場なる忌むべき闘争形式は衰頽消滅するであらう。階級的立場の消滅と、集團の消滅と、社會的闘争の消滅とは同時である。集團が消滅すれば社會的闘争は消滅し、従つて、階級的立場も不用になる。但し、永久に集團は消滅しない。

五 奴隷産出の方法

奴隷は如何にして産出せられるか。如何なる方法によつて奴隷は産出せられるであらうか。奴隷の産出は個人の暴虐や悪徳には何の關りもない。奴隷は集團の集合的動作のうちに發生する。個人が仲間を造るや否や、合理的な人間は不合理的感情的な人間と早變りをなし、道德

的人道的な人間は不道德的非人道的な人間に豹變する。合理的道德的人道の雰圍氣から奴隷といふが如き忌むべきものは現はれない。斷じて現はれない。然らば、奴隷は個人的動作の結果でなく、集合的動作の結果であらねばならぬ。集合的に無慈悲非道德な眞似をなすところに奴隷が現はれる。

集合的に奴隷を産出するにはその機關がある。集合的動作は機能であるから、この機能をはたらかせる機關があるのである。生理と解剖とが相呼應するが如く、機能と機關とは互に他を豫想する。奴隷は集團の集合的動作によつて産出せられるものとすれば、その機能を表現する機關がなくなつてはならぬ。支配階級はいつでも集合的な奴隷産出機能を實現すべき適當な機關をつくる。現時の特権階級としての資本家は労働者を奴隷として、その用役を命ずるには習慣、法律、制度をつくり、その目的達成を可能ならしめる。議會も亦一般民衆の利益を反映せざる如きものは特権階級資本階級の利益を増進するに役立つ。資本家、金融資本家は議會を支配して、政黨を左右し、従つて、政府を勝手な方向へ走るべく餘儀なくさせる。資本家の支持しないような政黨も政府も維持存立することができないとすれば、資本家の命令權は絶対

である。かくして資本家は奴隷を産出する機關を用意することができる。これに對し、労働者も亦その機能を表現する機關をつくらなければならぬ。これに應じ無産政黨ができ、ついに労働内閣も出現するにいたるであらう。労働組合も亦奴隷の出現を少くも阻止し防止する機能をつくすであらう。資本家も労働者も我利亡者であることに於て寸分の異ひがないとすれば、資本家を罵る労働者は自己の面へ唾する類でいづれが是いづれが非なるか判明せず、ただ兩者共に自己集團の立場を有利ならしめるため狂奔し熱狂し宣傳し弾劾し闘争しまわるのみ。資本家が労働者を奴隷としなければ、今度は労働者が資本家を奴隷とするであらう。中世の奴隷たる資本家は現代の主人公として浮び上り、出世したが、これが爲め又別の奴隷ができた。但し、今の奴隷が主人公となれば、又何か別の奴隷が現はれて来て、永久に壓制掠奪がつゞくであらう。いづれにしても、奴隷は必ず存在する。いつれにしても、奴隷は必ず産出せられる。學閥は利權占斷の機關として、學校を用ゐる。現代の學校は教育所といふよりも、社會的地位分配機關であるから、學閥は社會的地位獲得に關し獨裁權を設定して、閥外のものを驅逐し去る。中世の親方はギルドに占據し、現時の資本家は議會と政府とを傾使し、商人は同業組合、

卸商組合、商業會議所をつくつて利權を維持し擁護し且つ増進する。いづれの階級いづれの集團にあつても、機關なくしては集合的動作をなし、集團の社會的闘争を結果あらしむることはできない。但し、機關のうち強大なるものもあれば、劣弱なるものもある。強大なる機關に占據するものはいつでも特權階級である。

特權階級は法によつてその地位を維持し擁護し、その利權を伸張する。國內の諸階級諸集團は一として對立關係を生ぜざるはなく、社會的闘争は隨所に紛生するが、その中にあつて、他を制壓して權力を揮ふものは、法によつて優勝的地位を占得する特權的階級、特權的集團である。法は畢竟集團の利權を擁護し、他をして窺はしめざる強壓的手段である。かういふ法律ばかりではないが、全體としては、集團階級が自己集團、自己階級の利權を占斷しうるように力を用ゐて強壓するによつて、概して法は特權階級の生存と繁榮とを助長するやうなものとなつて現はれる。それ故、諸階級に對し一視同仁といふような法なるものは容易に存在せず、法は多くの場合特權者、特權階級に有利なるように造られてゐる。たとへば、女子に對して姦通罪が成立しても、男子に對して成立しないといふような偏頗な法律は合理的立場から造られたも

のではなく、強者なる男子が勝手に自己に都合のよいように拵へ上げたものである。法は概して男子に有利となつて居り、女子に不利となつて居るのはこれが爲めである。この事は階級の場合に於て一層さうで、法は客觀的に造られたものではなく、特権者及特権階級を保護するよりに出来上つて居る。そこで、特権者、特権階級は法を利用して地位にあり、利権を占斷して下層者を壓迫し、非特権者非特権階級は法を逆用される地位より免れんとして絶えず争ひつづける。茲に絶えざる社會的闘争が行はれる。

奴隷は無力な機關によつて産出せられる。有力な機關に占據するものは支配者となり、無力な機關に占據するものは奴隷となる。社會的闘争は集合的動作によつて行はれ、機關を通じてその機能を有力に發表し有力に執行する。こゝに支配階級と奴隷とが分立する。

参 考 文 籍

一、海野幸徳「階級闘争の研究」

階級の闘争團體なることに就ては第二章第一節「階級と闘争」第二節「團結と闘争」第七

節「經濟的闘争團體と階級」を参照せられたし。

二、海野幸徳「閥の偶像」

第十二章「社會的闘争」には街頭社會觀に於ける諸々の集團闘争を縷説し、集團が分立しさへすれば社會的闘争は必然入來する所以を示して居る。

三、海野幸徳「階級闘争の研究」

第四章「階級闘争の本質」には階級間の闘争の由來を闡明し、奴隷出現の根據を明かならしめて居る。

四、海野幸徳「日本社會政策史論」

第二章「日本社會政策の起源」第三章「集團的困窮の出現」には大正七年以來我國に現はし社會的史實によつて六種の集團的社會闘争の行はれしを示し、利権の占斷及讓歩は集團間の闘争の形ちに於て出現するを事實の上より縷述闡明す。

五、海野幸徳「社會政策概論」

第二章 奴隷の出現

第一章「人間解放と自由への途」には如何にして不自由人としての奴隷が出現するかを示す。

六、海野幸徳「閥の偶像」

第四章「閥の偶像の正體」第五章「閥の心理」第十章「閥と健康・才能・性格」第十一章「社會的地位分配の方法」には閥の權益を獨占する結果として、その他のものに残さるゝものなきを示し、非特權者の不遇に沈倫する次第を述ぶ。



第三章 奴隷の解放

一 奴隷の解放

奴隷の解放はそれが全人類の解放であるといふイリヨウジョンを起させなければ成功せぬ。思想の傳播は奴隷解放の前提である。奴隷の解放せられるのは先づそれに有利なるが如き思想を喧傳し、民衆の間にこれを普及し、一般にその支持を受けなければならぬ。支配階級にしても、奴隷にしても、その行動を正當なものとして、民衆に反映せしめなければならぬが、この手段即思想である。思想が如何にして解放手段となるかと言へば、思想は單に思想として止るむべきものにあらず、それによつて、民衆に影響を與へそれを行動に變化するからである。非特權者は思想を用ゐて民衆を納得せしめ、集合力によつてそれを權利と思はせ、相次いで、權利として設定するのである。

併し、思想のみによつて解放に成功することはできない。如何なる階級が思想を用ゐようと

も、そはその階級を限り有利なるが如き思想たるを免れないから、一般民衆は直ちにその思想に加擔する氣にはならぬし、また、加擔するものでもない。そこで、解放されんとする奴隷階級はいつでも恰もその解放が全人類の解放なるが如き錯覺を起さしめ、全人民を加擔せしめて、その解放過程を了らなければならぬ。現に、労働者とその運動家とは恰も労働者の解放が全人民の解放であるが如く言ひふらし、一部の特權者たる資本家が全人民を塗炭の苦に陥れて居るかの如く吹聴し宣傳しまわつてゐる。労働運動者やその指導者のうちには、その運動が恰も全人類解放の聖業でもあるかの如く妄想して居るものもあるし、然らざるものと雖も、労働者をして然か信ぜしめ、それをあやつり、その運動を利用して野望を遂げやうとする。労働者解放運動なるものが、全人類解放運動でないことは分り切つて居る。如何なる集團、如何なる階級と雖も、徹底的利己主義者の寄り集りで、他のために潔く奉仕するなどいふ博愛者流は見渡すところ絶えて存しない。天帝が絶對的利己主義者として人間をつくり、それでなければ生きて行けぬやうに造り上げたから、人間は最後の一人にいたるまで、自己とその仲間とのためにのみはかつて忠實なる動物となつた。労働者に限り、この原則を外づれるやうなことはな

50

二 全人類の解放

そいで、労働者や徹底的利己主義者たる労働指導者も亦その解放を策するにあたり全人類の名を僭する。労働者の解放はやがて全人類の解放である。資本家は貪慾で非人道で、自己の慾望のためには敢て全人類を苦め、全人類を死地に陥れて居ると宣傳これつとめる。集團的利己の遂行には先づ全集團の名によつて錯覺を起させるを常とする。労働者の解放は相も變らず全人類の名によつてなされて居るが、その欺瞞たるや一目瞭然である。昨、資本家が全人類の名によつて人民を欺いたやうに、今、労働者は同じく全人類の名にりて天下を欺いてゐる。中世の庶民階級たる資本家はその解放を策するや、普遍的な人類の權利として全人類のために自由と平等と博愛とを絶叫した。然るに、愈、資本家が天下を取るや全人類の自由と平等と博愛とをかなぐり捨て、たゞ、自己階級のみ自由と平等と博愛とに局限した。よつて、現に見る通り、資本家は労働階級に咆哮され闘争をつづけなければならぬ。資本家にしても、労働者にし

ても、夫々、集團に歸屬し、等しく集團精神に支配さるゝ限り、自己のためにのみ生き、自己集團のためにのみはかる徹底的利己主義たるは自明である。然るに、この徹底的利己主義者たる労働者や資本家が解放の征途にあたり、全人類の名を僭して、その私利をはかり私慾を遂げんとするのである。いつでも、全人類の美名に欺かれて奴隷解放に加擔する民衆は、一度び、奴隷が解放さるゝや、遂に今度は解放されたる奴隷のために奴隷の地位につき落されて奴隷となる。庶民階級に過ぎざりし中世の資本家に欺かれて、その解放の手傳をなせし民衆は、今度は労働者となつて前の奴隷たりし資本家の奴隷となつた。然るに、今又、労働者が解放を策し、その天下を實現せんとするにあたり、再び全人類を昇ぎ出して、労働者の解放は全人類の解放だなど、欺き傳へてゐる。全人類の解放などいふやうなことは未だ曾つて行はれない。人類の踏破せし悠久の歴史の一頁だに全人類の意識は織り込まれて居ない。人類は我利主義者で、自己と自己集團のために一切他の集團に屬する無数の同類を屠り殺しつゝあつた。かくの如き人類の生存形式に於て、労働者に限り、全人類の福祉のためにはかるなどは無稽で欺瞞ではな

いか。

如何なる集團でも、大衆の支持を受けなければならぬので、全人民の名を僭するのであるが、實は自己集團のみの解放を目的とするに異りはない。そこで、大衆に阿附し、その歡心を買つて、その支持と擁護とをえて、自己集團を解放し、支配者たる地位を占得せんとするのである。

三 権力と正義

支配階級若くは解放されんとする階級は、いつでも、力と権力とによつてその地歩を維持し、その權益を増進せんとするのが、力や、権力と銘を打つてはならぬので、暴力や権力の形式を飽くまで避けるが、暴力や権利で行ける間は行くであらうし、それが又、利權を獲得し増進する有効にして直接的な方法でもあるから、つとめてこれに依るであらう。但し、力や、権力によつて被支配者奴隷にのぞむとするも、無力無能ながら絶えず支配者や特權階級に抗争するから、いつ、それに取つて代はれるか測り知ることができない。よつて、如何にしても、最小限度の思慮を奴隷に分與しなければならぬ。権力ばかり振りまわして居ては危険なる事態が

生ずる虞れがあるので、権力を正義化する必要を生ずる。無闇に押しつけければ反感を買ひ、相次いで、反逆となるから、権力は権力であるが、つとめてこれを正義によつて着色し、その形相を柔げる工夫を積む。こゝに於て、特権者と特権階級の権勢が一定度の制限を受ける。

四 集團の不道德性

尤も、特権階級に正義なるものはあり得ない。正義、人道、道徳は個人にはあるが、階級集團にはありうべくもない。個人には有徳なものも、善良なものもあるが、集團には惡徳な不正義なものがあるだけである。たとへば、個人としての善正なる政治家はあるが、一國を代表する政治家は狼の如く侵略的で、獐猛であり、乃至、狐の如く狡猾で、欺瞞百出、信用のをけぬものときまつてゐる。個人としての學者は至極公平であり正義の念に富むが、學園に屬する學者は不公平で私利維れはかり、その利己主義に眼をそむけざるを得ぬ底のものばかりである。これ、集團、閥、國家の行動懸引が不正義と欺瞞とに満ち、惡辣百出、底止するところを知らざる所以である。政治家の施政方針が締盟諸國家の平和協調を云々するが如き空世辭は常例と

して何人も氣にかけぬが、その欺瞞たるや苦笑を禁じ得ざるものがあらう、列國いづれも虎視眈々、他國の間隙を窺ひつつけて、寧日とてはない。平和と協調とに終始して居たはづの國家と國家とがその宣言の消え失せねに既に武備を修めて野獸の如き獐猛をもつて他國を侵略する。かくの如きは極めて平凡なる人類界の出來事に過ぎない。政治家に禮儀とか、正義とか、道徳とか、條約とか、同盟とかは一片の空文で、勝手に造つて勝手に破る反古同然のものである。獨逸が白耳義の中立地帯を浸したなどと言つて囂々たるのは、平時の筆法を戰時に移すまでである。平時に於て、そんな子供だましな條約が諸國家の間に協定され、勢力均衡などいふ名目で維持されるか知らぬが、素より、力さへあれば、勝手につくり勝手に破りうる底のものである。平時、條約や同盟を破れば忽ちそれ相當の制裁を加へられる虞れがあるから、餘儀なくそれを格守するまで、これを破る方が却つて都合がよく、然も破りうる實力が生さへすれば、何の遠慮もいらぬとあつて、反古同然破棄するであらう。何人に對しても、何の國に對しても、無益な遠慮はいらぬと決つて居る。集團爭覇の世の中には道理や正義などいふことは通用しない不換紙幣である。かゝる不換紙幣を通用するなど、妄信するので、徒らに、獨

逸が中立地帯に關する神聖なる條約を破棄したなど、いつて騒ぎ、手前勝手な非難を浴せかけるのである、如何なる國家と雖も、力が得られさへすれば、條約でも同盟でもその都合に従つて破棄し、生存と繁榮とに都合のよいように行動するは毫厘も疑のないことである。條約や同盟を後生大事に貞節を勵むなどは、地球上にはあり得ぬ滑稽である。地球は自然律の支配するところで、道德律などはわづかに一隅を占むるのみ。八割九割の自然律と一割二割の道德律との組合せが現實な人間社會である。殊に、集團の行動は徹頭徹尾自然律の支配するところで、その間に正義だの人道だの道理だのといふことは微塵も行はれない。國家間の關係が道德によつて律せられると考へる程事實に合はないことはない。國家の間には單に不道德な懸引があるだけである。昨の味方、今の敵で、味方にするにも、敵になるにも、損だ徳だでなす離合集散に外ならない。不俱載天の仇敵は個人の間にはあるけれども、國家の間には絶えてない。多年仇敵の關係をつゞけ反目し合つて居ても、一朝兩者の提携を有利とするやうな事情が生ずれば、忽ち敵と提携して、多年の盟友の如くすまし込み、よい機嫌で交驩する。

國家間、集團間、階級間、閥の間に禮儀とか正義とか道德とかといふことは微塵も行はれて居らぬ。人類が地球上に現はれ來りし以來或は六十萬年或は百萬年の間、集團間には譎詐權謀があつたゞげけで、道德などは毫厘も行はれなかつた。ただ、個人間にそれらしい關係を生じたこともあるが、それも例外で、多くは生存と利權獲得のために厚意を表し道を行ふまで、純粹に道德に支配せられるといふやうな天上界の聖事は曾て行はれたことがない。

五 奴隷の消滅

個人間には道德があつても、集團間には道德は絶えて行はれない。個人の世界には多少の道德が行はれるとしても、集團の世界にはただ自然律が横行濶歩するのみ。

奴隷はついに消滅するであらうか。

奴隷はついに消滅しないであらう。集團は自然律の支配するところで、毫も道德律をいれぬ。集團は不道德性を赤裸々に表白して、少しも變色も褪色もしないであらう。ただ、この間に集團の擴大なる事實によつて多少の變調を見るのみ。

集團の擴大によつて集團間の關係は敵對より協調に進む。敵對關係が協調に進むのは、道德

律によつて然るのではなく、ただ集團内ではヨリよく生きることができないといふ自然の理由による。ヨリよく生存する方針に従つて集團は終始擴大しつゞけてゐる。原始人の部落生活の擴大は道理によるのでも正義によるのでもなく、たゞ、一層擴大する集團によつてヨリよく生きんとする自然律によつてである。

かゝる性質の集團ではあり、一に自然律に支配せらるるかぎり、集團間の敵對はあつても協調はありえない。一の集團は他の集團を征服して、その集團を限り一層ヨリよき生活をなさんとす。集團本能の支配は終始一貫してゐる。それ故、道德の増進により人道精神の勃興によつて、階級間集團間の融和をなし遂げ協調を策するが如き方法は恰も木に椽つて魚を求むる類である。集團間の協調と融和とは終始進みまされることによつて、集團と集團とが提携し融合する過程によるのであるのみ。

集團は融合によつてヨリ大なる集團となりつゝある。集團の融合によつて、一の集團は他の集團と融合するから、そこに存在せし奴隷は蓋し消滅するであらう。もし、一切の集團が消失して、地球上唯一大集團が存在するのみとなれば、無論、集團間の現象としての集團的闘争は

なくなる。集團的闘争がなくなれば、奴隷も無論消滅する。奴隷の存在は集團が分立して、その間に勢力の不平均ができ、一の集團が他の集團を征服して暴虐を重ね壓制を逞するからである。理論的には世界大の集團出現の可能はあるが、文字通りな世界的な一大集團は竟に出現せぬであらうから、分立し區別せらるゝ集團はどこまで行つても存在し、かくて、集團間的現象としての社會闘争もついにその姿を搔き消さぬであらう。集團と社會的闘争とのあるところは、必ず奴隷がある。集團の亡ばぬ限り奴隷もついに消滅せぬであらう。

世界大の集團が成立せし場合を想像するも、世界各所に純一無雜といふが如き状態を考へることはできず、各所に他と區別せらるゝが如きかたまりができるであらうから、奴隷若くは奴隷らしきものは永久に存在するであらう。

但し、集團間の擴大によつて奴隷の数は減縮せらるゝであらう。奴隷は集團と集團との間に發生するであらうから、集團の数が少くなれば、それだけ、その間に生ずる奴隷も亦少くなるであらう。なほ、集團は漸次その區劃を嚴密なものとなせず、ゆるやかなものとするにいたるであらうから、其毒威も亦減少し、漸次ゆるやかに自他應接し折衝することをうるにいたるで

あらう。果して然らば、遠き將來に於て、集團と集團との間に生ずる社會的闘争も影の淡きものとなり、その間に發生する奴隷も亦程度の劣れるものとなるであらう。かくして、一般に融和と協調の氣分が濃厚となり、協調の世界に歩一步接近することができらるであらう。

参考文献

- 一、海野幸徳「階級闘争の研究」第十三章、第六節
- 二、海野幸徳「社會政策概論」第一章
- 三、海野幸徳「次の社會」第十六章
- 四、海野幸徳「閥の偶像」

本書て於ては暴虐、残忍、不正義、非人道、不道德性を分析披開し、峻烈なる批判を下した。閥の潰滅なき限り平和な愛好な公平な國內生活は不可能である。殊に、第四章「閥の偶像の正體」、第五章「閥の心理」、第六章「二枚舌・二重道德」を見られたし。

第四章 社會的傳統の社會心理的起源

一 社會的傳統

風俗習慣、職業、知識、理想、倫理、宗教、文化などは一切社會遺傳として個人に傳達する。個人は個人として個性をうるのではなく、社會的遺傳によつて個性を得るのである。人間を取りまく環境は自然であるよりも社會環境である。人間は社會の付與する思想、知識、信仰、趣味、職業、風俗習慣によつて個性を得て人となる。集團には各特殊な知識、習慣、風俗、理想、倫理、宗教、藝術があり、これによつて集團を異にするだけ特異な個人ができ個性ができる。その上、集團はその領有する特殊な社會財産をそれに屬する個性に押しつける。集團人としての個人は集團の思想、信仰、趣味、風俗、習慣に追従するもせざるも意のままなるにあらず、集團は不可侵の威壓を以て集團人をして集團のもつ思想、信仰、趣味、風俗習慣など一切文化遺産を襲用せしめる。そして、これに追従せざる個人は危険思想家として、異端者と

して、奇矯なものとして集團より排除せられる。群居本能による集團本能は暗示作用を通じて、その中の集團人として集團の思想感情意志を採用せしむる。こゝに於て、集團の思想と行動とはその儘個人の思想と行動となる。集團のもつ思想は個人を壓迫して、それを採用せざるものを危険思想家として拘束し、集團のもつ信仰に追従せざるものは異端者として迫害し、集團のもつ理想をそのまゝ取り入れざるものは、反逆者として集團から驅逐する。社會的遺産はすべて集團に生れる個人に、個性を付與する役割をつくすが、その上、個人を強要して社會的遺産をその儘採用せしむる。そこで、社會的遺産は二のはたらきをなすことが分る。一には、社會遺産は社會環境をそのまゝ傳達することによつて個性をつくるが、二には、個人の好むと好まざるとに頓着なく、個人をして必ず社會的遺産をその儘採用せしむる。社會的遺産を其儘襲用するものは集團人たることを許され、それを拒むものは集團に所屬することを拒まれる。集團は類同意識によつて、同氣相求め同類相引くが故に、それと歩調を合せ得ざる同類をすべて集團の圏内より驅逐し去る。動物は自然環境に支配せられるけれども、人間は、社會環境に支配せられる。動物は遺傳によつて形體を整へるが、人間は社會的遺傳（社會財産）によつて形

體をつくる。よつて、人間が、個性を得て人間となるには、一々社會財産を社會的遺傳の形ちによつて傳達せられることに依存する。身體的遺傳は原形質を通じて傳へられるが、精神的遺傳は一の例外なくすべて社會によつて傳へられ、社會遺産として傳達する。こゝに、個性ができ、人間が現はれる。人間の人間たるには一に社會的遺産の傳達による。

二 社會的傳統と具象的社會集團

社會の傳統は社會から發現するけれども、この言表は一層制限する必要を感じず。社會的傳統は一般抽象的社會の所産ではない。廣き漠然たる社會が傳統を造り出すのではない。それよりも、具體的な社會的集團が傳統をつくるのである。一社會には國家、地方團體、職業團體、宗教團體といふやうな具體的集團があるが、かくの如き具體的な集團即ちグンプロウキツチ氏の所謂 syngenetischen Gruppe が傳統をつくるのである。シンデニズムとは社會生活に於ける特定の人間の集團で、他に對し鬭争をなすために結合したる統一體であり der Syngenisms, d. i. die Erscheinung, das sich überall im sozialen Leben gewisse Menschen-

gruppen, die untereinander eine nähere Zusammengehörigkeit fühlen, als einheitliche Faktoren im Kampfe um die Herrschaft geltend zu machen suchen である。具象的社會集團にはそれを統一體として結合するシンゲンニズムがはたらいて居る。具象的集團に屬するものは特殊な集團的感情をもち、その圈、その集團を中心として眺め、思ひ、感ずる性情をもち、それから、保護を求め、そのために一身を犠牲として奉仕する傾向をもつ。特定の關心あるものは一の集團にまとめられ、同様な關心をもつものは同一の統一體に屬して、それに忠誠を勵む。具象的集團はそれを形成する基礎と利害關心とによつて範圍と大きさとの大小様々なる統一體をつくる。具象的集團の基礎は感情であり、一の集團に所屬するものは互に親和を感じ相ひき相結合する。この感情は遺傳的な集團本能より發するものである。集團本能は遺傳的なものであるが、環境の影響によつて變化する可變的なものである。原始社會に於ては、それがたとへ共同な血縁によつて結合せず、單に寄り集りに過ぎないにせよ、共同なものとして群居する意識が生じさへすれば、具象的集團として集合することができた。こゝに、他の集團に屬するものに對して仲間であつて同類であるとする意識が生ずる。この意識が同等であると感

ずるものを集合して一團をつくる。原始時代に於けるかゝるシンゲンニズムの感情を傳承して、現時に於ける各種の具象的集團が存立する。身體的にも精神的にも類似し、同じであると感じ、同類に自然的な同情をもち、結合して、異ると考へるものに對立するのが具象的集團である。具象的集團はシンゲンニズム感情によつて結合する集團の謂であり、抽象的にいふ社會と異ふが、かゝる具象的集團はその範圍とその感情との強弱に従つて、種々様々なる社會的集團をつくり、部落より、國民、人種といふやうな集團をつくる。一の職業によつて寄り集つたものもシンゲンニズム的集團なれば、ついに世界大の關心によつて集合せし集團も亦具象的集團である。(抽象的集團ならず、その中に世界大な具象としての社會的傳統、血統の類似、同一をいふにいたれば)

社會的傳統は抽象的集團によつて傳達されるのではなく、具象的集團によつて傳承されるのである。人間の生活は抽象的社會生活でもなく、また、個人生活でもない。人間が個人として生存するにあらざるは自明であるが、さりとて、抽象的な社會生活をなすのでもない。人間が抽象的な社會生活をなし、所謂、社會動物であれば、すべての人間に對し一視同仁であり、愛

他博愛でありうるけれども、人間は具象的な集團のうちに生れ住むので、他の具象的集團に對しては友好關係にありえず、敵對關係たらざるをえぬ。こゝが人間の社會動物たる性質を一層限定しなければならぬ必要を感じしむるところである。人間の社會的動物たる意義は抽象的に社會一般に對し親和友好するのではなく、たゞその屬する具象的な特定な集團に對してのみ親和友好を感じる義である。それ故、如何なる社會に對しても親和愛好するといふ意義に於て愛他博愛であるのではなく、一の特定な具象的な集團に對してのみ親和愛好する意味に於てのみ社會的なのである。人間を社會動物といつても、それは、一般的な社會動物たるにあらず、具象的な社會動物たるのである。

そこで、人間の社會性は明かに看取せられる。人間は個人として生きる動物ではなく、仲間生活をなし、社會動物として生きるものである。が、その社會たるや、一般に社會と呼ぶものではなく、特定な具象的の社會圈内に於て社會的と呼ばれるものであるに過ぎない。それ故、個人が具象的な集團を立ち出づれば忽ち社會性を失ひ、寧しろ、反社會性を逞ふする。特定の集團内にあつては、親和愛好するが、集團外に對しては嫌忌反撥に終始し、鬭争を事とす

る。この意味に於ける人間の社會性若くは社會動物たる所以のものは、一般社會に於けるものと異り、單に特定の社會に關するものに局限せられる。特定の社會圈を出づれば、人間は社會動物たる代りに、非社會動物となる。

かくて、傳統に關する範圍内に於て、人間が社會的遺産を傳承するといふのは *syngenetischen Gruppe* の文化遺産を繼承することを意味しなければならぬ。集團人は一般に他の集團より毫も影響を受けないといふのでないけれども、その影響たるや、特定の集團に受納されて消化され、該集團固有の文化となつたものから改めて影響をうけるのである。他の集團の文化遺産を傳承するものは、特定集團の存立に危険なりとして驅逐せられ、乃至、絶滅せられてしまふ。それ故、如何なる文化遺産なりとも、特定の具象的集團に攝取せられ、その固有なる遺産たるにいたらなければ、傳承することはできぬ。これ、社會的遺産、文化的遺産の傳承が特定な具象的集團に限定せらるゝ所以である。

これによつて、社會的傳統はすべて具象的集團によつて、その所屬個人に傳へられるを知る。人間の一舉一動は社會一般、世界、人類に關して行はれず、具象的社會集團に關して行は

れる。個人は絶対個人主義者利己主義者でなければ、それかと言つて四海同胞主義者でもない。人間はその中間にあつて具象的集團に對して忠誠を勵む集團人なのである。個人は個人として思ひ感じ行動するにあらず、集團人として、特定集團によつて思ひ感じ行動するのである。人間社會に於ては、個人と抽象的一般的な社會とは何のはたらしきをなして居らぬ。人間に對し意義があるのは具象的な集團だけである。人間は具象的な特定集團のうちに生れ思ひ感じ行動するのであり、具象的集團活動が人間の一切合切である。

三 社會的傳統の性質

社會的傳統は一般社會的に形成せられず、具象的集團によつて形成せられる。思想、信仰、趣味、習慣、理想などはすべて個人的産物でなく、従つて個人的に創造されるのではない。それは社會的産物であるけれども、一層適切には具象的社會（具象的集團）の産物である。個人が思ふといつても、隨意に個人が思ふことのできるわけのものでなく、集團が思ふところを指し示し、個人の感情、行動亦個人のものではなく、集團のものである。集團が思ひ感ずるやう

に、個人も亦思ひ感じなければならず、いつでも、個人は集團の見本たるまである。もし、個人が集團の思想感情及行動から離れて、独自のものを創造すれば、善くも悪くも反逆人として排除せられ、乃至、絶滅せられる。個人は遺傳によつて人となるが、原形質の開發には環境の影響がなくはならぬ。この場合、環境とは自然環境の謂ひではなく、社會環境の謂ひであるが、社會環境と言つても、抽象的なものでなく、具象的な特定な集團の提供する社會環境である。この社會環境によつて、個人は風俗習慣と、職業と、文化と、科學と、藝術と、宗教と理想とを付與せられる。人間は特定の集團によつて生き、それによつて思ひ、それによつて感じ、それによつて行動する。人間は家族、階級、職業、團體、學校、宗團によつて生き、それによつて思ひ感じ行動する。それ故、家族の思想と感情とを離れたる個人なく、階級を離れて抽象的に遊離する人間なく、職業團體の統制に服せざる如き人間なく、學閥によつて進退せざる如き公平なる人間なるものは絶えて存しない。

人間はどこまでも運命的動物である。如何なる集團に屬するも任意ではない。富者となるも貧者となるも、個人の努力と能力によるよりも、偶然運命によつて然るのであり、生れて來た家

柄によつて然るのである。貴族や富豪の家庭に生れて来たものは、それ相當な出世をなし、榮進をなし、富裕であるが、貧家に人となりしものは如何に努むるも畢竟手から口への生活をなす外はない。如何なる階級に屬するかによつて、人間の運命はきまるが、個人の選擇によつて所屬、階級がきまるわけのものではない。如何なる職業、如何なる學問に所屬するかは偶然の運命によるが、これによつて大半人間は榮へもし、衰へもする。

これによつて社會的傳統なるものは社會心理的現象で、個人心理的現象にあらざるを知る。従つて、風俗習慣、職業、思想、知識、宗教、道德、理想等、いづれも社會心理的現象であつて、個人心理に關係がないことが分る。

四 風俗・習慣・道德

風俗習慣や道德は社會的產物であつて、個人的產物ではない。それは具象的集團が所屬個人に傳へ、等しく集團人をして採用せしむるもの。かくの如きものが風俗習慣であり、道德であり、藝術であり、宗教である。個人はいづれも集團のうちに思ひ感ずるのであり意志することも亦

集團於にてある。風俗、習慣、道德は具象的集團のうちに發生したものが、その儘個人に傳達せられ、個人は一樣に集團の風俗、習慣、道德の色調を帶ぶる。集團のうちに生き住む個人は集團の壓力によつて一樣に集團の思想信仰趣味をその儘採用するが如く、集團のもつ風俗習慣道德をその儘襲用する。それ故、風俗習慣と言つても、道德と言つても、社會心理的產物であつて、個人心理的產物ではない。

道德は個人の純粹意志より發する行爲と見る倫理學上の見解は誤つて居る。道德は個人的な意志によつて如何ともなす能はざるものである。集團のうちに個人的に發明し創造せし宗教なきが如く、集團のうちに個人によつて意志せられる個人の行動に基く道德なるものはない。道德とは集團によつて植えつけられたる倫理的判斷である。正邪と言つても、善惡と言つても、倫理學的のものではなく、また、客觀的にいふ正邪善惡なるものでもない。いつでも集團が造り持つ倫理的判斷なるものが個人の道德となる。風俗習慣と言つても、道德といつても、集團のうちに生きる衆個人の千萬無量の交感によつて現はれたる社會的產物、共同產物である。風俗、習慣、道德は集團内の個々人が交渉し交感し、一が他によつて絶えず變化されて復合的に

産出さずる結晶體である。個々人のもつ風俗、習慣、道徳は或個人的中心より四方に波及し、他の意見、判断と交渉し關係して變形せしめられ、又、他を變化して進み、錯綜して交感する間に、そこに比較的固定したる風俗、習慣、道徳が現はれるといふ仕組みで出来上つたものである。かくして出来上つた固定する風俗習慣道徳が具象的風俗習慣道徳となり、今度は、それがあらゆる集團人を變形し支配するやうになる。風俗習慣道徳は集團人の交互關係によつて出来た産物であるが、それは又過去に於ける無数の個々人の交感若くは交互關係によつて出来たものである。この間に新しい風俗、習慣、道徳が現はれても、無数の個人によつて造り出されたる風俗習慣道徳に壓倒されて、存続することができない。なほ、過去に於ける無数の個人によつて造られた風俗習慣道徳は類同意識によつて集團を代表するものとして見られ扱はれるから、これに背反する新なる風俗習慣道徳は邪道として排斥され、その存続は許されない。傳統とは代々傳達さるゝすべての思想傳習の總和を意味する。傳統は個人と個性とをつくる。過去に於ける無数の傳統の傳達をうけず、遊離し孤立する人間は無内容に等しい。個人の内容は過去から傳はり來りし傳統がそれをつくる。傳統なくして個人生活をなすことはできない。

い。個人は過去の豊富なる遺産を用ゐて存立するが個人の現はれ來る毎に新たに生活の方法を探求しなければならぬとすれば、個人は生きて行く術を知らぬ。過去の傳統なき人間は昨日なき人間で、その一生だけで、すべてを清算する人間である。個人の心理に現はれ且つ消える思想、習慣なるものは、他人に傳達されず、固定なることができない。個人が一々經驗、思想を新たに獲得するとすれば、到底、人間たる體面を保つことができず、又萬物の靈長としての位置を得、威嚴を保つことはできなかつたであらう。露西亞の Coadajew 氏は露西亞人は傳統に於て貧弱であるが故に、強固な國民精神を欠き、身體的並に精神的特質が脆弱であるのはそれがためであると言つてゐる。傳統は國民精神の中樞をなすから、傳統の貧弱なる國民は強固な國民精神を發現することができないのである。ギンスベルグ氏は Possibly the suggestive force of custom is due to the herd instinct と言つて居り、傳習の個人に勢力をもち、威壓することのできるのは、それが集團本能によるからであると考へる。單に傳習に限らず、一切の傳統は集團本能によつて、その中の個人に威壓力をもち、拘束力をもつ。ギンスベルグ氏は原始社會に於て個人が同一な行爲をなす理由を示して、Certainly in primitive societies

ties Custom permeate all spheres of life and prescribes the minutest details of conduct; and among civilized peoples the sway of custom and fashion is greater than is commonly realized. Ultimately the power of custom is due, in all probability, to the biological utility of uniformity of action. In early phases of social evolution, it must have been, as Bagehot points out, of tremendous importance that some general rules should be established which should bind men together, make them do much the same things, tell them what to expect of each other. No doubt, too, it is largely because men instinctively feel the importance of custom that a semi-supernatural sanction was attached to it, and departure or deviation from it severely punished. psychologically the force of custom is often ascribed to habit and suggestion. But such generalities explain very little, The force of suggestion

is due to an appeal to some emotional and instinctive tendencies, the arising of which tends to inhibit all conflicting ideas and to maintain the suggested idea in the focus of attention and to give its dynamic energy.

と言つてゐる。これによつてギンスベルグ氏は傳習 (Custom) として個人に壓力を加へるものは感情的本能的な傾向であると考へそれを集團本能に歸してゐる。但し、傳習のみが集團本能に淵源し、個人に壓力を加へるのではなく、社會的傳統は一も例外なく集團本能によつて集團人に威壓を加へ、それを制壓し、その一舉一動を拘束するのである。思想に於ても、道德に於ても、宗教に於ても、理想に於ても、集團は感情的に本能的に個人を制壓するのである。たゞ傳習のみが、集團本能によつて壓力をうるのではなく、社會的傳統、社會的遺産はすべて集團本能によつて個人を制壓する力を獲得するのである。

原始人には不可知が恐怖の泉源であつた。知りうべからざるものには危険が包藏されるので、原始人は不可知を忌み嫌つた。常恒的で絶えず繰り返へすものは最も安全で信頼することができるが、變化に對しては打算することができず、豫知することができないので、不安を感じ

相次いで恐怖となつて現はれる。こゝに、絶えず繰り返へす傳習に對して愛好と信頼とがあり、新しいことに向つて不安と恐怖がある所以である。バジエホット氏は人間の性情に對して最も苦痛とするところのものは新思想の苦痛であると言つた。

傳習、道德、思想はすべて集團本能によつて個人に壓力を加へる。原始人以來、不可知、新規は不安と恐怖との泉源であり、固定したる傳習、道德、思想を固執して渝らず。集團は類似若くは同一を基準となし、異質異類を絶対に嫌忌し排斥す。

傳習、道德、思想は社會的產物であり、更らに、具象的集團の產物であるが、傳習、道德、思想など、すべての傳統は最初個人の創造によつて現はれたものが社會に融解し、他の個人の創造と交渉し交感して、そこに社會的產物としてのすべての社會的傳統が産出せられたのである。

風俗習慣、道德が純一であれば、社會、集團は強固であるが、一の社會、一の集團に含るゝ風俗習慣、道德が異ふ場合には、その間に鬭争が行はれ、社會の固定性を滅滅する。國內に被壓迫者があり、風俗習慣、道德がその他の小集團と異へば風俗習慣の異ふことによつて一致せ

ず、調和せず、絶えず小集團間に紛擾があり、鬭争が行はれる。かやうな小區劃間の反目、疾視、鬭争が度を踰へれば、社會國家の不安となり、その存在を脅かすにいたる。國內には、いつでも道德も思想も純一といふわけには行かず、舊新道德舊新思想は絶えず争ひつゞける。思想も、道德もたえず變化し、進歩するから、一定不變、固着して動かぬが如き道德も思想もない。そこで急激なる變化をなさず、徐々に新状態に調和しながら變化するが如き道德及思想の開展は社會の健全なる發達を指示する。この事は國內の小集團について言つて居るのであるが、更らに、國と國との關係もこれと大同小異である。諸々の國家が同一なる思想、信仰、政治、經濟をもつことはできないから、現に見るが如く、國家間には人種の異なることによつての鬭争、經濟的利害の異なることによつての鬭争、政治關係の異なることによつての鬭争などが行はれてゐる。但し、思想、信仰、政治、經濟などの差異を急激に統一せず、徐々に一致せしめ、調和を齎らすならば、國家間の協調を實現すること必ずしも不可能ではないであらう。かくてすべての國に及ぼせば、列國間の思想、信仰、政治、經濟、人種、などを統一し統合して、平和な世界的な國家間の聯合にも達するであらう。この事に就ては別に述べる。

五 職 業 ・ 經 濟

職業を異にし、經濟的利害を異にする集團は反目し、疾視し、鬭争する。

經濟團體、職業團體には夫々特殊な心理的構造が與へられ、特殊な組織がつけられ、その同一なることによつて特殊な集團ができ、よつて以て、他の集團に對し權益を維持し、増進せんと居常争ひつゞける。中等階級庶民階級たりし資本家階級の經濟生活は固有的な特殊な心理的構造と態度とを造り出した。資本家階級は商業的傳統に慣され、幼時より營利を事とするので、營利をあさること頭が埋められて居る。それに、都人士としての資本家は刺戟に感應するに敏感であり、交易を業とするので眼界が廣く、従つて、思想も豊富活潑であり、舊慣に捉はれず、進取の氣象に富むでた。當時、支配階級たりし貴族の特權に晏如として隨眠を貪るに反し、資本家は革命的で、社會の紛擾の中心となり、社會的鬭争を事とした。フランス革命が資本家階級によつて起されたのはこれが爲めである。

商人階級たる資本家にとつて、最重要なものは營利であり、黄金の獲得である。千七百年代

には黄金獲得熱が高まつたが、當時、和蘭の一諷刺詩は黄金禮讚をなし、かの如き意味を述べて居る。「黄金は藝術よりも、健康よりも、生命そのものよりも尊い。黄金愛好こそは人類社會をつくるもので、結婚をするにも、條約を結ぶにも、國家や都市を建設するにも黄金を要し名譽と尊貴とにいたるも黄金の力であり、喜悅と快樂に與るも黄金によつてあり、科學、藝術を進め、商業、煉金術、醫藥の發達を促すにも黄金がいる。また、黄金は哲學、繪畫、戯曲印刷師の技術をも進める。嘗にこれのみはでない。戰爭の技術を進めるのも亦黄金である。コロンブスと共にイサベラ、フェルデナンドが新大陸を發見したのも黄金の賚である。愛錢は異端邪宗にあらずして、眞の基督教信徒の須らく勵むべきことである。愛錢こそは女神と言ふべきである」資本家は愛錢の先鋒であり、黄金獲得慾の權化であつた。この目的を達するため、資本家は集團的鬭争を用ゐたが、これがフランス大革命となつて現はれたのである。資本家は革命を起して舊制度を打破し、一舉に營利、黄金獲得の目的を達した。資本家が營利の目的のためには手段を撰ばないのは、その他の團體が各その目的貫徹のために手段を撰ばないと同一であり、敢て異となし珍となすに足らぬ。

資本家経済はたいい金銭で表示しうべき貨物若くは勤勞に關する契約である。資本家の經濟活動は金額の獲得にある。こゝに於て、資本家經營には計算が重要な役割を勤むる。舊時に於ては、人間はすべて經濟生活の中心であり、商買にも喜怒哀樂が加はり、情も魂も入り込んだが、資本家的經濟には、血あり肉ある現實の人間は去り、抽象的な營利心とか、實業とかとそれに代はつて現はれた。資本家の營利心は無限に刺戟せられる。資本家の目的は餘剰にあり、利益にある。然るに、この營利は無限に延長さるべく擴大さるべき性質のものである。企業の隆盛を欲するならば、事業にも利益がなければならぬ。企業の繁昌は收支勘定の上に餘剰を生じ利益を生ずることである。社會の需要が經濟活動を決定して居た時分には、營利活動には自づから界限があつた。併し、營利心と事業の隆昌とが經濟活動を決定するようになれば、其目標には際限がなくなる。どれだけ儲かれば終末に達するのであるか分らないようになり、ついに終末といふものがなくなり、無際限に營利に猛進するやうになる。これが現代資本主義精神の表現である。一事業を極度に伸ばして、それ以上進むことができなくなれば、それより分枝としての企業を他に造り出す。かくて、根幹と枝葉との事業が錯綜して、それからそれへ

と企業は發展して行き、際限がない。そこで、現代の企業はそれを無限に擴張する主義をとり補助事業附加事業へと進む。かくて、現代營利組織は最大限の經濟機關の膨脹となつて現はれ最大限の生産をなし、それを能きる限り最低價でうり、巨大なる製造をなし、交通機關を無闇に擴張し、物資、人間及報導を最迅速に輸送することによつて、その特質が表現せられるようになる。

資本家生産は量的なもので、質的なものではない。それ故、良質の物品を少し造るよりも、悪質でも量の多い方がよい。現時の人間は購買にあたり、法外に高價なものを買はぬが、また安いものを買はぬ。高いものを買はぬのは購買力がないからである。現代人は金額さへ高ければ良い品物だと誤信するから、高價なもの程買いたいのである。たゞ購買力がないから仕方がないとあきらめるまで、現代人は安いものは悪いと思つてゐる。物品を質によつて判定する習慣がないので、量によつてそれを價値づける。價の高いものは良いもの、低いものは悪いものと思つてゐる。そこで、人物、都市、鐵道船舶、記念碑などは一々量によつてはかられる。人間に對してはその富の多寡や収入の高下によつて評價をなし、都市は人口幾十萬、幾百

萬で競ひ合ひ、鐵道は何千哩何萬哩で競ひ、船舶は幾十萬幾百萬噸で競ひ、紀念碑までがその高さで優劣がきめられる。資本家、商買人としての米國人には、質まで分るはづがなく、Biggest in the world とか Largest in the world とかと言って誇り、世界第一の高さを、世界第一の大きさだと言つて子供くさく誇る。こゝに現代實業家的精神がある。

それに、現代の特徴としての速力の早いこと、新奇なものを珍重すること、強力を愛することが資本家企業家の目標となる。現時の資本家は純理主義であるから、その經濟活動は論理によつて一貫され支配される。往時の生産は需要生産であつたが、現時の生産は交換を目的とする生産である。出來うるかぎり、多量に物品を生産し、出來うるかぎり多額の利益を貪り取る。従つて、生産したる物品の質よりも、量の多いことを目標とする。交換するために造られる物品であるから、賣れさへすればよく、茲に現代特有な販賣術が擡頭する。販賣のためには手段を撰ばぬし、又、撰ぶこともできぬ。賣りさへすればよいから、種々の奸策を用ゐて、百万賣ることを力める。それに附隨して現代惡辣な廣告術が跋扈するにいたる。廣告によつて没趣味、非美術的非道德的物品を賣るのであるが、賣りさへすれば如何に民衆の道德を破

壤し、如何にその藝術を俗化し、如何に其趣味を下賤にするとも關するところではないのである。資本主義の販賣は薄利多賣である。安く賣つて多く捌く、これが現代企業家の販賣術の一である。この目的を達するためには、種々な拘束があつてはならぬから、曾て資本家から自由放任が要求されたのである。自由主義の社會かくして入來す。經濟的營利の活動は無制限である。何等の束縛なく、拘泥なく、無制限に營利をはからなければならぬ。茲に、現代の道德と没交渉なる營利が開展する。無制限なる競争には手段を擇ぶ追なく、また、手段を擇ぶべきものもないと考へるから、狡猾、猾智、惡辣、非道の限りをつくして、商業道に猛進するにいたる。近世の資本主義の開展するところ、その勝利者は恩人をうり、先輩を傷け、朋友をたゞきつけ、小兒の如く一切の道德を無視し、惡辣非道の限りをつくした。

かくの如き黄金慾と企業的精神の淵源に關し、ゾンバルト氏はこれを左の五要項に分つて説明する。(一)日耳曼羅馬の精神より發現したる自然科學の勃興によつて資本主義前進の途が備へられた。(二)資本主義は猶太精神より出た投機心に煽揚せられ、近代の技術的進歩は近代の投機と結合して、資本家企業に必要なべき手段を供給した。(三)資本主義は猶太人の

感化をうくるにいたつて、一層急速に發達した。猶太人の感化が歐洲經濟生活に波及したのは、十七世紀以來のことであるが、その後、何ものにも拘束せらるゝことなく經濟活動を開展するにいたつた。(四)基督教を信ずる國民の宗教心が減退せしため、資本主義を控制せし倫理觀や傳統が勢力を夫ひ、資本主義の前進を容易にした。(五)才能ある企業家實業家の出現によつて資本主義の前進を促した。

資本主義は善いにせよ惡いにせよ、人間生活を全く一變して別の軌道にをくにいたつた。人間は交換價值の上に賣りさへすればよく、儲けさへすればよいから、風俗や道德を遠慮なく破壊してもよく、宗教を蹂躪し去つてもよく、科學や藝術はすべて量に換算してもよい。こゝに血と肉とを盛つた實現の人間は失はれ、それに代つて抽象が現はれ、合理的主義によつて計算術が全盛であれば宜いことゝなつた。こゝに黄金慾と金錢獲得の外、他念なき小兒の如き人間が出現した。

資本主義の機構、資本家の精神は自然的產物であつて、價值判斷の對象となるべきものではない。資本家が好むも好まざるも、資本主義組織が發達しさへすれば、それに固有な心的構造

が開發し、資本家的精神なるものが發現するのである。

資本家が貧慾で營利の外他念がなく、眼中道德なく、人道がないとして、かゝる集團が形成されるれば如何なる要求をなし主張をなすかは先刻明瞭であらなければならぬ。個人としては如何に善良公平なるも、集團に入り込み集團人とならば、邪惡で偏頗であるにきまつて居る。資本家が資本組織のうちに生れ育ち、その精神に養はれたから強慾非道なものでもあるが、それだけでなく、集團として成立しさへすれば、強慾非道たらざるをえない。その上、無制限なる營利活動によつて全く器械化され、合理化されて居るのであるから、血も人情もないのは當然である。

資本家は集團人として既に偏見と差別と排斥と鬭争とをなす性質をもつのであるが、それに資本家としての固有な精神の發現としての強慾非道が加はる。かくの如き性質の人間に對して道理を求め、人道を望むは、恰も鬼畜に對し神佛たらんことを望むと同一であらう。要之、資本家的精神は個人的產物ではなく、社會的產物であり、殊に資本家階級なる具象的集團によつて造り出されたものである。個人としての資本家が好むと否とに拘はらず、資本階級に生れ育て

られさへすれば、資本家的精神を發現するのであり、個人としての徳性や品格如何に關はらぬ。人間は集團に所屬することによつて始めてその色調をうるから、資本家としての冷酷、強慾、非道は集團たる餘儀なき結果で、個性には何の關係があるとは思はれない。

下層階級はすべて上層階級に對し深き惡意を包藏する。現今、抑壓せられ酷待せられ、用役を徵發せらるゝ労働階級が資本家階級に善意をもち、親切で温順であれと望むことはできない。虐待され酷使せらるゝものは自づから上層階級に對して深き怨恨をもち、居常反噬するのは當然である。敢て、下層者、労働者が惡意で鬭争好きなのではない。労働者の心理は矢張り個人的産物にあらずして、社會的産物である。労働者の仲間入りをすれば、何人でも労働者心理に融合せざるをえぬ。資本家であつても、一朝労働者となり下り、労働者の仲間入りをすれば、徐々、資本家的精神を失ひ、労働者の心理に支配せらるゝにいたる。労働者が好んで資本家に挑戦し鬭争を事とするのではない。如何なる集團でも利己主義で、他の集團を蹂躪し打破し、權益を獨占せんとして腐心し焦心するに變りはない。労働者が居常資本家に反噬し鬭争をなすのは、集團の本質を發揮するまで、個人としての労働者に何の關係はない。その上、勞

働者の利己主義排他心を非難することはできない。個人として利己的であり排他的であれば排斥すべきであらうが、集團としての労働階級は、その他の集團と同じく、利己で、強慾で、勝手で、惡辣であるときまつてゐる。労働者は個人的産物ではなく、労働階級なる具象的集團の産物である。こゝに、個人としての労働者と、集團人としての労働者とが分立する。

職業團體は分化する一方である。すべての職業團體は特別なる關心をもち、特殊なる心理構造をもつ。實業家團體に入れば特殊な心理があるが如く、官吏、學者の團體は又別の心理が支配するであらう。官吏は公僕であり、社會公共のために働きつゞけると思つて一種の奉公心に燃え、愉快に活動してゐる。一度、官吏が籍換へをして實業家の群に投ずれば、今更らながら、その念とするところが會社、銀行の營利に外ならず、株の上り下りに外ならぬと知つて興味索然たるであらう。教員階級には特殊な教員心理がある。衆議院議員の泥仕合は國民教育を毒するなど、言つて憂ふるが、衆議員に限つて泥仕合をなし、非道徳なのではない。政黨なる集團に屬すれば、如何なる善人哲人たりとも泥仕合に耽らなければならぬ。泥仕合の連中に元司法官を見出すが、司直の經歷ある人と雖も、政黨員としては、さうあらなければならぬや

うに出来上つて居る。敢て、それ等の人々が他の職業團體の人々と異つて下品なでも悪辣なでもない。多くの場合、それ等の人々は智徳に於て水準を抜いてゐるのであらう。但し、教員の眼にこれが泥仕合と映ずる程教育界には道德的な零圍氣があり、教育的な構造があるのであらう。それであるからと言つて、特に教員には道德的な人物のみがすぐり出されて任用されて居るわけではない。たゞ、集團が異へば、具象的集團によつて特殊の心理、特殊の心的構造ができ、それによつて、別異な個人が現はれるといふ外ないであらう。諸々の職業團體は一として同一の精神をもつて居らぬ。官公吏、軍人、大學教授、實業家は各別異の心理をもち、實業家のうちでも大實業家と小實業家との心理は異ふ。職業が異なるにつれて主義が異ひ、理想が異ひ、その義務とするところも亦異ふ。職業團體の異なる主義、理想をそのまゝとしてをいて、各種の職業團體を融和協調せしむることはできない。職業を異にするにつれ別異の心理があるとすれば、これをその儘にしてをいて、各種の職業團體を協調せしめ融和せしむることは無効であり、又無法でもあらう。

職業團體は一々それに對當する職業心理をつくり出す。諸々の職業團體に屬するものが特殊心理をもつことより見れば職業心理は個人心理ではなく社會心理であり、従つて、集團心理であることが分る。異なる職業團體は社會的產物としての異なる心理をもつ。職業團體のうち、一として他によつて繰り返へされるような同一な心理をもつものなきを以て見れば、如何に職業團體間に社會鬭争が居常慣行されるかを知るであらう。集團は同氣相ひき異類相撥くを原則とする。職業團體にして、この原則を反映せざるものはないから、異なる心理構成をもつ諸團體の間には同氣相求め異類相撥く現象が行はれるのであらう。こゝに、職業團體間に於ける社會的鬭争の慣行を見る。

上中下の各階級のうちにも夫々小分けがある。上層階級のうちでも、實業家と軍人や學者とは必ずしも一致し調和しない。これ、それ等小分けの心理が各異つて居り、各異なる團體に屬すると思ふからである。政治家は狐の如く狡猾なもの、狼の如く侵略的で残酷なものであり、二枚舌の如き平氣で使分けする不徳漢である。二枚舌を願下げたいやうな氣の小さき人間は政治家にはなれぬときまつてゐる。實業家は計算器で、合理主義によつて抽象化され、血と涙とを盛つた人間たることから遠く離れて、無制限に營利を追求する物理的存在に早變りをしてゐ

る。無論、政治家にも實業家にも善人もあるが、それ等の人々は人間としても政治家乃至實業家としても優等品たるまである。中等階級の中にも舊中等階級としての小商人、小工業家といふやうなものと、新中等階級としての官公吏、會社員、商店員、銀行員との間には別異の心理が支配する。商人と工業家との間には異ふ心理がはたらいて居り、金融資本家は猶太人的な下劣な根生をもつ代物であるが、これと一般商人との心理とは必ずしも同一ではなく、外國貿易商と小賣商とは異ふ心理の持主である等、同様な職業のうちにも、小分けとしての別異の心理が繁昌する。投機業者といふが如き大に儲けて大に損をなし、結局、一文も儲けないといふようなものと、恒産あり恒心ある實業家とは似てもつかぬ別異の心理をもち、工場労働者と家内労働者との間にも區別されるべき心理がはたらいて居る。家内労働で安賃金を得、朝から晩まで働いても、碌に口に糊することのできかねる慄むべき職人と、金鎖を胸に閃かせて恰も紳士でもあつるが如く振舞ふ熟練職工とは各別の心理をもつ。その如く、教師、官公吏、司法官、辯護士、醫師、技師などの間にも特殊の心理がはたらいて居り、一々、他と區別するような作用をつくす。

これ等職業團體の間に紛生する諸々の特殊心理は各一團として仲間を集結させるはたらきをするが、それが明かに、或は暗にでも、他と區別されると知るや、忽ち集團心理が躍り出で、職業團體の對立を促し、鉦をうち鳴らして、鼓旗の間に相見えるにいたる。素より、職業心理はそれに屬する個々人に對しては先天的であり、超越的で、個人の造り出しのものではなく、任意に如何ともすることのできるものではない。従つて其紛擾その闘争は個人の如何ともなす能はざるところで、個人は偶然某々職業團體のうちに生れたといふ單なる自然的運命を帯ぶるに過ぎず、これによつて他の職業團體と関をつくつて戦はなければならぬのである。個人として見れば悲むべきことではあるが、團體としては如何ともなす能はず、たとへば悪感、たとへば嫌忌、たとへば排斥、たとへば闘争あるのみである。この間に、何等個人の好悪と恣意とは働らいて居らぬ。それにも拘はらず、職業團體が分立しさへすれば、闘争氣分を煽り、嫌忌排擠するを避くることができない。

集團は個人の思想、意見、感情、道德を造り出す。個人の思ふところも、見るところも、感ずるところも皆集團のものである。職業や經濟の異なるによつて大小様々の集團が分立するが、

一々、職業團體、經濟團體は特殊の心理に支配せられて、他と對立する。こゝに、職業團體が互に融和せず、協調せざる理由がある。

血縁が絶大なる集團力をもつ次第については他のところで述べた。但し、血縁が同じでなくとも、それが區別認識されざる程度のもなれば、却つて、風俗習慣や、職業や、宗教や、文化によつて個人が離合集散する。如何なる人種と雖も純一なものはない。人種は殆んど他から區別せられざるまでに交雜して居り、世界廣しと雖も、一も交雜しないような人種なるものはない。生物學的若くは人種學的には人種の間には原形質上の差異あるは自明であるが、これによつて、人種の優劣を定めうる程、今のところ、一人種が他人種より區別さるゝ何ものをも科學的に證明することができない。國內に多種多様の血縁ありとも、これを區別することができない場合には、國內人種の間には反目はないが、區別せられる場合には無論、反目疾視が行はれる。(埃太利の場合の如し。)但し、異なる人種が同化されて容易に區別せられない場合には(日本人の如し)人種的特質よりも職業、習慣、宗教、文化といふが如き社會財産の差異の方が離合集散の泉源となる。生物的素質が異つても同化せらるゝときは、時に職業の異なるといふような

契機によつて反目が起る。如何なる國に於ても、人種的形質が交つて居るから、人種的區別によつて相争ふよりも、社會的に傳達する社會的傳統によつて相争ふ方が多い。職業の異なるものは集團間に紛擾を起し、鬭争を起す。

風俗習慣は一の記號である。職業は一の表章である。宗教、文化皆然らざるはない。集團の前には一々異なる記號、表章、旗幟たるべき別異の風俗習慣、職業、道德、宗教、文化のあるあり、各々異なる旗幟を押し立て、國旗の翻るところ、その集團に忠誠をつくし、他の一切の集團を打倒すといふ態度をとる。たとへ、衣服が異つて居ても、頭飾の仕方が異つて居ても、かゝる些々たる差異によつても、集團が分立しさへすれば、その間に紛争が生じ、相殺し合ふのが社會的動物たる人間の人間たるところである。

職業の異なることによつて相争ふ理由はこゝにある。たとへ、それが社會環境による外部遺傳に過ぎないものであつても、聊かたりとも、職業上の習慣、懸引、道德が他と區別せられさへすれば、つねに紛擾を起し、時に猛烈なる社會的鬭争を惹き起すに十分である。

これによつて、職業、經濟の異なるによつて集團が分立するを知り、職業的區劃が嚴然として

存在すれば、集團間階級間の調和、協調は成し遂げられないことを知る。職業團體に屬するものは、社會的遺傳の形ちによつて社會的產物としての職業心理を受けつぐのである。その上、職業團體心理はその中に個人が交感し交渉し合ふことによつて社會的產物として出來上るのである。これが更らに次代へ社會遺産として傳達される。すべて風俗、習慣、職業、道德、宗教文化はかくして社會的產物として成立し、一々區劃に入り來るものと同じ色調によつて變化し、その成員となす。こゝに鬭争の種子蒔きがなされる。

六 集團的要素と社會的反感

原始社會の如く何づれの點に於ても異なるなく、すべて類似するものは結合最も強固で緊密であるが、集團的要素の數の減少するに伴ひ、集團の結合力は弛緩し、ついに、絶滅する。集團の結合力は集團的要素の増加するに従つて強大となり、その減少に比例して微弱となる。かくの如く集團的要素は結合して特殊なる集團の内容をなすが、これは又社會遺産として次ぎ／＼に傳達される。

集團的要素の數が増加するに連れて集團的結合は増大するが、それに従つて、社會的反感の度も増大する。原始社會に於ては如何なる點に於ても他の部落といれざる爲め、他部落に對する社會的反感は最も大であるが、現時にいたつては何づれの集團も他の集團と絶對に區別せらるゝやうに諸々の集團的要素の異なるが如きものはなく、いくらか社會的反感は緩和されてゐる。東洋人は西洋人の文化と生活様式とをいれ、外見上兩者の接近は密接であるから、これまでも通り反感を催すやうなことはない。チョン髷で西洋婦人と結婚することもできないであらうが、現時のハイカラ紳士は西洋婦人と手を取り合つて歩くに都合がよい。言語も互に通ずるし、習慣もある程度の接近をなし、文化上の差異も減縮したから、西洋人と東洋人との差異は想像する程著るしくない。ただ、皮膚の色が異ふといふような差異だけが將來に残るでもあらう。勿論、グスタフ・ルボン氏のいふやうに人種文化、制度の類似は皮相なものに限られ、基本的なものに及ぶことができないから、人種文化、制度の融合といふようなことは容易に行はれないが、ルボン氏の考ふるが如く異なる文化と制度との融合が不可能といふやうなことはない。今日まで幾度となく異なる文化や制度は融合して居り、痕跡を止めざるまでにいたつて居

る。

社會的結合體としての集團はそれを形成する集團的要素によつて特殊な精神的構造を造り出して、特殊な集團として成立する。特殊な心理的構造は要素の数の多い程、また、これが一定の結合方式をとる程容易に形づくられる。そこで、特殊な心理的構造は要素の一定結合によつて形成せられて、他の一切の集團と異なるものとして分立するにいたる。集團の強固なことから言へば、要素の多い程、それが特定な結合をなす程優れるが、その頑迷不靈なこと、その排他的なること、その野蠻にして残忍なることも亦參加要素の數に比例して増大する。従つて、集團的要素の多いことに比例して社會的反感が増大するといふ原則が生ずるであらう。

集團的要素の多い程、その中の個々人の性情は集團化するから、原始社會の如く一切の點に於て他と區別せられるような集團の個人は集團そのものたるが如く、少しも集團と區別せられず、その進退一に集團と共にせられ、死するも生くるも集團本位であり、最も集團に忠誠を勵むことができる。日本人が他の國民よりも國家に對して忠誠をつくす所以のものは、島國であつて、集團的要素の共通なものが多いからである。然るに、集團が他の集團の要素をいれ、彼

と此とが區別すべからざるようになれば、集團の成員を集團化する程度が漸減してくる。他の集團と共通な要素をもつやうになり、その數が多くなれば、その中の個人は前後左右に飄忽し、確乎不拔な自信のないものとなつて、集團に對し執着力を喪失する。最も自信のない人間は學者であるが、これ、學者は雜多な學說と意見とを知つて居り、容易にその一に對して確乎たる自信をもちえないからである。學者の如き前後左右に動搖する性情をもつて居ては政治家などは差向き失敗し失策するであらう。政治家は活舞臺に立つて、敏速に紛糾錯綜する形勢の中核を握り、盲目にも似たる暴斷を以て、神速に決斷を與へ、よつて以て大勢を制しなければならぬ。學者がかゝる眞似をすれば、常に淺薄不徹底な學論や學說にとらへられる外はない。學者は自說を固執してはならず、他說を疑つてはならず、絶えず動搖しながら、寸刻の猶豫なく、正しきに就かなければならぬ。學者は複雑であり、政治家は比較的單純である。

他と共有する集團的要素が少くなるに比較して、成員は前後に動搖し、これまでのやうな確乎不拔の信念をもたざるにいたる。従つて、集團、階級間の協調は集團的要素を共有し、共有する要素の數に比例して益々容易となる所以を知る。

要素の共有と、その数の多きとによつて、集團のために死ななかなの道德力を生じ、これを集團、階級に結びつけ、集團、階級、國家、人種に忠誠をつくす程度に於て集團の強盛をいたし、相次いで他の集團に對し排外心理を煽揚する。要素の共有少く、緊密なる結合をなさざる團體の成員は、縦へ、該團體を代表して動作するとも、その影の淡き薄きによつても何等の動反動の生ずるようなことはない。但し、この間に超集團的態度を生じ、諸集團を融和させ協調させるやうな契機が包蔵する。あまりに共通な要素の結合によつて他の集團と峻別さるゝときは、他と絶對に相容れず、激烈なる鬭争となる外はないが、諸要素の共通により、また、共通な要素の多くなるに連れて、集團間、階級間、人種間の協調は容易になる。こゝに階級協調の重要な原則が生ずる。

一の集團が、他の集團と要素を共有せざる程度に應じ、その成員は集團の好個の見本となる。集團が總ての要素に於て他の集團と異り、一も他に類似若くは同一なるものなき場合には、その成員は最もよく集團を代表することができ。かゝる代表者は最も光榮あるものとして味方から眺められ且つ待遇せられる。これに反し、要素の共通なるもの多き集團の代表者は

強いて人為故造されたる趣きを呈し、味方を欣喜雀躍せしめず、従つて、光榮あるものとして見られ取扱はれない。但し、世界諸國に於ける數多き集團はその界限を固守することはできず、大牙交錯するあり、要素の共通によつて流動し、多々益々、諸人種間に超集團的態度を造り出しつゝある。

集團の犬牙交錯する程度が進めば竟に集團は融合するにいたる。如何なる程度にまで諸集團が融合するであらうか。それは一には、世界大の一大集團にまで發展するであらうし、二には分立する諸々の集團は要素を共通にすることによつて敢て分立の必要なきにも立ち到るでもあらう。併し、これは理論的推考で、實際はかくの如き程度にまで綜合の歩を進めることは能きなからう。諸々の集團は分業によつて成立すると見る場合、すべての集團の要素共有は各固有の見地から、該集團特有の要素を中心として他の一切の要素を綜合することを意味するであらう。たとへば、職業團體について見る。醫師團體は藝術を中心として藝術、實業、政治、宗教、道德などを綜合するし、藝術團體は藝術を中心として、その他の要素と綜合するし、その他の職業團體もかくの如き方法で綜合するとすれば、分業によつて惹き起される分裂は消失し、一

切の職業團體は各専門的要素を中心としながら、非専門的要素をその周圍に綜合することによつて、何づれも同じ諸要素を結合し、類似の域に達すると見ることができらう。分業は集團の分裂を生み、綜合は集團の統一を促す。原始社會に於ける諸要素の綜合状態にあつては、部落内は平和と愛好とに終始したが、分業始るや、小集團の分裂となり、その間對立が起き、鬭争が現はれてきた。

然らば、階級の協調は要素の共有と綜合とによつてなされるといふ斷定に達するであらう。

然るに、總ての要素の綜合といふことは事實行はれがたく、諸團體が各あらゆる要素を共通に所有するといふことも事實ありうべからざることであらうから、分業の見地によつて分裂せし諸集團の對立は或は久遠に存続し、それがために諸集團を融和せしめ協調せしむることができるかも知れぬ。

併し、學問上可能なることに對しては、これを科學的課題となすに何の不可はない。よつてかくの如き協調にも深入りすることによつて、基礎的に階級協調の問題の解決につとめなければならぬ。論理的に可能なることは、それに對當する條件さへ具備さるれば、現實可能である

べきであるから、科學上、かくの如き範圍まで問題を押し進めることは決して不妥當ではな

5。

七 文 化

文化を基準として見る階級協調は困難であると思はれる。勞資協調などといふことを言ふが、文化の性質を吟味すれば、勞資協調は決して容易でないことを知るであらう。單にブルジョア文化とプロレタリア文化とを並列して眺め一を他と調和せしめるといふように考へるが、ブルジョア文化もプロレタリア文化も一定の社會組織を豫想し、それを基礎とする限り、單純にブルジョア文化とプロレタリア文化とを協調せしめることは能きなからう。勞働協調などいふ思想は文化の性質に通せざるもの、乃至、それを無視するものであらう。

ヴァント氏は文化 (Kultur) を物質的文化と精神的文化との兩方面を含むものと見、文明 (Civilization) を市民的關係、市民的生活、乃至、外部的なる政治的、社會的形體の義に解してゐる。ヴァント氏の限定は最もよく文化と文明との思想發達を表明するもので、大體、文化

は物質的文化と精神的文化とを含むものと解し、文明は市民生活乃至社會組織の發達といふ義に解す。米田庄太郎博士は「文化概念を物質的或は經濟的方面と精神的方面とを包有するだけに限り、社會組織方面をそのうちから除きたいと思ふのである」と言つて居られる。

文化は社會組織を豫想するとして米田博士は「今私は嚴密に社會學上から考へる場合には、人間が相團結して即ち社會をなして、廣義の人生の諸目的を達する爲めになす諸般の行動、及び、其等の行動の産物として其等の目的を夫れ夫れ達することに付て、一般的な或は普遍的な効力を有すると認められるものを、總て包括して之を文化と言ふのである。かくて私は先づ文化は單獨なる個人によつて直接に産出されるものでなく、人間の團結を通じて、或は社會を地盤として産出されるものであると考へるのである。そうして又夫れ夫れの文化は、夫れ夫れの社會組織によりて根本的に決定されるもの、或は制約されるものと考へるのである。但し、只社會組織が常に文化を決定し制約するだけであると見るのではなく、一定の社會組織を地盤として産出せられ又發達する文化が、其社會組織上に及ぼす直接の影響によりて其の社會組織が益々發達するものであることも亦其の文化間の間接的影響によりて其社會組織を根本的に改造

する勢力の發達することも認めるのである」(「現代文化概論」四二―四三頁―弘文堂發行)と言はれ、一定文化は一定社會組織を土臺にすることを示されて居る。

然らば、文化は社會組織を基礎として發達するとして、社會組織を背後とする文化は容易に自他交換し融通し合ふことのできない理由を知る。原始社會に於ては無論階級はなかつたがその後、階級が現はれ來り、所謂階級的社會組織を構成するにいたつた。階級が現はれ、相次いで國家が成立し、それによつて又文化が促進せられた。そこで、文化の發達と階級の分立及國家の成立との間には關係があり交渉があることを見免してはならぬ。階級成立以來の國家に於ては諸階級が紛然雜然存在せしにあらざ、系統をつくつて存在して居たのである。そこに上下關係が起り、體統が現はれた。體統とは優勢な階級が支配的地位を占得して、その他の階級を突き落して支配階級と被支配階級といふが如く分立し、そこに、上下關係をつくり出す狀をいふ。支配階級とは武力、宗教的魔術、血統若くは土地所有によつて他の階級を征服し、貴族階級なるか經濟によつて他の階級を克服せしブルジョア階級なるかである。武力乃至血統の力による支配階級たる貴族は中世にいたり商業や工業上の力が社會を支配し、土地所有をも經濟に

よつて左右する形勢を生ずると共に、武力及血統の時期は去り、經濟中心の素町人の時期が開
始され、茲に資本家が支配階級として地平線上に現はれて來た。貴族によつて代表せられたる
社會とブルジョアによつて代表せられる社會組織とは武力と貨幣との抗爭となつたが、ついに
貨幣が勝つて、資本家が世界を支配する地位を占得した。

武力文化と貨幣文化とはわけもなく置き換へることはできない。武力によつての社會組織と
貨幣によつての社會組織とが容易に自他交換し合ふことのできないように。なほ、財産、貨幣
の次ぎに登場して支配階級の地位を争はんとするものが現はれて來たが、これ即ち労働階級で
ある。労働者は資本家の財産に對して労働を以て争はんとしてゐる。こゝに、労働文化が對立
する。この二の文化は又わけもなく交換し合ふことのできるものでも、融通し合ふことのでき
るものでもない。こゝに於て、労働を基本とする社會組織が財産若くは貨幣を基本とする社會
組織と相争ふ形勢を生じて來た。この二の根本原理を異にする資本家と労働者とが容易に意氣
投合するものでも、融和するものでも、協調するものでもないことが分らう。經濟的社會組織
と労働的社會組織との對立するところ、自づからそれに對當する文化が現はれてくる。それは

貨幣中心の文化と労働中心の文化とであるが、この二の文化は社會組織を背後として出現する
ものであるから、單なる號令や必要によつて融和することができるものでも、協調することの
できるものでもない。文化は一定の社會組織即ち社會の構造乃至組立てを背後として生ずる。
文化が無意義に發生するならば、一の文化と他の文化とを代表する階級、社會的區劃を容易に
融和することができるが、社會組織を地盤として發現する文化を脊負ふ社會諸階級は容易に彼
此融和することができない。文化の見地からは同一若くは類似の文化を有する社會的區劃のみ
融和し協調することができるが、文化を異にする社會的區劃は容易に融和協調することができ
ない。文化は社會組織を地盤として産出し發現するからには、文化は特定の社會組織に依據す
るのであり、従つて、異なる文化は容易に彼此融合せぬ。文化の融合にはその地盤たるべき社會
組織が融合しなければならぬが、二の特定の社會的構造が融合するなどいふことは考へうべ
からざることである。こゝに、異なる文化融合の困難があり、異なる文化を脊負ふ二の階級、集團
の協調せざる理由がある。

資本家と労働者とを文化の上から協調させることは困難である。ただ、二の異なる文化を融合

するとのみ考ふれば、容易にこれを調和させることができるであらうが、文化は夫々異なる社會組織を地盤として産出せられて居るから、異なる文化を融合するは決して容易ではない。資本家組織と労働者組織とは二の對抗する相いれざる社會組織である。さきに貨幣文化が資本主義組織を地盤として、武力の地盤の上に榮えた貴族的社會組織を打破したように、今又、労働を根本原理とする労働社會組織が資本主義組織を打破し、それに代はらんとして、闘争をつづけつゝある。然らば、かゝる性質の文化即ち對抗する貨幣文化と労働文化とを、わけもなく融合協調せしめんとする程無理なことではないであらう。

資本家階級に對しては、それを擁護する道具として出來上つて居る文化を支持するのが便利であるが、労働階級には無論資本家の杖となり力となるような文化は邪魔であり、労働階級の發展のためには、是非共かゝる障害物たる文化を除去しなければならぬ。そこで、現代の紛亂は資本家的社會組織を労働者の社會組織に改鑄せんとして争ひ、資本家の文化を労働者の文化に置き換へんとして力争する。ここに、資本家文化と労働者文化との併立があるが、現代文化はかゝる併立文化によつて形ちづくられて居り、決して純一なものではない。現代に於ては、

大體、資本家文化が中心となつて一切を支配してはるるが、それと共に、労働者の文化も存在し、言はば、混合状態となつて居る。混合状態は混戦状態で、資本家文化と労働者文化との混戦である。

資本的文化の本質の何であるやについては拙著「次の社會」第五章に縷説した。そこでは、ゾンバルト氏の如き心理的解釋は不十分であるとして、現實的歴史的解釋を施した。今茲に詳細資本主義の何であるやを再説することはできないから、それについては「次の社會」を見らねたい。

資本主義はいづれにしても經濟偏重であり、唯物主義に究極する。資本主義は無制限なる利益を追求し、無制限なる營利活動をなす。ゾンバルト氏は無制限なる營利が資本主義を特徴づけるとして次の如く言ふ。資本的企業を盛ならしむるとは抑々何を意味するであらう。實業は營利に終始する、よつて、實業は餘剰といふことゝ不可離の關係にある。餘剰の獲得に成功することを外にしては實業はない。すなはち、利益なくしては實業はありえないのである。工場生産に於て優良なる貨物をつくつて世界の津々浦々にいたるまで品質の優良なることを以て

響き渡つたとするも、利益がなれば實業には何の役にも立たない。資本家の活動は利潤にあり、それが無制限なる利潤に延長せられる。初代の資本主義にあつては、社會の需要が經濟活動を決定したから、自づから活動の境界があつた。それに反し、利慾と事業の隆盛とが經濟活動を決定するにいたり、以前の自然的制限は行はれなくなつた。そして、如何なる點まで企業が延びて行つてそれで十分であるといふ境界がなくなつた。一の企業がヨリ以上繁昌しなければならぬといふことになれば、現代の資本主義は多方面であるから最初の事業に他の事業を積み重ね、かくて、第二、第三と附け加へて底止するところを知らない。近代の實業には二の強い傾向がある。一は同一の事業を膨張させることで、他はその事業から他の補助事業若くは附加事業に分岐し移動することである。これが怠でも應でも企業家をして前進すべく餘儀なくさせる。如何に企業家が事業を一定の範圍に制限しやうとしても、現代の企業はそれを不可能ならしめる。アンドリュウ・カルネギーは自叙傳に於て事業を擴張させまいと念じ希望するけれども、進まなければ退かねばならぬので、それが、能きなかつたと言つてゐる。ロックフェラーはトラストを創めた理由として、「これまで小規模の事業を個々經營してゐたが、資本と能

力とを合せて大規模なる事業を開始すべく企てた。然るに、新組織をつくると、なすべきことが無數にあることを發見した。それに對しては無論多額な資金がいる。よつて、自分からも資本を出し、他の資本と合して百萬弗を以てスタンダード石油會社を創始した。その後、多くの資本を投じて利益あるを知り、更らに、資本を三百五十萬弗に増加した。かくて、次ぎ／＼に資本を増加した。但し、終始目的は最良最廉の製品によつて事業の擴張を繼續し行くことであつた」こゝに、一種の偏執狂が生ずる。價值顛倒が入來して、目的と手段とが取り換へられ、安價精良なる物品の製造が手段となつて、無限に事業を膨張擴張することを目的とするにいたる。ストラウスベルヒは、「第一の楔を打込めば更らに第二のものが必要になり、その要求を充さんがためには活動を擴張しなければならず、次第に最初の目的から離れて行つた」と言つてゐる。資本家、企業家はただ事業を擴張する外に餘念はない。事業の擴張は擴張のための擴張で、無意味なものである。初代の資本主義は需要を目的として生産したが、現時の資本主義は交換を目的として生産する。言はば、最大限の營利がその目標である。よつて、生産せし物品の品質や種類は問題に上らず、ただ賣行きが問題となる。これを如何にして賣るかといふこ

とよりも、何としても賣りさへすれば宜いのである。若し、低廉粗悪なる物品の方が品質の優良なるものよりも利益があれば、優良品を製造するが如きは資本主義の神聖な精神に背反するものである。資本主義でも、優良品など、言つては居るが、この場合には、何も倫理的意味あるにあらず、精良品の方が粗悪品よりも利益が多いといふ外には出でない。資本主義の唯一の標準は最大の營利であつて、その製造は一に利益の如何にかゝる。營利が主たるからには無限の競争をなさなければならぬ。こゝに實業が道德に反し、藝術に反して、何等の束縛なく、唯一營利活動を追求する理由がある。

かくて、資本主義は無制限なる競争によつて無限に營利を追求せんとする。資本主義には財産慾と金錢慾とが強烈にはたらいてゐる。思ふまゝに貨幣的利得を占め、金錢慾を飽かしめやうとする。營利の故の營利、手段を擇ばざる營利、無制限の營利といふことが資本主義の資本主義たるところである。これは無論初代の資本主義にはわづかに現はれて居たことではあるが、それが、漸次優勢となり來り、主たる契機となつて、無制限なる營利を標榜するにいたつたのである。こゝに無制限なる營利は手段を擇ばず、合理的に發動させる主義が現はれた。こ

の場合、手段を擇ばずとは倫理的觀念であつて、善し惡しに關連するが、資本主義的營利は無論善惡に關係しないので、聊かも倫理に頓着しない。そこで、資本主義は手段を擇ばぬ惡辣なものとなるが、但し、これによつて、資本主義が無軌道を疾走するといふ意味には少しもならない。資本主義は實は一定の軌道を布敷して疾走するもの、この軌道を指してゾンバルト氏は經濟的合理主義 (Wirtschaftlichen Rationalismus) なる用語をしてゐる。經濟的合理主義とは純理により論理的に營利の商戦を進めることである (拙著「次の社會」第五章「資本主義」の限定のうち、「資本主義の心理的解釋」を通讀されたし) 資本主義は財産慾、金錢慾、貨幣利得を無制限に追求するにあつて、合理主義に依頼するのである。こゝに、營利精神と合理主義とが合體するにいたる。資本主義は無制限なる營利を經濟的合理主義なる軌道に上せて、如何なる手段をとらうとも顧みるところにあらざる風潮を打開した。資本主義は人情や道德を破つて社會的罪惡を造り出せしこと枚擧に遑なく、ただ儲かりさへすれば宜いといふ世態を造り出したのである。

かくの如き精神を表現する資本主義は量と唯物主義とに一切を還元せんとする。資本主義社

會に於て人々の興味をもち、最も賞讃するものは分量である。プライスが一般に大きいことを偉いことと間違へると言つたのは、よく資本主義の特質を言ひ表はしたものである。如何なることでも質には無頓着で、都市や國の人口でも記念碑の高さでも河の廣さ長さでも、鐵道の乗客數でも、船舶の大きさでも、一に量によつて、その偉大さが換算され決定せられる。就中、萬人最高の賞讃は巨額の金錢であり貨幣である。金錢によれば計算不可能なるものまで計算される。そこで、何でも高價なものが重視せられ、繪畫や寶石の値打も金錢に見積られ、人間の價値さへもその收得の如何によつて決められる。かくて、現代人には一切を量に還元する風習が發達した。無限な營利心は一切を量に資詰めて量的世界觀を開展したのである。それに、資本主義は主知主義、合理主義であるが、合理主義からは經濟偏重、唯物主義が現はれるから、資本主義からは畢竟數量的經濟觀、乃至、數量的唯物主義が現はれると見ることができやう。經濟價値、實利價値を最上の價値となし、藝術、道德、宗教、科學などは一切獨立なものとして認められず、それより派生するものでもあるが如く見られ、人間とその價値とも亦貨幣、實利、經濟に還元せられて測定せられることとなつた。現代に於ける實行偏重、經濟偏重、唯物史觀な

どは資本主義より發源するもので、現代人は經濟や物質に關係しないものは何でも價値がないと考へてゐる。唯物史觀などは實は兒戯に類する人世觀であるが、無産階級やその指導者達はさも奥妙な原理の如く心得てそれを謳歌するのは、矢張り、資本主義によつて開展せられたる唯物主義、經濟偏重主義の流れを酌むからであり、その餘毒に感染したからである。勿論今日の哲學や倫理學は一種の妖怪哲學、妖怪倫理學に止まつて居る。カント派とか新カント派とか言つて有頂天になつて居るが、實はかやうなものは科學前の產物たるまで、これ等の妖怪哲學や妖怪倫理學を斥けるには先づ以て人間中心のアニミズムより脱却しなければならぬ。先天的形式とか、先天的觀念とか、絶對思惟とか何とか言つて居るが、これ等は、どれもこれも、人間を無上絶對者の如く買ひかぶることから出發せし妖怪思想である。現時に於ける最も偉大なる哲學者や倫理學者と雖も廣義に謂ふ科學の光りを入れて居ない。この事については他のところでも精論するから省略しなければならぬ。併し、それとは反對に、人間を器機化し唯物化する經濟偏重、物質偏重、唯物主義も亦根本的に誤つてゐる。現代人が一體として斯様な皮相淺薄な人生觀に止つて居るのは、資本主義社會の本然の色調であり、その餘毒である。科學

も藝術も道徳も宗教も人間も一切經濟、物質、實利に還元し、無限的營利と貨幣愛好と金錢崇拜とに向けられる現代は實に貧弱な隣惑に堪えたるものである。貨幣や、實利や、金錢が一切合切であり、忙しく朝から晩まで營々勞働するのも、それが爲めであるといふ人世觀にいたつては沙汰の限りである。金錢が主で、學問も藝術も道徳も宗教も人間も獨立するものにあらず、派生的のものであると見る人世觀は脱線したといふより外はない。併し、資本主義文化をそれ自づからのものとして切り離して見ないで、これを一般文化の進動と見、ヨリ高度の文化に達する階段と見れば、資本主義文化にも亦優れたる意義と使命とを認めることができる。

資本主義文化は經濟的で物質偏重であるが、これによつて現實的な意義を設定することができる。現實主義は資本主義文化の大切なる部分である。それは空疎な理想に對して現實を置き換へ、そこに健全なる人生觀を打開する素地を用意する。無制限なる營利を遂行するには合理主義によつて居るので、器械の發明發達を促し、その爲めに、自然科学一般は急角度を以て發展し、こゝに自然科学の全盛期を打開した。技術的發達と、器械の發明と、自然科学と、自然とは不可離の關係を帯びて現はれ來り、自然は資本主義のまわりに附帶し步調を揃へて進ん

だ。こゝに、現實主義が用意せられた。現實主義そのものを切り離して見れば特殊の重要性を帯びないであらうが、文化を一般的に進め、高度の文化に達する一連鎖として見れば、現實主義にも重要な意義と使命とを認めることができる。これまで、自然科学の著るしき發達あり、自然を披開し征服することができた。人間は未だ精神世界を征服しえず、社會を征服しえないが、自然は最もよく征服され、その真相も明かにせられ、現時に於ける物質偏重文化を産出するにいたつた。物質過重の現實主義文化はそれ自づから切り離して見れば比較的低級な文化で、無意味であるとかへ考へられるが、文化一般の進動の邊より見、それを最後の高等なる文化に達する一里塚として眺むれば、そこに重要な意義と使命とを認めることができる。現實主義的文化は資本家に對してはその固有の文化であり、従つて目的であるが、それを通じそれを手段として到達せんとする理想文化に對しては手段と見るべきである。すなはち、現實主義文化の途を通じて高度の文化に達する見地に於てそれは道具たり手段たるのである。されば現實主義文化はその見地の異なるによつて二様に見られうる。一は、資本主義固有の文化であるとする見地から。他は理想文化に到達する通路であるとする見地から。前者からは、現實主義文

化は目的であり、後者からは手段であるとする見解が生ずる。勿論、現實主義文化は經濟偏重物質偏重で、高等なる文化ではないから、それを切り離して、そのみを對象とすれば、比較的低級な文化であると言ひ得るが、これを文化一般に關連させて眺むれば、高等なる理想文化に達するには必ず通過せざるべからざる通路としての意義と使命とを帯び來り、一種重要な文化であるとする見解が生ずる。現時、經濟偏重、實利主義、唯物主義、唯物史觀、現實主義をそれ自身目的であるが如く見做すところに著明なる時弊が現はれ、現代を以て物質中心であるとする忌むべき世態を開展したが、これを以て、更らに一層高度な文化に達する準備行動であると見れば弊害を刈りつくすことができやう。現實文化をそれ自づからであると考へるとこゝろに、物質偏重、經濟偏重、貨幣崇拜、唯物主義、唯物史觀といふような低級な文化が生ずるが、これを通路として、理想文化に到達するのであるとする見地からは現實主義文化必ずしも排斥すべきではないことを知る。

文化一般の通路の見地から眺むれば、資本主義的現實文化も、これに次いで現はれつゝある勞働文化も、各文化一般の進歩を促す一里塚たるに過ぎぬ。かくて、資本文化と勞働文化とは

進化の過程として見れば、一の状態が自然に他の状態に推移する過程と見られ、兩者の矛盾、背反、衝突といふようなことはあり得ぬが如く思はれる。併し、文化は社會組織を背後となし、それを豫想するのであり、また、各社會組織には夫々特殊な主人公としての支配階級が割據するのであるから、社會組織より見たる文化は對立關係、鬭争關係にあると思はざるをえない。社會は無階級社會より階級社會に進轉したが、階級の成立には國家組織を要するので、階級組織は國家出現後と考へなくてはならぬ。國家成立以來、文化の著明なる發達があつた。この意味に於て、國家と階級と文化とは相關々係にあると見られる。文化は社會が階級的に組織せられたる後に現はれ、國家のうちに於て文化は發展を遂げたので、文化融合及對立についても國家内の階級組織を基準としなければならぬ。特定の社會に於ける一時期の階級組織とは、支配階級が中心となつて、その他の一切の階級をこれに従屬せしむる體統即ち上下關係である。かくの如く上下の關係が一定の組合せをとるもの即ち社會組織であつて見れば資本文化と勞働文化とは別の社會組織を豫件とするものと言はなければならぬ。資本文化とは資本家階級を中心として勞働者階級などを一切附屬として従屬せしめ、上下關係をつくりつゝあるもの

によつて發現する文化、労働文化とは労働者階級を中心としてそれ以外の階級を一切従屬せしむる關係若くはそれ等と組合せをなすことによつて發現する文化を意味する。資本文化にしても労働文化にしても、空中樓閣に似たる空疎なものではなく、その發現には各堅固な地盤を有つので容易に彼と此とをすり換へることはできない。従つて、この二の文化の間には對立があり、鬭争が行はれる。支配階級として資本家の繁榮する社會及時代には、それに相當する文化が起り、これを凋落に導いてからでなければ、他の文化は擡頭せぬ。すなはち支配階級たる資本文化は労働階級によつて資本家階級が打破された後でなければ凋落衰敗しない。それに對し、労働文化なるものも労働階級が支配階級の地位に上り、資本文化を一掃するにあらざればその姿を鮮明ならしめ得ない性質のものである。殊に、階級組織は國家出現以來であり、國家内に諸々の階級が樹立し争ふのであり、支配階級が中心となり、その他の階級を從屬して、一社會一時代の社會組織を造るのであるから、甲の階級と乙の階級とは相合はず、従つて甲の階級の文化と乙の階級の文化とは對立關係にならう。社會組織とは一の階級が中心位置につき、その他の階級をそれに支配させるように構造することを意味するからには、一の階級が交代し

て支配階級が去り、他の階級が支配地位に上るにいたるまで、別の文化は入來しないと考へなくてはならない。

然らば、資本文化はその發達をなし遂げて労働文化にその地位を譲るといふ進化的見地からは何の奇も異もないが、資本文化を支配階級たる資本家と被支配階級たる労働者とに關連せしめて眺むれば、文化の交代は支配階級の交代を意味しなければならぬ。こゝに文化の融合若くは協調の背後には社會組織と、支配的地位と、それに關連して支配階級が最も有利なる生存をなしうるやう社會的仕組をつくる要件が具備されるを知る。

資本文化も労働文化も理想文化を指して進む過渡的文化たるに外ならぬ。文化思想史の上から言へば、資本文化が一定の役割をなした上で、その地位を労働文化にゆづれば、更らに、労働文化はその他に文化を推移して、最後の理想文化に到達するといふ順序である。

資本文化の無制限的營利と合理主義とは「自然」を本尊となし、「自然」によつて現代を特徴つけたが、その弊害も亦著大なるものであり、労働者を當面の敵として今正に紛々擾々たる鬭争の世界を開展しつゝある。資本家は無限の營利心に驅られ、労働者を掠奪するにいたり、

茲に資本労働二大陣營の對立となつて現はれてきた。素より、資本主義の發展によつて滋生せし諸々の弊害は資本家自づからの手によつて矯正せられぬのは明かである。如何なる階級如何なる集團と雖も利己的なるに於て古今變色なく、従つて、支配階級によつて滋生したる弊害を支配階級が自づから矯正すべくもない。この事は獨り資本家ばかりでなく、労働者に於ても毫も異りはなく、その他一切の階級皆然らざるはない。そこで、資本文化によつて發生したる諸弊害は他の階級によつて矯正せられることゝならう。茲に矯正せられたる階級と矯正する階級との別が生づる。現時の支配階級たる資本家は矯正せられる階級であり、現時の被支配階級たる労働階級は矯正する階級である。然るに、矯正は對立なくして行はれざるが故に、そこに必ず闘争が登場する。現時の二大階級の紛々擾々たる闘争はこの過程の途中に於て、必ず現はれる現象たるに外ならぬ。

資本文化を形ちづくる無限營利心と合理主義とを制限する役割は労働階級に與へられてゐる。併し、これを制限することになると、二の文化の對立となるが、この對立は更らに二の社會組織の對立となる。この社會組織は各資本家階級と労働者階級との占據するものであるか

ら、單に文化を融合するとか兩者を握手せしむるとかといふやうな簡單明瞭なる筆法を採用することはできぬ。文化進化史の見地に於ては、二の文化の推移は何の異もないが、對立する二の階級の抗争による文化の消長は又別の問題であらねばならぬ。資本家の無限營利心や經濟的合理主義を制限し、若くは、絶廢することになると、取りも直さず資本家階級の敗滅を意味することゝなる。然らば、文化の交換は更らに階級の交代の問題となり單に文化が彼此推移するといふ文化史的問題とは別なる一問題として發展し來るであらう。こゝに、文化融合一般の困難なる問題が横はる。

文化推移の問題は支配階級と社會組織との問題を合むとすれば、單なる文化問題としてこれを取扱ふわけには行かない。米田庄太郎博士はこの問題に關してかく言はれる、「ブルジョア階級の消滅と云ふことを必然的に労働階級が暴力を以てブルジョア階級を撲滅することであると解するならば、夫れは大なる謬見である。……今日のブルジョア階級と労働階級との階級闘争は、つまり労働者階級がブルジョア階級を征服して、自から支配階級の地位に上らんとすることを意味するものであると解する人があるならば、其の人は大なる謬見に陥つて居ると思

ふ……要するにブルジョア階級の衰退とは、つまりブルジョア階級が其の文化的使命を盡して完全なる文化の發達に必要な可らざる條件或は手段を完成し、そして其の文化の高等なる發達の地盤として眞實なる人道的社會の出現を招致すると云ふ意味にて始めて重大なる意義を有するものとなるのである……然らば、労働階級が眞に人道的なる社會組織を確立するために、如何なる方法を用ふ可きか。約言すれば、その方法は、一方に於ては労働組合運動、政黨及び其他の労働團結の實力によつて、ブルジョア階級の專横を抑制しつゝ、漸次に資本主義的企業組織の改造を促し、他方に於ては其健實な又優秀な精神的發達によつて、ブルジョア階級の眞の自覺を促す事である。要するに労働者階級の革命は暴力的でなく、主として精神的である可きである。暴力を以て勝つものは、又暴力によつて滅される恐れがあるが、精神的勝利は永久的である」著者はかゝる問題に對し革命よりも漸進的變化を以てする進化によるべきであるといふ意を明かにしてゐる。如何なる社會でも變化せざる社會なく、推移しない社會はないから、漸次的變化は止むをえざること、また必ず有りうる事であるが、突然なる變化は社會の機能を破り、社會の存在を脅かす虞れがある。著者は進化論者であり、徐々微小なる變化を積

み重ねて、安全に移動すべきであると考へてゐる。これに關する著者の見解は拙著「階級闘争の研究」第七章「革命と進化」に載せて居る。著者は漸次的進化を以て安全に推移すべきであるとなし、進化によつて社會は進歩發展しなければならぬといふ意見である。更らに、著者は同書第八章「時期尚早の革命の惡果」に於て、急激なる變化による社會的害惡を述べてゐる。なほ、同書第一章第六節「人間の心理的變化」に於て、著者は社會は寧しろ、徐々に變化するから、外的な政治的變動は眞の改革ではないとし、眞の變化は思想と感情との變化であるとして居る。これ等の論旨は同書について十分明かに看取された。

ウォルフス氏は消費社會論に於て、社會主義も亦外形による變化に依るよりも心理的變化を重視すべきであるとなし、かくのべつてゐる。Socialism should, I suggest, build on not only a totally different organization and consumption. Its standard of civilization would be the level of quality in the consumption and activities of the community. But that would entail an even more important revolution than most professional revolutionaries contemplate. It would require

to a very great extent a shifting in the angle of vision of both society and the individual from production to consumption... Once the Psychology of production and consumption were grasped, we should rapidly see that it is infinitely more important for a society or individual that a man or woman should enjoy or produce a play or a book or a picture, or should play football or dance, or should talk or go on the river or picnic or cultivate a garden or teach children and adults or make love to one another than that they should make the fraction of some article which is neither beautiful nor useful.

如何なる社會組織をつくつても狼の如き人間の寄り集りでは策の施しようがない現時の人間と雖も未だ心理的變化を遂げて居らず、極端に利己的で、狼の如き性情を有つからかくの如き人間に對して如何に理想的社會を造つて與へても、何の役にも立たぬであらう。現に見るが如く、各種の理想的施設や機關は何づれも慘澹たる状態に陥つてゐる。十九世紀はウ

オーレス氏をして Wonderful Century と嘆ぜしめしが如く、百年間に自然科学によつて實に驚異に値ひすべき數多き發明發見をなしたが、これ等文明の利器は世界的な戰爭による破壊のために、また、弱者劣者を掠奪する爲めに悪用せられて、毫も人類の福祉を圖るために利用せられて居ない。かくの如き悪性なる人間に對して如何に善美で理想的な社會を造つて與へても、善用利用する代りに、それを悪用逆用して害を及ぼさずにはをかねであらう。現に民衆の政治的福利を圖る道具としての代議政治は少數特權者の私利を圖るために用ゐられ、民衆の福利に關心するを見ない。これ著者が外形的な變革を無効なりとなし、寧しろ内的な心理的な變化を先也となす所以である。外的な手取り早い短氣な變革は社會に害を與へるのみで、豫期に反し、社會の健全なる發達を促さない。支配階級に對する極端な反感と憎惡とを以てせず、事態を正視するなれば、何人も革命に依るべきでなく、徐々たる漸次的變化によつて改善をなすべきであり、殊に内的な心理的變化の問題に着目すべきであると考えらるであらう。それに関し著者は詳細に「階級闘争の研究」に取扱つてをいたから、これについては同書の通讀を乞はなければならぬ、著者はこの書によつて階級間協調の端緒をひらき得んことを希望する。

資本文化が労働文化に推移するとしても、突然なる推移は文化の健全なる發達を促さぬので回避しなければならぬ。第一、突然なる變革は多く外形に止り、内的たりえぬから、眞の變革とはならぬ。第二、眞の變化は徐々移動するところの進化の形式に依るべきである。第三、心理的變化を重視すべきである。資本文化が何づれの方向に進むや未だ明かでない。それには、次に現はれる社會が如何なるものであるかと決定せられないからである（拙著「次の社會」を通讀せられたし）次の社會が如何なるものであるやについては、一般的な原則を確定しうるのみで、具體的には次の社會の何であるやよく分らぬ。それ故、労働階級が資本文化を變へるとするも、これを如何なる社會に導入するか具體的には何も分らぬ。

よつて、茲にはたゞ抽象的に資本文化は労働文化と對立をなし争覇をなし、一層高次の文化に向ふと言ひうるに過ぎない。資本家階級は暴力によつて革命を起し、支配階級の地位に上つたもので、これによつて資本文化も現はれたのである。これに次いで現はれんとする労働文化は資本階級に對抗することによつて形成せられるとすれば資本文化と労働文化とは鬭争關係にあり一が他に交代する關係にあると思はなければならぬ。但し、文化はいつでも一層高次のな

文化に進化する性質のものであるから、資本文化と労働文化の接觸交渉に於て徐々なすべきをなし、進化の形式に於て進み行くことは避くることはできない。資本階級は暴力によつて貴族階級を打倒したが、かくの如き革命の方法を繰り返すべきではなく、安全なる航路を進行せんに必ず進化の形式により徐々變化の途を辿らなければならぬ。

労働文化は一には貴族文化を倒せし資本文化に對立し、二は今後發達すべき理想文化に呼應する。併し、労働階級たる集團を基礎とする労働文化は畢竟労働者限りの文化であつて、それは資本文化の如く偏狹で排他的なるに於て何の變りはなからう。資本文化は資本家の圈内に於ける純階級的なものであるが、労働文化は人類的意識にまで進展すべき性質のものといはれる。但し、労働階級そのものも亦集團本能によつて終始する集團的なもので、偏狹な利己主義に支配せられ、排他的なるに於ては毫も資本家に變りはない、この事は集團説の指示するところによつて明かである。労働大衆など、言つて、階級的立場から人類的立場に移動して行く傾向はあるにしても、労働階級それ自づからは未だ純然たる階級的立場にある。労働階級を以て階級的立場にある殿軍と考へることも早計であらうから、階級的立場にある集團は尙續起續發するで

あらう。然らば、大體、労働階級の立場も亦純然たる階級的のもので人類的のものでないと言ふことができるであらう。然らば労働運動により、労働階級の解放によつて、人類的立場を開すると考へることはできなからう。労働者解放運動は全人類を含む運動に推移擴大すると言ふけれども、それは口上や論理の上でのことで、資本家階級がその昔全人類の美名によつて自由と平等と博愛とを絶叫し、目的を達するや、資本家階級かぎりの自由と平等と博愛とにすりかへたと略同一筆法たるであらう。労働概念は恐く筋肉労働を以て界とするであらう。これ、集團本能に支配せられる餘儀なき結果である。労働大衆は略全人類と同大であるから、筋肉労働の外、精神労働をも含み、それは更らに擴大される傾向であるから、労働者意識は人間意識に發展し、竟に人道意識にも極ると考へられるであらう。但し、これは論理的傾向たるまで、集團意識に制せられる現實としては、そんなことは絶えて行はれないであらう。労働概念のうち筋肉労働の外に精神労働をも含む傾向を生じ、労働者と言へば、筋肉労働者と精神労働者との二を含むといふやうに解釋するものもある。たとへば英國労働黨の如し。併し、佛蘭西小學校教員運動の場合の如く、精神労働者としての教員は容易に筋肉労働者の仲間入りをす

ることができない。佛蘭西の労働組合では容易に小學校教員を組合員として採用しやうとしない。小學校教員は自己の手によつてその解放を策する能はざる劣弱なる團體であるから、労働組合に加入して、その勢力を増大しようとするのであるが、労働者は俺等と教員とは異ふと言つて容易にその加入を肯じない。こゝに、筋肉労働者と精神労働者とのこゆべからざる講渠がある。但し、労働概念はついに筋肉労働と精神労働とを併せ含むことにならう。この事は労働概念に限らない。その他の場合に於ても同一である。平時、政黨と言へば、分立して政權争奪に寧日もないが、一度外敵と戦端をひらかんか、忽ち協調して、協同一致の歩調をとるであらう。労働者と雖も、一般に集團の擴大し行く趨勢に順應し、その集團は、他の集團をいゝものではあるが、併し、國內の小集團と同じく、集團意識、階級意識は容易に消滅しないから、事々に固有な労働階級意識をゆり起して、精神労働者に向ふへまはし別異な集團として對立するであらう。

一般に階級意識は漸次人間意識、人類意識、人道意識にその立場を譲るであらう。私と雖も理論的にはかくの如く看取し解釋する。但し、人間が絶滅して最後の幕を下すまで、人類を全

體としての意識が生ずるかどうか疑問であるとも考へる。どこまで行つても集團又はそれに類似するものゝなくなるやうな状態を想像することができない。さすれば、集團意識、階級意識はついに地球上より消失する機はないであらう。そこで、労働者階級の場合に於ては次の如く考ふべきであらう。

労働概念は漸次擴大し、筋肉労働の外に精神労働をも含むにいたるであらう。なほ、労働概念は全人類にまで擴大なる契機を包藏するによつて、全人類、全階級、全集團の意識をもち、人間意識、人類意識、超集團意識、人道意識にまで進展するであらう。併しこれは大體の傾向であつて、現實としては、労働概念は筋肉労働者に局限せられるであらう。無論、形勢の如何により、環境の如何によつて、カメレオンの如く労働概念は變色して、時に筋肉労働者、時に兼精神労働者、時に全人類といふやうに移動するであらう。但し、一般には、集團本能による集團意識のはたらしきによつて、それは筋肉労働團として残るであらうし、従つて、この團體の福利を限り増進せんとする集團運動となつて現はれるであらう。今日の労働者の意識は無論極端なる階級意識である。今日の労働者は左に資本家を排し右に精神労働やその他の集團を排する階

級的なものである。資本家に對立して、解放の必要を感じしものは精神労働者ではなくして、筋肉労働者なるが故に、先づ筋肉労働者の集團意識が生じ、それに基いて、筋肉労働者の團結が現はれたのも敢て怪むに足らぬ。一度び筋肉労働者が團結せし以上仲間同士は利害を同一にする集團たりとの意識が明かであるから、この一團を限りとする意識の發生を避くることはできない。こゝに、筋肉労働者仲間の集團がつくられ、階級意識が旺盛となる。筋肉労働者運動と雖も、理想文化を建設する手段たるべきであつて、文化上、それ自身目的ではない。こゝに労働文化の理想開發上重大なる使命がある。併し、これは文化進化史上に於ける解釋で、現實の集團生存上に於ける労働者運動とは何の關係はない。現實としての労働者運動としては筋肉労働者の我利一天張りであり、他の階級を一切排斥し驅逐し、獨り權益を占斷する性質のもので、敢て文化發展史に貢献するか否かを自覺するものでも、それを目的とするものでもない。往古今來、文化發展史に貢献するなどいふ目的を以て進んだ集團、階級なるものはない。これ、恰も平時國內の小集團が各蝸牛角上の紛争に終始して毫も國家的觀念のないのと同である。資本家階級と雖も、文化發展史の上に貢献をしたのは明かで、經濟偏重、合理主義、自然

科學といふような手段を通じて、文化發展史の一階段をつくり上げ、これを次の階段に進めたもので、正に文化發展上の一大貢獻である。だと、經濟偏重、現實主義、合理主義、唯物主義を目的となし、それ自づからを最高文化價值として、ブルジョア階級のみの權益を維持増進せんとするところに嫌惡すべき排斥すべき事態が現はれたまである。されば、労働階級運動が齎らす間接の文化發展史上の利益なものは毫も労働階級の運動を是認せしめるが如き理由となるものではない。

なる程、労働概念は擴大して精神労働者を含み、やがて、人間意識、人類意識、人道意識にまで高まる契機を包藏するであらう。それは、労働者の如く忌むべき唯物主義者と雖も、一般文化に貢献したのであるから、労働文化も亦間接なものとしては矢張り一般文化に貢献する使命をもつであらう。すなはち、この場合、労働文化は一般文化の手段と見られるのであるが、それ自づから目的として見る場合、労働者階級を限り權益を増進する底のものなるは自明である。ここに、労働者階級運動の集團主義が現はれ、筋肉労働者を中心とする利己主義がその勢威を張るを見る。

私は階級的立場と人類的立場とを區別する。往古今來、人類は階級的立場に終始したが、今日以後、漸次、人類的立場が入來するであらう。すでに、國際聯盟などによつて示される如き微弱な朦朧たる人類的立場が歩み入つてある。文化發展史的立場は人類的立場であると見ることができよう。理想的文化を開展すべき目的を以て進動する諸文化は一樣に最後の文化に寄與貢獻するといふ意味に於て、何づれも人類的立場にあると思はれる。但し、諸文化の運載者たる諸階級は何づれも階級的立場にあるに異りはない。

資本文化と労働文化とが資本階級と労働階級とを表徴する限り、階級的立場にあり、彼と此とを融合し、協調させることは望みなきことであらう。階級的立場にあるものは、その何たるを問はず、當該階級を限度として動くのであるから、排他的で、對立的關係にある階級を一切驅逐し去るは明かである。従つて、對立的排他的關係にある資本文化と労働文化とを融合し協調するは不可能といふ斷定に達する外はない。その他、一切の對立的文化の場合に於てもこの事は同一である。

八 社會的傳統の類似及同一

以上の考案を通じて、すべての社會的傳統は社會心理的のもので、その起源は集團による集合力に依存する。それ故、集團に入り込めば集團は共通なもとして風俗習慣、職業、經濟、文化を強要し、これに従はざるものを集團外に驅逐し去る。

異なる社會傳統を所有する二の集團の融和し協調せざるはそれが爲めである。二の集團は各異なる社會的傳統を有するによつて集團本能は類同意識を發動させ、異類としての社會的傳統を排斥し驅逐する。この場合、排斥し驅逐されるものは社會的傳統であるけれども人間がそれを運載するがために、人間それ自づからが排斥せられ驅逐せられることとなる。こゝに、差別と偏見とが起り、融和せざる社會現象が現はれる。差別し偏見を以て排斥するものは支配者であり、差別され偏見によつて排斥されるものはいつでも奴隷の側につく。

社會的傳統が社會心理的產物たりとする斷定によつて、融和及協調の問題は社會的傳統の類似及同一の問題に轉じ、やがて、社會的傳統を類似せしめ、同一ならしむることが、融和及協

調の基礎となるといふ斷定に達するであらう。この事については、別に論述する。

参 考 文 籍

- 一 海野幸徳「階級闘争の研究」第五章
「傳習と集團的嫌忌」については第五章第三節に論じてあり、傳習の社會的起源が明かにされて居る。なほ、階級問題の社會心理的根據については第五章を通讀せられたし。
- 二、海野幸徳「階級闘争の研究」第十三章第二節
風俗習慣、職業、文化の差異若くは類同が如何なる作用をなすかについては指定節を通讀されたし。
- 三、米田庄太郎博士「現代文化概論」
文化、資本主義文化、勞働階級文化等現代文化一般について明確なる分析闡明あり、ついでに見らるべし。
- 四、海野幸徳「次の社會」第五章

指定章に於て資本主義の本質を明細に分析す。章末に参考文献を掲げあれば資本主義文献はその中に求めらるべし。

五、海野幸徳「閥の偶像」第九、十、十一章

閥と社會的地位の分配、閥と素質を論じ、類似及同一によつて社會的闘争の行はるゝを描き出す。

六、海野幸徳「社會政策概論」第一章

貧乏と奴隷との關係を述ぶ。

第五章 人種的同化

一人種的特質の同化

集團間の闘争が「同一ならざること」によつて起るとすれば、人種的な身體的な特質は他と同一ならざることが最もよく目立つといふ點に於て、集團間、人種間闘争の素因となる。然らば人種的特質、その身體的特質を除去せずしては「同一」なる能はず、従つて、差別と偏見とによつて嫌忌し合ふ行動即ち闘争を除くことはできぬであらう。

目立つといふことが、何故、そのような、重大なる結果を生ずるかと言へば、集團間、人種間の闘争は差異によつて生ずるのであるが、差異が一見目立たざるものは、その表彰たることのできぬからであらう。このことは皮膚の色、毛髪の色、瞳の色が如何に人種的反感を激成するかを見ればすぐ分る。色がその他の人種的差異よりも、人間の生存にとつて重大な爲めでは

なく、人種間の出来事として色が最もよく目立つから重大な事件と思はれるのである。この場合、理性がはたらくよりも、感情がはたらくのである。感情により、色をもつて最も嫌忌すべき人種的特質と見做すのである。が、何故、感情は色に向つてそのやうな重大な意味を付するかと言へば、それは目立つからであると言ふ外はない。パルク氏は *Race prejudice is a function of visibility. The races of high visibility, to speak in naval parlance, are the natural and inevitable objects of prejudice* と言ひ、人種的偏見は「目立つ」ことから來り、人種そのものが既に最も目立つといふかどを以て偏見を生ずるのであると説いてゐる。人種は特定の身體的特質をもち、皮膚、瞳、毛髪の色、身體の釣合、身長、頭の形状などといふ外形的に目立つ特質をもち、それによつて、他の人種から區別せられる。普通、人種的特質は個人的特質を壓して優勢となる。これ、それが、如何なる個人をも、その特質によつて區別することができず、いづれも、それを個人の屬する人種に歸してしまふ所以である。最初日本人が西洋人を見た場合、容易に西洋諸國の國民を彼此區別することができず、ごつちやにするのであるが、米國人英國人といつても、個々識別することができず、困迷するのである。

西洋人の方から東洋人を見ても同じことで、通常、日本人と支那人とを混同し、日本人は米國や歐洲で屢々支那人と間違へられて憤慨する。これはいづれも人種的特質が目立ち、個人的特質が背後に押しやられ、恰も個人なき如き觀を呈するからである。これについてシエーラア氏

(N. S. Shaler) は *The reaction of the members of the racial majority to the aliens is categoric rather than individual and sympathetic* と云つて居る。外國人、異人種に對しては、個々人は人種的定型に埋没して、その姿を現はさぬのである。人種のもつ身體的定型は最もよく目立ち、これによつて、個人的特徴特質をかくすが、その上、人種の使用する格別なる表情、身振り、風俗習慣、及び、衣服などによつてそれを強調し加重するので、人種的特質が一層目立つようになる。かくて、目立つことにより、人種的外形が嫌忌と差別と偏見との對象となるのである。皮膚の色が特に人種的反感を唆るものは目立つからである。白人種から言へば、亞細亞人を始とする黄色人種を極端に嫌忌し排斥し、黄色人は又黒人を嫌忌排斥するが、その根據は理性に照らして見れば、比較的輕微で、末稍に類すると考へられる色そのものである。併し、色が人種的特質の中、特に目立つ限り、色によつて現に見るが如き不合

理なる人種的反目を生じ、白人種を優等、黄色人種を劣等と言ひ、若くは黄人種が白人種の壘を摩するにいたれば危険なりとして黄禍を絶叫するも又餘儀なき次第である。黄禍説はウヰリアム二世によつてその代辯人を得たまでで、つねに西洋人の心理に往來する亡霊であり、時あつてその姿を鮮明にするだけである。この理により、西洋人と東洋人特に日本人の調和とか提携とかといふようなことは、生物學上殆んど不可能であるといつてよい。政治のうちへも生物學説や社會學説は入り込まなければならず、集團説の光りに照らされないような外交は確實な基礎のあるものではない。如何に西洋人と東洋人とが外交上辭令を交換して、巧言令色をつくしあつても、その心底にはつねに抜くべからざる嫌忌と差別とがあり、兩々偏見をもつて相對す。偏見のないような國民、人種なるものは地球上に一もないであらう。

この偏見の根據はたゞ異ふといふことからくる。異ふものは絶対に嫌忌もし極力排斥もしなければならぬ。そこに、理否の觀念がはたらくのではなく、感情により、本能によつて、自然律を通じて、不可抗なるものとして、生物學的觀念がはたらくのである。異ふもの、特に目立つて異ふものに向つて、嫌忌と排斥との突撃が必ず行はれるのである。

パルク氏は日本人の渡米するや、いづれも新大陸永住の目的をもつて來るが、米國人の生活に參與するを得ず、また、米國人の關心に同化することができないので、望みをなげ棄て、歸國すると言つてゐる。米國人は皮膚の異なるによつて日本人を受け入るゝことができず、日本人も亦同じ理由で同化することができないのである。双方から色によつて唾み合ふ人種的反情は、日本人をして容易に米國に同化することをえざらしむる。リバア氏 (Pitt-River) は太西洋屬領の人種と英國人との同化を人類學見地より研究したが、氏は文明人と野蠻人とは人種の異なるによつて文化を流通し融合することができないと言つて居り、(The Clash of Culture and the Contact of Races: an anthropological and psychological study of the laws of racial adaptability, with special reference to the depopulation of the Pacific and the government of subject races, London, 1927) 英國人と、土人との風俗、信仰など文化を融合し、土人の文化を文明人の水準まで高めるには兩者の雜婚にまつ外はないといふ説である。リバア氏は血を混ぜ合さずして、文化のみを融合すれば、土人の文化を破壊し、竟に土人を絶滅する結果と言つてゐる。異なる文化を接觸すれば、高等なる文化は劣等なる文化を

壓迫し、劣等民族の生活を混亂し、屢々、その絶滅を來す。そこで、リ氏は兩者の血を混ぜ合はさずして、二の異なる文化を融合することはできないと考へるのである。二の異なる文化を接觸融合することには多大の危険が伴ふ。二の異なる文化を同化する場合、文化人側から特に寛容の精神がいるとムンツエ氏 (E. E. Munsz) は言つ居る。氏は *Race Contact* なる著書に於て、野蠻人と文化人との接觸、文化の融合について綿密なる研究をなして居るが、氏は「原始人の風俗習慣は夢幻的産物ではなく、原始人をして最もよく生存することのできるように環境に適應せしめて造り上げたものである。よつて、これを變化するといふようなことは容易なことではなく、原始人の生きるか死ぬかの問題にかゝる。殖民政策上の原則として、土人の風俗習慣文化を蔑視することをやめ、文化人との間に取與の形ちによつて徐々に土人の社會的傳統を變更する方針を確立しなければならぬ」と言つてゐる。原始人の生活を急變し、その住む自然環境より急に引き離せば混亂と混亂を生ずるばかりであり、土人の社會組織を破り政治組織を覆へし、ついに、土人を亡ぼすこととなる。一般的原則として、二の接觸する人種があまり縁遠きものでなく、その文化もあまり懸絶して居ない場合には、融合には比較的容易であるが、

これが距れば距る程、兩者の接觸に悪影響を與へ、ついにその死滅を促すようにもなる。そこで、リヴァ氏は農業經濟に到達した原始人は接觸によつて比較的強固であり、その地歩を維持することができ、遊牧人種はこの次に來り、最も文明人に適應することのできないのが狩獵人種であると言つてゐる。これに應じ、政治組織の發達せし人種は外來者の壓迫を感ずることが少く、然らざるものは外來人と接觸することにより容易に土崩瓦解する。熱帯地方など、特殊な風土病、傳染病などが金城鐵壁となつて白人を防遏するものにあつては、その地歩を保つことができないが、然らざるものは白人に接觸することにより自然消滅となる。ム氏は一般に白人と土人との融合は宗教や、道德、風俗、習慣を變へれば土人の滅亡を來すから、先づその經濟組織を變へるがよく、一層高き文明に達するには商工業組織を先づ改善しなければならぬと言ひ

It is evident that the disciples of civilization and gradually, and with many periods of regression, work up to a remodeling of the entire social structure.

The gradual assimilation of European Culture is bound to take place, and the native is better off if he is allowed to make his own adjustments as the

need arises; forced acceptance of a culture only breeds maladjustments.
と論断してゐる。

文明人と野蠻人若くは劣等文化人との接觸融合は徐々成し遂げられなければならぬ。これが文化の隔絶したる兩人種の接觸融合する場合の原則たるであらう。異なる文化が接觸融合するにあたり、如何なる場合に於てもこの原則によるべきであるが、殊に、文化の差異が甚だしい兩人種間の接觸融合は極めて徐々に行はれ、劣等なる民族が高等なる文化に適應する餘裕を與へなければならぬ。然るに、いつも、優等人種は急速劣等人種の文化を變更せんとするので、急にその死滅となつて現はれるのである。文明人から見れば、劣等人の風俗、習慣、道德、文化を變へることが最も高き恩恵と思ふであらうが、それよりも、劣等人は多年徐々として自然發生せしめし社會的傳統とその環境によつて最もよく生存するにいたりしものであり、劣等人種にとつてこれ程優良なる生存條件とはないのである。基督教の宣教師が原始人の社會的傳統に適合しない基督教を傳ふるが如きは最も拙劣なる方法である。土人にはそのもつ原始宗教や魔術が最も安全なる生存方法たるのである。

この事は歴史的に見ても了解しえられる。希臘人、羅馬人、フィンニシヤ人、カルタコ人などが劣等人を征服融合して成功し、現代人が人種の融合に成功しないのは、希臘人、羅馬人などの場合には人種の距りが少く文化の差異も比較にならなかつたからであり、現代人にあつては人種的差異が顯著であるからである。地中海をめぐつて接觸せし諸民族間には現代に見るが如き文明人と自然人との距りはなかつた。それ等の諸民族は同一人種に屬した。そこで、色によつて融合を妨げ、對立となり、鬭争となるようなことは生じなかつた。なほ、諸民族間には、打ちこゆべかざるが如き文化の隔絶あるにあらず。自他文化に於て容易に交通し推移することができた。往時に於ては、現時見るが如き發明發見が行はれず、自然科学の進歩も著しくなかつたので、民族間の差異と言つても、現今の如き隔絶せしものではなかつた。かゝる状態に於ては、希臘人、羅馬人、フィンニシヤ人とそれと接觸せし民族の文化は比較的接近し、劣等民族が優等民族の文化に混迷し、度を失して適應すべからざるが如きことはなかつた。それに、その時代には現時見るが如き迅速なる交通々信により、且つ、猛威を逞ふする武器によつて、瞬時に劣等民族を掃蕩し、これを自然の住居から追放する如きことは行はれなかつた。接觸鬭

争も比較的緩徐に行はれ、征服、追放も徐々にあつたから、劣等民族は適應する機會を得て、死滅の運命を免れることができた。それに地中海邊に行はれし民族の消長隆替であるから氣候の激變もなく、彼此移動するに都合がよかつた。現時の諸人種は他の人種の風俗、習慣、文化を極度に憎悪し排斥するので、劣等人種の社會的傳統も一朝にして滅され了るが、往時に於ては、他民族の社會的傳統に對する寛容から、決してかゝる急激な變化を促す必要がなかつた。たとへば、フィンシヤ人が周圍の劣等民族を征服しても、自己の社會的傳統をこれに強はず、自國の國民性を無視してまで彼征服者の社會的傳統を尊重せしが如き即ちそれである。されば彼征服民族もその社會的傳統を一時に棄てる必要なく、徐々に征服民族に適應する餘裕があつた。羅馬も亦被征服民族の風俗習慣、道德、結婚に干渉せず、社會的傳統に關しては干渉主義をとつた。往時に於ては、社會的形式と社會的傳統との間の距離が少かつたが、その外、往時、優等民族は寛容をもつて劣等民族をまち、その適應をなし遂げさせる餘裕を與へた。なほ劣等民族同化策も現時の如き社會的傳統を打ちくたくが如き拙劣なる方法をとらず、風俗習慣、道德、宗教には觸れずして、同化に有効なる方法たるべき經濟的組織と機關とを變更した。商

工業の組織を優等民族のものに融合することは、通常、劣等民族の喜び迎へるところであるから、これについては何の面倒も起らなかつた。

希臘人、羅馬人、フィンシヤ人、カルタゴ人と被征服民族とは同一民族に屬し、同一の氣候のうちにあり、同一な疾病に罹り、社會的傳統に對しては寛容の精神をもつてまち、急激なる變化を加へず、徐々變化し適應することを許すので、容易に同化が行はれたが、現時、西洋文明國民のなす一瀉千里的な社會的傳統の變革と、人種の差異と對立と、氣候と疾病との不適應とは劣等人種を亡ばさずにはをかない。こゝに、現代文明人と未開人との間に適應せざる理由がある。

二 人種同化の過程

リヴァ氏は文化の隔絶する人種の融合するのは血を混ぜ合ふことの外 (apart from the mixture of blood) 不可能であるといふ意見であるが、この斷定は未だその後の研究によつて十分確められない。通常、二の隔絶する人種が接觸するとき、文化の差異の大なるによつて

容易に適應することができないが、優等人種が寛容の精神をもつて徐々に推移し、新状態に適應するを許すなれば、必ずしも優劣兩人民の融合協調は不可能ではないであらう。リヴァ氏は優劣兩人種が接觸するや、必ず未開人の文化を破壊し、ついにそれを衰滅せしめるといふけれども、徐々に新文化に適應せしめ、新状態に適應せしむるなれば、穴勝、血を混へずしては不可能であると考へるにも及ばぬかも知れぬ。但し、人種の差異が甚だしければ、それだけ兩人種を適應せしめ協調せしめることは困難であらう。ムンチエ氏の言ふが如く、現代文明に對し農業民族が最も適應性をもち、その次は遊牧民族であり、狩獵民族が最も劣るのも、人種的距離によつてさうあるに外ならぬ。優等民族と劣等民族と接觸するときは、現代商業による神経過敏と不安と混亂とが劣等人種を苦め、限りなき營利の探求、有害なる享樂生活、他の宗教、道德に對する限りなき憎惡、他の風俗習慣に對する極端なる排斥が、未開人の安靜な秩序ある生活を根本より破壊し、未開人の會て見聞せざる器具器械が人力の代用をなし、それを遊惰ならしむるなど、未開人の生活は根本より破壊せられる。かくの如き状態によつて、文明人と未開人との接觸が行はれたとすれば、リヴァ氏が血を混へずして文化、社會的傳統のみを融合す

れば必ず未開人の死滅となるといふ斷定も即刻受納することはできないであらう。血を混へれば人種の交雜によつて自づから兩人種は平均せられるから、兩者の距離はなくなり、文化、社會的傳統は自然に適應し、ついに融合するにいたるは明かである。

文化の差異ある兩人種の接觸が羅馬、フィンシヤの如き状態に於て行はれたとすれば、現今に於ても何等人種間の文化、社會傳統の融和を不可能ならしめるようなことはないかも知れぬ。なほ、人種間の接觸と従つて生ずる文化、社會傳統の融合によつて融和せしめ協調せしめることは不可能ではあるまい。人種の差異が甚だしくなく、同一の氣候にすみ、疾病に對しても同一の抵抗力をもち、かつ優等人種が寛容もつて劣等人種の文化的向上をまつが如き場合には、人種間の融和と協調との實現は決して困難ではないであらう。米國に於ては、Americanization によつて諸人種殊に類縁の近き歐洲諸國民を融合する實驗をなしつゝあるが、かかる實驗はいづくに於ても實行可能であり、また、成功するとも考へられるであらう。それに、ムンチエ氏の説くが如き方法に依れば、恐らく人種の距離如何に關せず人種の接觸により融和と協調とを齎らすことができるであらう。

三 米國に於ける人種の同化

米國化 (Americanization) は其領土に移住し來りし諸人種の生物學的同化と社會傳統の融合によつてその目的を達するが、同化は原則として類同意識により同氣相ひく如くなさなければならぬ。米國內に於ける諸人種は東洋人を除けば人種の類縁も近いから、往昔、希臘人、羅馬人、フニシヤ人がその周圍の粗野なる人種と接觸同化せしが如く、竟に一人種として成立し類同意識により同じものとしての意識をもつ一團たるに至るのであらう。されど、同化の前提として、先づ、歐洲諸國民を抱擁する如き國際的精神が發達しなければならぬ。如何なる場合にも、國際心が發達し、國家的觀念と共に國際的觀念が旺んにならなければ、超集團的態度が生じ、差別と偏見とは後退するに至らぬであらう。目下、列國列強の間には瞬時も弛緩せざる敵愾心が漲つてゐるが、若し、これ等諸國民の間にその行動を終始支配する國家心と共に國際心がはたらきを盛ならしむれば、異なる國民にてありながら恰も一の集團としての心理を生じ、自他融和し協調するにいたるであらう。然らば、この事は一層國內に於てさうで、若し、米國

内に雜居する諸國民間に超集團的精神が發達し、米國人が歐洲諸國民と同一であると感ずる心理を生ずれば、一團として一國民としての集團的態度を發生し、竟に一人種として融合するにたるであらう。

一國內に雜居する諸民族間には普通強い排外心があり、容易に他人種と雜婚せず、自他隔離して生活するが、それでも同一の場所に在ること久しきにわたれば、自他如何に嫌忌しても漸次雜婚をなし同化するにいたるを見る。異なる人種、異なる國民、異なる文化をもつ集團は交雜することを嫌ふが、猶太人の如く人種の純粹性を保存せんとつとむる民族と雖も、居住地民族と交雜するを避くるをえず、漸次雜婚をなしつゝある現狀である。米國內に於ける諸人種諸國民は一樣に雜婚をなし混合しつゝあり、これによつて、一國民としての意識を生じ一國民としての成立を急ぎつゝあるは明かである。その上、社會的傳統を統一し、異ると想ひ考ふるところのものを輕減乃至除去すれば、米國の如く雜多な異分子によつて成り立つて居る國と雖も、漸次一國民として強固な集團を形成するにいたるは期してまつべきである。

米國內異分子の同化は先づ異なる小集團間に超集團的態度を獲得させることから始めなければ